
カリスト帝国外交顛末録

田中美紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カリスト帝国外交顛末録

【Nコード】

N8405Q

【作者名】

田中美紗

【あらすじ】

アリアはカリスト帝国軍元帥指揮官。

敵無しと恐れられた猛将だが、小柄で愛らしい容姿を持った女の子。もちろん戦争となればだれよりも手柄を上げる実力者だが、20代半ばの普通の公務員である一面も持つ。そんな彼女はどうしても逆らえない人物がいた。

それは、絶対の存在、カリスト皇帝。彼の命令ならどんな命令でも火の中、水の中。

100対1000の無茶な戦争に勝てと言われれば勝ってきます。

でも今回の命令はちよつと青ざめた。

敵国の大使として派遣。開戦したら捕虜になっちゃいそうな自国の人間を全員暗殺して帰国。そのまま前線の指揮を執られて。

それ、人間業じゃないですよー、知ってますかー？

無茶な命令なんのその！

元氣に今日から大使のふりした元帥は敵国に着任します。

1. 国軍元帥は外交官見習い。(前書き)

あらずじ杵を書いて、「こんな話だっけ？」と少し思いました。
うーん……こんな話になっちゃいました。

アリア以下名かは『世界横暴美食漫遊記』に出てきます。

時系列としては『世界』の5年くらい前の話。

全部の一番最初の話です。

私は、全体的に好きなお話なのでぜひ読んで戴けたらと思います。

(2008年4月著)

1. 国軍元帥は外交官見習い。

顛末——

事の初めから終わりまでの経過。一部始終。

カリスト帝国——帝国軍元帥、アリア＝カリスト＝ヴォグナー。その名は隣国にまで轟く猛将。自ら戦場に赴けば前線で剣や魔法を使う姿は鬼神と呼ばれ、指揮を取ればその類い稀な才能に周りの者が舌をまく。稀代の天才と呼ばれるも、その残虐で手段を問わない手法に国内外含めて多く反勢力が存在する。

それもこれも当人の意志ではなくカリスト皇帝陛下、イデアの勅命で行われているという事は軍関係者なら周知の事実だった。

何故なら、彼女の素顔を知っているからだ。

身長143センチ、小柄、細身、童顔、目がクリクリと大きく、少し鼻が低めなのが本人の気になるところ。腰近くまでの長い髪の毛は、黒髪黒目の多いカリストの人間にしては珍しい茶色で全体的に色素の薄い愛らしい雰囲気を持ち主だ。

剣なんか持ったことありませんと言われたら「だよね？」って納得してしまう容貌の持ち主、突けば倒れそうな彼女は間違いなく噂通りの国軍の総大将。

勇猛果敢な我が国の元帥閣下である。

暗めの朱の軍服は礼服だ。朱が良く似合うのは軍人にしては色白だからだろう。

普段来ている略式の軍服なら使い込まれていて身体にもしっくり

来るが、滅多に着る機会のない礼服はコスプレのようで落ち着かない。

ここは謁見の間。事のはじまりは我が陛下の斬新すぎる勅令からだった。

片膝を付いて床を見つめながら何故ここに呼ばれたのかを考える。正装で、という指示付きでの呼び出しに心当たりがないのだ。

（勲章でも授与されるのかしら？）

と考えていると年若い陛下が大臣達お歴々を従えて入場してきた。長々と御前会議をした後に言われる事って：開戦じゃないよね？と、勲章よりも余程可能性のあるパターンを想像した。

元帥在籍二年。

大きな戦いを経験したの前任の元帥が戦場で暗殺されて、それを継いで就任した時一回きり。敵国シールとの休戦のために統率が無くなった我が軍をまとめて不利な戦いを同等までもっていったのが最後だ。

敵国・シール王国とは太古の昔、創世の時代より国同士に伝わる伝承を巡って小さないざこざから大きな争いまで絶えず続いている。原因の一つ、生活に根付いて存在する力の一つに『魔法』がある。それは料理をするために火を熾す者もいれば戦いのために雷を呼ぶ者もいる。風を起こして空を飛ぶ者もいるし水を呼んで豊作を願う者もいる。もちろん全ての人が何でもかんでも出来るわけではない。だが得意不得意、魔力の大小こそあれど何かしらの魔法を使って国民は生活している。

問題なのは国同士の魔法力の源が違うこと。カリスト側が力を使えばシールの大地が衰退し、シール側が力を使えばカリストの大地が衰退する。その両国合同の研究結果が報告されてからは関係性は悪化の途を辿っている。

だが今は二つの国が冷戦状態にあるとはいえ、世界は平和だ。一応休戦協定に乗っ取って戦はやっていないし、軍だって緊急配備なんてやってない。定例軍事演習とトレーニングの繰り返しで終わっ

てるのに…………。

「ヴォグナー元帥」

呼ばれて顔をあげた。外務大臣が呼んだのだ。珍しい人間からのお声に一瞬反応が遅れた。

「…はっ」

「半年後よりカリスト帝国特命全権大使を任命する」

「はあ？」

取り繕わずに聞き返した。

こいつら軍人に何を頼んだんだ??それ分野外ナンデスケドっ!?
「アリア、もう一度言おうか？」

横から陛下が親しげに口を挟んだ。

イデア陛下は自分の7才上の従兄に当たり、見知った仲なので自分も軽口を聞きそうになる。自分とは違った真っ黒い髪の毛、でも同じ遺伝子であろう肌と目の色、どことなく似た顔の造りが血縁者であることを連想させる。

だが今となっては身分違いも良いとこだ。頭を垂れたまま、馴れ合わぬように真意を尋ねた。

「内容はともかく、理由を教えてください。今の任務を外れてまで私が向かわなければならぬ理由を伺いたいのですが…………」

「シール内で大使が次々暗殺されているのは知ってるかい？」

「初耳です」

「そりゃそうだよ。外交の機密事項だからね」

「……私なら殺される心配がないから、ってことですか？」

「八割はそれが理由だ。アリアに行かせたら逆に暗殺者が心配だね?」

言うに事欠いて暗殺者の心配って…。自分の上司のセリフだと思うと泣けて来る。

「今はまだシール王国との情勢が厳しい。暗殺者が完全にシールの人間とは限らないけど、向こうに圧力かけるだけの材料もないんだ。だから生け捕っておいで。あ、自白出来るようなら腕をもごうとも

足を潰そうとも全然かまわないよお？」

相変わらずの能天気な口振りでニコニコしながら怖い事を言う。

でもこの人はいつもそうやって私の手を汚してきたのだ。今更驚くことでもないが絶妙な政治感覚……えげつない。

先の会議で既に決まっているなら逆らっても無駄だと分かっている。溜息混じりにこれから先のことを尋ねた。

「軍の総司令は……私の後任はどうなさいますか？引き継がなければなりません」

「え？……一度も任を解くなんて言っていないよね？外交官になってもらうのはシールと冷戦状態にあるうちは無期限だよ。でも開戦したらすぐに陣頭指揮に就いてね。元帥代行なんてたてないから、シールから逐一命令を送っちゃいなよお！」

（ちよつとそまでお遣い頼むくらいの気安さで言いましたね…）

会議が長引いていた理由がわかった気がした。これは普通の人間では……一人の人間には成し遂げられない任務なのだ。

「初めの慣れないうちは参勤交替制にしてあげたからマクレガー中将と二人で頑張って！」

マクレガー伯爵はその地位の高さから会議に呼ばれて先に聞かされていたらしい。戦う能力は薄いが彼も軍人だ。伯爵家という肩書きにいつまでも隠れてはいられない。

青ざめた彼の顔を見て可哀相になった。爵位も、軍での地位も、金で買っただけの成金がとうとう軍の捨て駒にされるのだから。

「詳しい事は外務大臣が説明して！会議で疲れたからアリアの了承が取れたらこれで終わりにしょ？」

ニコツとこちらに微笑みかけた。選択権はないのに。

” こういう時はどうするんだっけ？”

ってアイデアの声がきこえるようだ。

片膝をついたまま胸に手を当ててもう一度ゆっくりと頭を垂れた。

「仰せのままに……」

「アリア、それは軍人のやり方だろうか？親善大使を任された貴族の

令嬢らしくやってよ！」

こんな御前の場で陛下の言葉に逆らえるわけもなく、ささやかな抵抗で唇を尖らせる。渋々立ち上がり、ぎこちなく片足を下げて、無いはずのドレスの裾をちょこんと持ち上げるふりをした。

「喜んでお受けいたします」

と引きつった笑顔で言うアイデアが後ろに控えていた一人の男に声をかけた。

「うちのエリアはこんな感じで社交マナー一般は本当に全くダメだから。半年後に参勤交替が始まるまでには形にしてね！」

「承知致しました」

年の頃26、7才といった男だ。品の良い立ち居振る舞い。いかにも社交的そうで、知性が有りそうで…。

嫌な予感がする。

「彼は外交官としての知性とマナーを身につけて頂く為の家庭教師でございます。そのまま副官としてシールへ同行いたします」

と、横から外務大臣が説明した。

（や、やっぱり……）

画して、立派な外交官になるべく、苦しい修行の日々が始まったのだ。

あれから外務大臣に家庭教師を紹介され、外交官としての説明をされ、解放された時には空が暗かった。

家庭教師の男はシゼル・セーブルという名で、27才の若き男爵様らしい。

貴族の社交の場に欠片の興味もないので全然知らないが、もともとといずれ外交官になるべく勉強していたところこのお鉢が回ってきたと。

勤勉で有能な外交官だが若いのでなめられがち。

そして自分達を選ばれた理由の八割は暗殺されないから。残り二割も容姿で侮ってくれそうだから、だそうだ。

あの場でアツケラカンと陛下は言った。

『ハードが出来てるモノにソフトを詰めた方がラクでしょ？ソフトが出来てたってハードが保つとは限らないんだから』

『アリアは軍人としての仕事は良くやっているけど貴族としての側面は全然役立たずだからそろそろ学んで貰わなきゃね！』

『僕の可愛いアリアに用意してあげた花嫁修業だよお！』

…と端々に厭味を込めて。

自分は、陛下の従妹で、血筋的にもカリストの初代皇帝の血を引く。帝国唯一の皇族公爵家の紛れもない令嬢なのだ。

でもそのご立派な家柄の一方で代々軍のお偉いさんを排出し、国の為に手柄を立ててきた野蛮な血筋であるのも事実。跡継ぎとして生まれてきてしまったが為に令嬢としての教養は後回しに、武術や戦略のエキスパートになるべく育てられてきた事は……従兄であるイデア陛下が一番良く知っているはずなのに…。

いや、良く知っているからこそ始めから自分に確認せず家庭教師を用意していたのだろう。

更にはお飾りの外交官では困る、と外務大臣は続けたのだ。

先が思いやられて頭が痛い。

トボトボと宮殿から出た。見知った門番が敬礼をする。元氣なく片手を挙げて挨拶した。

笑い事じゃないくらいダンスの練習とかお茶の煎れ方とかそういう類いの細々とした習い事が苦手で、それなら大規模軍事演習でもパーっとやってた方が余程マシ。こんな公爵令嬢はどここの世界中を探しても自分一人だろう。

「アリア！」

通り過ぎた外門の方から声がした。背の高い軍服の男、自分の直属の部下である近衛隊長ルーファスⅡハレー准将だ。

二重で彫りの深い美しい顔立ちの青年で、最近短めに切った漆黒

の髪が王宮の女官達に大評判：らしい。

彼が自分の名前を呼びつけたように、職場では上司部下の関係とはいえ既にここは門の外。こちらもプライベートの呼び方で彼に声を掛ける。

「ルー？こんなところで、どうしたの？」

「どうしたって…、仕事が終わったらメシの約束してただろう？司令部に戻ってこなかったから待ってたんだよ」

陛下の急な呼び出しがこんなに長引くとは思わなかったから時間を確認していなかった。お日様が落ちきっていると云うことはとっくに就業時間を超えている。

帝国軍人といえど非常事態でない限りは単なる公務員だ。ちゃんと時間で区切られて働いている。お給料は有事がないとバーンと跳ね上がるなんてことはしないが、安定してるし公休もある。

平和っていうのはホントに素晴らしいのだ。

こうやってプライベートは遊びにいく時間を作ることも当然の権利なのだから。

でもきつと明日から自由はない。

「ごはん…」

「何食べたい？もうこのまま行けるんだろ？」

泣きそうな声をもらした自分にルーは苦笑しながら訊いた。

「肉っ！」

今晚は吞んで食べて、いっぱい話を聞いてもらおう！そしたら明日から頑張れる！

一度司令部に戻り私服に着替えて出直した。あんな軍の上層部の制服に身を包んで庶民の店には入れない。デートといえばデートだが、あんまり気張らない方が好きだ。

——『大樹の丘』

カリストの首都ハーネスは高級なお店から大衆的なお店までなんでも揃っている……が、どうしても行き付けの店が決まってきてしまうのが軍でも多忙な二人の悪い癖だと思う。たまには新規開拓もしてみたい……なんて言ったらこのマスターは泣くかも。

といってもシンプルなブラウスに地味めで野暮ったいスカートを合わせただけの格好でとてもデート仕様ではない。入れる店なんて高級店ではないことは確かだ。公爵家の人間とは思えないような庶民の出で立ちは常日頃からなのでいちいち誰もツッコマナイのが悲しい。

因みに隣に立つルーファスが同じような格好なのにきちっとして見えるのは天性のスタイルの良さとピツと伸びた背筋のせいだろう。自分達の身長差は40？弱。よく兄妹に間違われます。子供のような身長自分の体が疎ましい。

店内は絶え間なく人が出入りし、賑わいを見せていた。照明は暗めで関心がなければ隣の客の顔も分からない。カウンターの近くには『魔導機』と呼ばれる魔法とからくりの仕掛けを使った滝が流れており雰囲気もある。首都の建物は石造りや煉瓦造りのものが多い中この店は丸太を組んだログハウス調で樹の匂いがまた好きだった。

「アリちゃん、丁度良いトコに来たね？これ修理してくれたらお酒一本サービスするよ！」

顔馴染みのマスターが店内の滝を指差して言った。古い滝の仕掛けは魔法力で落ちた水を上へ循環させていつているのだがどうやらその力の綻びが生じたらしい。いつもの半分くらいしか水が戻っていない。

「お腹減ってるのにつ！私は客なのにつ！？」

「アリちゃんは帝国軍の魔導士だろ？いわば公務員！税金で食ってるヤツは国民のために奉仕しなきゃ！公僕ってヤツだね♪」

「ケチらないでちゃんと魔大工に修理させなよっ！」

「アハハ。ちゃんと修理呼んだらお酒一本じゃ済まなくなるじゃん

か！」

無茶苦茶な言い分だが、一向に席に通そうとしないマスターに負けて渋々取りかかることにした。

始めに滝に向かうと掛かっていた魔法を解析する。こういうアンティークの永久機関の魔法を組まれている魔導機は職人技だから同じように掛け直すのも大変なのだ。素人目にはよく分からないかもしれないが、普通は断る。だってこの手のモノはいつそ初めから行った方が早いかもしれないくらい複雑だったりするのだ。

踏み台を使って上の方に手を伸ばそうとしたら、頭の上からルーの手が伸びてくる。

「ほら、解析は俺がやるからオマエはさっさと終わったところから再構築。腹減ってるんだろ？」

お互いの得意分野で協力しあう事にした。こういう修理魔法は解析後に綻び周辺の分解、再構築の順番に行っていく。細かい作業を主とする解析があんまり得意でない自分はルーの手から流れてくる情報を基に新しく魔法陣を組むだけの方が助かる。

「ここだな、魔法陣が欠けてる」

「うん。これなら簡単だね」

下手すると自分でも小一時間掛かると思ってた魔法がものの10分程度で掛け終えた。軍の最高クラスの魔導士が二人居てこそなせる業だ。出来上がりをマスターが目を輝かせて見つめる。

「ご苦勞様。前よりスゴイよ！虹が見える！」

滝の水量と光の加減でどの角度でも常に大きく虹が架かるように調節したのだ。

このプラスアルファは、いつもの美味しい食事のお礼って事で。頼まれ事も終えた事でようやくカウンターの一番端、いつもの席に通された。まずは報酬のお酒をせっつく。

その後に次々に出てくる自然派の料理に舌鼓をうち、安いお酒だが店主が選り抜いた料理に合う酒を呑む。

「はぁ、この瞬間が幸せだねえ」

一気に飲干したジョッキはマスターが大きな笑い声を立てて下げていった。

「アリちゃんは相変わらずオッサンの様な事言うね。見掛けはお姫様みたいなのに」

「イヤン。人生の渋味とか解ってそ〜お？」

「いや、全然。女言葉使うと気色悪いね、『ムダ姫』」

「キシヨ……ムダ……？」

それ以上何も言えなくてジョッキに口を当てながらため息をついた。姫みたいと言われるこの容姿も軍の中では何一つ役に立たないが、明日からは見掛け通りの人間なら困らなかったのにと頭を悩ます。

食事をしながらルーファスには一通り説明をし、留守中の命令系統の案も出しておいた。プライベートで食事をしたって結局半分以上は仕事の話をする。お互い仕事第一の似た者同士だ。

「アリア、明日から司令部に顔を出さないって事だろう？」

「んゝ：やっぱりのスケジュールだとそうなるよねえ？ 私次第だとは思うんだけど……期待しないで下さい」

「司令部は淋しくなるな」

ルーはさらりと言ってのけた。マスターも空気を感じ取ってカウンターの中央に戻って行く。

「ルーが？」

「みんなが」

「ルーは？」

「淋しくないよ」

ちよつとムカつく。

彼は自分が答えて欲しい言葉を分かっている、絶対にそれと言わない。

「だってプライベートでは一緒に居るし。それくらいの時間は作ってくれるんでしょ？」

内心の膨れっ面を見透かしてルーは言った。

優しいのか、意地悪なのか、からかわれているのか、いつも全然掴めない。

ルーは一頻り笑うと真顔に戻り、声を抑えて言った。

「アリア、最近のアイデアの調子はどう？」

アイデア、と陛下を呼び捨てた。

幼馴染みならではの呼び方。だがさすがにもう人前では呼べない。さつき少しムードを作ったのもマスターを遠ざけてこの話をするためだったとしたら凹むな。

おかわりのジョッキにチビリと口付けながら答えた。

「元氣元氣！いつも通りにチャライ感じだったよ」

「ああ、想像出来るよ。元氣なら良いんだけど…」

ルーはビールの入ったタンブラーを傾けて言った。

自分達の親しかったアイデアは十年前に前王の崩御で突然王位継承が決まり、あの玉座を手にした。

以来、あの王はずっと孤独なのだ。

だからこそ自分達はアイデアの力になれるように必死の努力をして、ここまで伸上ってきた。

皇帝陛下の右腕と呼ばれるアリア、懐刀と呼ばれるルーファス。今までは公務の時は自分がずっと引っ付いて護衛をしていたが、シール王国に行くとなってはそうはいかなくなる。

「政治的には私がシールに行くのは良策なんだろうけど…」

アイデアにとっては？

ルーファスには？

自分は？

三人にとっては良いモノだけではないと思えてしまう。

「まあ仕方ないよ。開戦したとして敵国から捕虜にならずに単独で戻って来られるようなヤツ、アリアしかないし」

「そんな全面的に信頼されても私だって人間なんだけど」

「だってアイデアと俺がいる限りはここに帰って来るだろう？」

「し、死なない限りは努力します」

「じゃあ大丈夫だ」

その信頼はどこから生まれてくるのか、心地よい期待に安堵して目を細めて笑った。言葉を後押しするようにルーファスの大きな手が髪の毛をワシヤワシヤと掻き回して、自分はその手に頭を預けた。

朝日が眩しいくらいギラギラ主張している。

二日酔いの頭には刺すような痛みを贈呈してくれてなかなか気分だ。

確かに強いお酒を浴びるように呑んだが、いつもよりお酒が残ってるのはきつと今日の憂鬱のせいだろう。

深酒を付き合ってくれたルーファスのことを心配する。といったもあつちは本物のザルだからきつとお酒も自分ほど残ってはいない。出勤服を選ぶ事すら怠くではじめから軍服に袖を通す。スツピンのままで、長い髪の毛は道すがら適当に束ねて、王宮に向かった。

（あゝ、なんつーか…女としての問題じゃなく人としてダメだなあ…）

通用口から王宮に入ると仁王立ちして人待ち体制を取る人間が目に入った。

昨日会ったばかりの初対面も同然なシゼルだ。既に外交官の正装をキリリと着こなす。

ルーファスとは少しタイプが違うが、こちらも負けず劣らず美形なために人の顔を覚えるのが苦手な自分ですらちゃんと見分けられた。

自分を待っているんだと判断し、一生懸命眠い顔に笑顔を貼り付かせて友好的に近寄った。

「馬鹿にしてるんですか？」

挨拶を口にしようとした瞬間にシゼルの口から理解不能な言葉が発せられる。

「え？あ、あのう？」

「家庭教師の費用も税金持ち、更には今日からあなたは学んでいるだけで給料が貰えるんです。言わばこれは仕事の一貫。それをなんですか？目のクマ、シワシワな制服、ボサボサな髪の毛、ガサガサの肌、挙げ句の果てに離れていても酒臭いっ！それがレディの勉強をしに来た人の姿とは到底思えません」

「：返す言葉もございません：が、今耳元で怒鳴るのはやゝめゝてえゝ」

「取り敢えず風呂に入りなさい！風呂！！」

「ええっ！？風呂ってどこで？」

「自分の屋敷に決まってるでしょ！今日はここで待ち合わせただけで勉強するのはあなたの家です。私は家庭教師ですからねっ！」

「ええっ！うち来るの？やめときなよ！うちはヴォグナー公爵家だよ？」

「だから何だと言うんですか？爵位とか全然関係ない。私は長屋にだって仕事なら足を運びます。ほら早く行きますよ！」

「ええっ！？」

非難の声を上げると瞬時にシゼルの怒りの籠もった視線が返ってきた。眼力に萎縮している隙にそのまま腕を引っ張られて王宮の外に連れ出される。

予め用意されていた馬車に詰め込まれ、一路我が家———ヴォグナー公爵家へ。

本家屋敷は首都にはなく、自らの領地テーベンというシール国境線の街の中の軍事本部とともにあった。

だが険しい山が堺に存在する為、ここから国境越えしようという無鉄砲な人はあんまりいない。普通シールに向かうには首都に隣接するハーネス港から海路を使う。

そんな離れた領地は、父も母も早くに亡くなったうえに若くして仕官した自分のせいで後見人である叔父が面倒をみている。

シゼルの言ったこの場合のヴォグナー公爵家は、首都にある別邸だ。屋敷は首都の少し外れにあるが、大きさと古さは首都一だ。

いつもより早い主人の帰りに使用人達は驚いた。だがこんな所にこんな時間にいることに最も驚いたのは自分だろう。

シゼルが顔を思いっきり顰めたのを見逃さなかった。

「レディ・アリア、使用人が少ないように見えますが？」

「バトラーとメイドと庭師、コック、ちゃんといえますよ？」

確かにシゼルの疑問ごもつとも。この規模の屋敷にたった4人では少なすぎるのだろう。でも仕官してからずっと公爵家財産は叔父預かりになっているため、屋敷を保持していく最低限の人間しか雇っていないのだ。

「レディ・アリア……」

「そのレディって何か気恥ずかしいのでやめてくれないデスカ？」

「ちゃんと外交官の形になったらやめます。あなたはレディになるためにマナーを学ぶわけじゃないですからね」

「……ハア、ソウデスカ」

「昔からこの人数の使用人なのですか？」

「あ、私が首都にきた時に入れ替わりに叔父が全員連れて行きました。叔父はどうやら私のこと嫌いみたいです。でも私なんでも自分でできるから……」

だから家に呼ぶのは嫌だったのだ。こんな身内の恥を人に見せたくはない。

まあ、来てしまったものは仕方ない。開き直って正直に話す事でしょう。

だが、シゼルが口を歪めて笑う。

「なんでもできる？」

と自分の言葉を復唱して。

「あなたはお世辞にも仕草がキレイではない。更に身だしなみに至

つては今日のはそこら辺のオヤジにすら負けるんじゃないかと」

「あはは、昨晚も飲み屋で同じような事を言われました」

「戦略的に馬鹿なふりをするならともかく！ ホントに馬鹿なわけじゃないなら人を使ってでもそれらしくなさい！」

「うゝん：軍の機密書類とかも多いから信頼の出来ない人間を屋敷の中に入れることはできません。お金も勿体ないし」

両親の好きだった庭や屋敷はそのままにしておきたかったので改築や修繕費用はケチった事はない。ただし、この屋敷は宮大工を呼んでくる重要文化財レベルの由緒ある屋敷だから軍で出世しても、なかなかそのお給料だけで賄うのは大変なのだ。

価値観の違いなのだろうが有り得ないといったように眉を顰めて首を横に振られた。

シゼルはまた自分の腕を掴むと、何故か勝手知ったる家のようにスタスタと奥に進む。

迷わず浴室を開けると、勢い良く突き飛ばされた。髪を解かれ、声も出せないうちに軍服を剥されていく。使用人が少ないのを良い事に誰もそんな事が主人の身に起きていると気付かない。

「ちよっ！」

抗議しようとして睨んだら逆に萎縮してしまうほどの殺気付きで睨み返された。手付きも目付きもいやらしくはない、ただ真剣な眼差しだったので抵抗は止めて事の成り行きを見守ることにする。正直言って、いつでも実力行使して逃げられるのだからそう焦ることはない……と自分に言い聞かせた。

身体中をキレイに洗われ、香油を塗られた。顔はマッサージまで施されて今パツク中だ。

一番酷かった髪の毛は浴室で毛先をカットされ、痛んだ部分は全て取り除かれた。更にトリートメント剤を丁寧に塗布してくれている。これを全てシゼル一人が行っているのだから素晴らしい。

確かにさっきの自分が恥かしくなった。『一人でなんでも出来る』って言うのはこのレベルの人が胸を張って言えるのだ。自分一人で

は身だしなみすら中途半端だと分からされてしまった。

「眉毛がハの字になってますよ」

パックを剥しながら10センチ位のとこまで近付かれてそう言われた。やっぱりこの人、綺麗な顔している。

「こんな事がレディに対して赦されないって分かってはいたんですが、実際着飾ると気持ちも変わるでしょう？」

「え？」

「……貴女は突然脱がされたことを気にしてるんじゃないんですか？」

「ああーいや、それはもう良いデス」

「そんな子供の下着みたいなのに欲情はしませんのでご安心ください」

「……………」

せっかく人として見直したのにコレだ。だが文句を受け付けられない手つきで顔を上に向かされる。器用に唇に紅を引いて、目を細めて微笑むと自分の顔から手を離れた。

「ほら、顔も髪の毛も出来ました。服くらいは自分で着られますね？」

バスローブ一丁で身体中を弄りたおされていた自分は、鏡に映る姿を見てハッとした。

目の下に作っていたクマがキレイに消えているのはマッサージのせいか、上品に施されたメイクのせいか。

元々悪くない顔立ちだとは自分でも思うが先程の最低時とは別人のようだ。妙に気恥ずかしくなって顔を引きつらせながらしどろもどろに感想を言う。

「これはあ…やり過ぎ感があ…」

「最低限しかやってないです。基を磨いただけ。どれだけ手を抜いたらあんなに酷くなるのかこちらとしても教えて頂きたいですね」

鼻で笑われても、顔の産毛まで剃られてしまっってはもう何も言い返せませんから。

「ほら、そろそろ行きましょう」

「え？」

「正午とつくに過ぎてます。昼食を食べに行きましょう？ 今日のところはこれでお終いにしておきます」

「……………はい」

そう言えば風呂に入れられたお陰か二日酔いもすっきりして、お腹が減っている。バスローブを脱ぎ捨てて彼の格好に併せた上等な洋服を掴み取った。

それからの一週間、午前中は身なりのダメ出しをされ、ランチと一緒に取り解放される日々が続いた。溜まった仕事もあったので午後が空いてることは本当に助かっていた。

メイクの仕方の練習にすら時間を作れる、立派な『お嬢様』になるにはこのくらいの時間的余裕と心のゆとりが必要だったのだ。

（普通の貴族令嬢は汗水垂らして働いたりしないもんね）

そんな折にアイデアのプライベートの呼び出しがあった。

「おや、見違えるね？ やっぱリシゼルは腕が良い」

アイデアは臆面なく褒め言葉を口にした。

人払いをしたお陰で今日の距離は『従兄のオニイチャン』だ。自分で結い上げた髪の毛を触り「薔薇かな？ 良い香りだね？」と物理的にも近くに寄ってきた。

シゼルが置いていったシャンプーや香油、石鹸はすごく良い香りが残り、下手に香水等を付けなくてもフワツとほのかに香る。安っぽい匂いではなく、高級な甘い匂いが。そこは女の子の事情なので黙って微笑んでみた。

「今日はアリアの意見が聞きたくて」

アイデアから私室の応客セットへ座るように勧められた。

席に着くと同時にアイデアの手から三枚の流行の形のドレスと生地

の見本表をテーブルに並べ立てる。

「外交官としての女性用の正装を作るんだがどんなものがいい？生地はやっぱりベロアの朱、軍服の正装みたいな赤がアリアには似合うよね？形は流行のドレスをモチーフにして…」

「ま、待って！制服は男性のと一緒にじゃダメなの？わざわざ作らなくても私は……」

「レディは社交界にそれで出席出来ないでしょ？第一あんな軍服に毛の生えたような衣装じゃ僕がつまらないよ」

「でもそれじゃ戦えない…」

「誰と？暗殺者？アリアならドレスくらいはハンデになるんじゃない？あゝい？」

「だゝかゝらゝっ！私が死んだらどうするんですかっ？」

口にしてから軽々しい質問だったと気付く。否定されたら、どうするつもりだったのだろうか…。軍人が安全を保障された仕事じゃないことだって分かっている。

気まずくなり、黙ると更に気まずさが増す。

沈黙を破ったのはアイデアだ。薄い口許だけの笑みを携えて王らしからぬ言葉を呟く。

「そしたら僕も死ぬんだね」

「え？」

「だってアリア以外に僕を守りきれるとも思えないし」

「ルーが、近くに居るよ？」

「ああ。そうだったね。僕には頼れる部下がたくさんいて嬉しいよ」ニッコリと極上の笑みで返された。

この、独特の発言が世捨て人みたいな印象を持たせる。

生きてる限り玉座に縛られ、死ぬことと生きることが殆ど同じ価値だと思っている。だから自分達はこの人を死なさないために強くなったのだ。

自ら死んではいけない。例え、それが生きる屍であっても。

「取り敢えず、一着流行のドレス用意したから今夜の夜会にこれで

出なよ！」

「はあ？」

「はあ？ じゃないよ！ アリアは、今夜、舞踏会に出るのっ！」

「嫌です！ 無理です！」

「皇帝勅命！」

絶句した。

簡単に勅命を出すのはどうかと思うが、異を唱える前に深い緑色の流行の形のドレスを押し付けられた。こうやって我が儘を通す人が皇帝だなんてカリスト帝国国民が可哀想ですよ。

深い緑のドレスはさすがの見立てと言うべきか、あつらえたように小柄な自分の身体にピッタリだった。一般的な女性のものよりかなり小さめな身体だし、普通に用意をすれば間違いなくサイズが合わない。まさか子供サイズじゃなかうな、とひとりごちる。

後ろの裾が少し長めで、フリルとリボンをたっぷりあしらった豪華な造り。機能的には全く理解出来なかったが会場内で一、二を争う素晴らしい出来のものだと言うことはわかった。

しかし幾ら衣装だけ立派でも、ダンスのレッスンが始まっている自分は『なんちゃって令嬢』。ボロが出ないように壁の華を決め込むことにした。

いつもならイデアの後ろに、つまり玉座の後ろから警備に当たるべきだが今日はかりはそう言う訳にいかない。陛下のそばに寄る女なんて独身王の噂の相手になってしまう。

（軍服なら誰も気にしてくれないのに…）

貴族の生まれだが、社交界デビューはどさくさに紛れて今日だ。目立たぬように入場しようとしたが入場時の名前と爵位を呼ばれてしまい、会場の注目を浴びてしまった。

嫁かず後家と仇名が付いていたことも知っているし、すでに婚期

を逃した年齢だということもわかっていたが軍の上層部においては簡単に結婚を選べる立場でもなかったのだ。今更こんな場で相手を漁ったりしないのでいちいちざわつかないで欲しい。

音楽が流れ初めてダンスが始まった。

女性をエスコートして輪に入る男性が多い。

自分にも隙を伺っている男性の好奇の目が感じられる。

お互いに牽制しあっているのか、声を掛けてくる数は視線の数よりも少なかった。それでもナントカ子爵とかホニャララ男爵とか。なまじ顔に自信があったり身分に自信のある輩が厳選されて声を掛けてくるらしく、その度に女性からは嫉妬の目が向けられて逃げてしまいたい衝動に駆られた。

アイデアが自分の代わりに後ろに控えていたルーにこちらを指差して耳打ちしているのが見えた。なんとなく嘲笑に見えてむかついた。そんな膨れっ面していても声を掛けてくる男性がいた。

「ほら、淑女がそんな顔をしてはいけません」

「シゼル……男爵……？」

「マナーとはいえあなたに爵位で呼ばれると嫌味かと思ってしまいます」

スマートに、優雅にシゼルは立っていた。この社交の場においてもシゼル程の身のこなしの人間はいない。

更に女性達から自分へ向けられる冷たい視線の数が増えたように感じる。

（ああ……人酔い、人酔い……）

抜けようかな、と頭を過ぎったが軍の警備に当たる者の責任者としては陛下が下がるまでは最低限ここにいないければ！

（多分、普通の参列者でも陛下より早く退出するのは不敬だし）

不作法者の自分もそれは理解出来た。だからシゼルに視線で合図を送る。

（早くシゼルもどっか行って！空気読めよ！）

そんな自分の心情を知ってか知らずか、シゼルは微笑んで手を伸

ばし優雅にダンスフロアへエスコートした。丁度曲が代わり、誰でも知ってるような有名なワルツが流れ始める。

「レディ、ダンスレッスンを始めましょう」

「私は踊れません！知ってるでしょ？」

「だからカリスト国内にいるうちにレッスンをしなければ。あなたはヴォグナー公爵令嬢なんですから、大使になったら踊れませんじや済まないです。ちゃんとフォローしますから今日は雰囲気掴んで帰ってください」

シゼルのレッスンはいつも急だが無理に詰め込むことはしない。

だからか、つい差し伸べられた手を掴んでしまった。流れるような動作でダンスフロアへ導かれる。

会場がざわめいた。二人に注目が集まる。

勝手に悪目立ちすると決め込んで泣きそうになった。背を丸めていると腰に手を回されて背筋を強制的にピンと伸ばされる。

「取り敢えずは楽しみましょう。エスコートしにくいですから力を抜いて下さい。でも背筋は丸めるのは禁止です」

吐息が掛かるほど近く、耳元でシゼルの声が囁いた。

でもステップに乗りながら色々考えるのは無理だし、大衆の視線よりアイデアとルーの視線が怖かった。後で何言われるかって…。考えがグチャグチャに纏まらなくて逃げだしたくなった。そんなことを考えているとステップが追い付かず、目線は足下ばかりにいつてしまう。

きっと、絶対に不細工なダンスだ。

そんな自分の耳元にシゼルはもう一度囁いた。

「アナタの仕事は背筋を丸めないようにすることと笑顔を作ること。みんなに顔を見せてあげてください。あとは大丈夫。全部私がフォローします」

あまりの下手さに怒ってるかな、呆れてるかな、そう思っていたからその呼び掛けの声の優しさに驚いてシゼルの目を見返す。

安心できる表情に自然と力が抜け、ステップに乗れた。スカート

の裾を踏みそうになっても、足を踏みそうになっても、約束通りにシゼルが全部かいがいしくフォローしてくれた。

そして少し楽しくなった頃に曲が終わる。

気がつくと玉座のすぐ近くまでワルツにのって来ていた。

アイデアがニコニコと手を振っている。

君主へ素直に微笑み返せないまま、次の曲が始まる前にシゼルに壁際へ導かれてドリリンクを渡された。

そう言えばお腹も減っていて、でも一人でがつづけなくてずっと我慢していたことを思い出した。物欲しそうにテーブルの上に並ぶご馳走を見ているとすかさずシゼルが見繕って渡してくれる。

不慣れな自分を氣遣ってずっと側に居てくれるのだ。

何人か自分達にダンスの誘いやサロンへの誘いがあったが全てシゼルが払ってくれた。

本当に助かった。でも：

「レディ・アリア、まだ社交界デビューには早かったのでは？自信がないならちゃんと断るべきですよ（早々に帰れ！）」

とか、

「君のダンスで足を踏まれる男性が可哀相だ。他の誘いは断りなさい（ど下手くそ！）」

とか、二人きりの時は散々嫌味を言われた。

本当に踊ってる間と同じ人物なのだろうか？夢でも見てたんじゃないだろうか？この人は裏表がある。

ただ、身だしなみの整え方しか習ってきていないと思っていたのに食事のマナーにも困らなかったのには自分も驚いた。

この一週間の『ランチ』のおかげであることは明白で、口を何一つ挟んで来なかったが格式のありそうなお店でシゼルを見習いながら食べているだけで自然と形になっていたようだ。だからか、食べ終わった自分を見つめるシゼルの瞳はとても優しくかった。

「食べる時の仕草はキレイに出来てますね。とても良いですよ」
まるで自分の事のように嬉しそうに、自慢げに褒めてくれた。

訂正。裏表ではなくこの人は自分の前で飾っていないだけだ。
ダメなところはダメって、良いところは良いって。こういうトコは大好きだ。

その気配に気付いたのは陛下が立ち上がり下がろうとしたときだった。

先程まで見なかった顔の男が玉座にまっすぐ近付いていく。

ヤバイ、と六感が訴えた。咄嗟に銀食器を掴んで走ろうとする。だがヒールとドレスに足下がもつれてその場にこけた。

（わぁーん！ドレス超ーおサイテーッ！！二度と着ないっ！）

なかなか動きがとれない自分をよそに男は胸元から銀に光る鋭利な物を取り出した。流石に警備のルーも気付きアイデアを下がらせて剣を抜く。

だが本当にヤバイのはそっちじゃない！

アイデアのすぐ近くにいた給仕が短剣を抜いて振り下ろそうとするのが見えた。

当のアイデアはその太刀筋も全て見つめながらも、死を受け入れるように微笑んでいる。

（この他殺志願者がっ！）

自分で死を選ぶことが出来ないからってそれはやってはいけない。シルバーナイフを数本まとめて両端を握りその太刀をすかさず受け止めた。

重い一撃が伝わってくる。ナイフの刃を握っていた左手側は自分の肉が切れる感覚があった。だがいちいち構っている暇はない。

魔法を使ってナイフに炎を纏うと相手の力が緩んだ。その瞬間にナイフを一本だけ選取り、剣を返す。

明らかな武器の優劣も、装備する者次第でその差を補えるのだ。

そして、給仕の格好をしたテロリストと大立ち回りを演じ、ドレスをボロボロにしながらテーブルナイフで戦った令嬢は一夜にしてカリストの社交界で伝説となった。

……別にそんな伝説になりたくはなかった。

数日経ち、再びアイデアの私室に今度はシゼルと一緒に呼ばれた。侍女はアイデアに下げられて、ルーが給仕をしてお茶を入れている。何故この面子？と首を傾げていると吹き出したようにアイデアが笑い転げた。

「いやーあ、長い間色々な人に警備してもらってたけどテーブルナイフで戦う人は初めて見たよ！面白くてサイコー！テーブルナイフの形の勲章作ってあげようかあ？」

「結構ですっ！」

アイデアは一頻り笑ってからそう言った。恥ずかしさで顔が熱くなる。

ようやく日にちも経って、あの辱めを忘れてきたのに。ルーとシゼルも思い出しか肩を震わせて俯いている。

「何の用ですか？私忙しいんですけどっ！」

不機嫌を隠さずに言った。シゼルが目を見張る。一国の王にこんな口の聞き方をしたのだから当たり前だ。

だが侍女を下がらせたのだからこの席はプライベートも同然。テーブルを指でトントン叩いて本題を要求した。

「ほら、外交官の正装の件だよ。アリアに何も希望がないとシゼ尔と一緒に決めちゃうよ？」

「あ…っ、意見有ります！」

「言ってご覧」

「やっぱり動きやすいのがいいなあ…と。あとお、武器も携帯できる形でえ…」

この前の事態を考慮して言ったがそれがまたルーとアイデアを笑わせる。

だがシゼルは違った。真顔でそれを否定する。

「他国の社交の場で剣を抜くつもりですか？武器を持ち込んでるこ
とがばれたらその場で宣戦布告と取られても仕方ないですよ」

「じゃあ武器と見えない程度のもので構わないです。仕込み杖とか、
それこそテーブルナイフくらいの殺傷力で十分です。私も攻撃する
つもりはないから……個人的には左手短剣的なものが良かったけ
ど」

左手短剣とは主に守備に使う剣で相手の一撃を受け流す盾のよう
なものだ。武器として使用する事も出来なくはないが殺傷機能が乏
しいので攻撃出来たとしてもこの間のテーブルナイフ程度だ。小柄
な自分としては大きな盾を使うよりもそちらの方が得意だった。特
に他国でなら陛下の護衛にまわるわけではないので、自分の身を守
るためにもそういう類の物の方が最適だろう。最も、一般的には扱
いが難しくて有名だ。

「ですが、動きやすいドレスでは正装としてはやはりおかしいので
は？」

「それなんですけど、こういうのはどうですか？特注になっちゃう
だろうけど……」

ソファから立ち上がり、執務用のデスクから紙とペンを拝借して
頭の中の案をはしらせた。

簡単な図だが三人に見せるように。

ドレスにスリットを深く入れてそこを隠すようにフリルを出す
そのフリルもスリット式になっており、大股でも大丈夫のように。
裾はフリルだけが足下までで下の方は着脱可能な物と、足を自由に
する設計を説明した。その際にスリットの方の足に左手短剣などの
武器を取り付けられるようにバックル付きベルトを入れてもらう。
ちょっと女スパイ的な感じ。これならカッコイイし。

「まあ……これなら……」

シゼルも唸りながら納得する。彼は社交界に剣を持ち込むこと自
体が許せないんだろうな、と感じた。

「僕はこんなの嫌！あんまり可愛くない！絵のセンスないんじゃない

あゝいい？」

「邪魔にならない程度になら陛下の好きなように。レースでもリボンでもспанコールでも付けて下さい。私はドレスデザイナーじゃありませんから」

「オツケゝい。じゃあこれを基に作ろう。生地とかデザインとかもアイデア様にお任せでいいねえ？」

「ダメです。陛下は他の仕事をして下さい。さっき書類が回ってこないって内大臣が嘆いてましたよ？」

「えゝ？じゃあこの仕事はルーに譲ってあげるよ。アリアを可愛くしてあ・げ・てっ！」

アイデアがそう言って紙をルーに渡した。

多分最初からそのつもりでルーを呼び出していたのだ。軍人にはお門違いな命令も通ってしまうのがアイデアで、それを叶えてしまうのがルーファスや自分なのだ。

二人は我が儘放題に甘やかしてきた王に大きく溜め息をつきそれを了承した。

「レディ・アリア、レッスンの時間です。陛下も忙しいようですからそろそろお暇しましょう」

シゼルの事務的な物言いにゴクリと生唾をのみ込んだ。

「顔色が悪いですよ。まだこの前の筋肉痛は治っていないのですか？」

「シ、シゼルが筋肉痛治る前に踊らせるからじゃないですかあ！」

「軍人が聞いて呆れますね。トレーニング不足じゃないですか？」

「ダンスと武術では使う筋肉が違いますっ！」

あの舞踏会の後からシゼルはカリキュラムを変えてダンスの授業に入った。

午前中に軍の執務を終わらせて身支度を整える。ランチは相変わらず一緒に取り、午後からウォーキングの練習とダンスステップの繰り返し、一日の最後に一曲踊って終了。これがまた今までと違い、ムチでも出てきそうなスパルタだ。

あの舞踏会の夜はとっても優しかったのに、やっぱりアレは夢でも見てたに違いないんだ。

「シゼル、アリアの調子はどう？」

「まだまだですね。でもダンスの筋は良いですよ」

シゼルは陛下の問いに少し意地悪な笑みでそう答えた。

自分も表向きは嫌々ながらも、この人の自慢の生徒になればと、最近はあるに思っている。

そして早く『レディ』を取っていただかなきゃ！

節々の痛みを押して今日のレッスンへ向かった。

毎日のカリキュラムは出国の日が近づくに連れて厳しくなってきた。シールとカリストの歴史や、独特の言い回し、マナー、帝王学的に外交術を学びダンスの他にもキャラ作りのためにお茶の用意の仕方やお花の名前まで覚えさせられた。

歩いている間も覚えたことが漏れてきそうなくらいの大量の知識。食べてます、寝てます、でも人間って生きる為にはそれだけじゃないんです。

「アリア、疲れてるね？」

「んー、詰め込み過ぎで頭が割れそう」

久々にルーと夕飯を取るために『大樹の丘』へ向かっていた。扉を開けると訪れた二人をマスターがニコニコと迎え入れた。

「今日はアリちゃんずいぶん小綺麗だね？」

「え？」

身だしなみを整えるのがくせになっていたため自分では気付かなかったが変わったらしい。

「コラっ。誉められて困るな！一流のレディならそこで『ありがとう』って笑え！」

ルーに小突かれながら二人でいつものカウンターの奥に着席する。

「いよいよ明日は出発か。もう制服は届いてる？」

「うん！バッチリ！ってか予想以上に可愛かった！アリガト」

「ドウイタシマシテ」

ルーがマスターを呼んで酒と食事をオーダーする。

横顔を見つめて久々だなあ、と美しい顔立ちを見つめた。

ルーは自分が警備に当たらないお陰でアイデアと一緒に居る事が多くなった。二人して陛下の側を離れることはなかなか難しいからプレイヤーの時間も最近はずれていた。

近くに居ても一緒に仕事するのは叶わぬ夢なのか、すれ違っただけだ。

でもね、仕事を一緒にしたあかつきには今のままではいられないんだろうな、って思うけど。

「最近アイデアはどうお？」

「アリア、それこの間俺が聞いた事と同じ」

結局二人ともアイデアの事が大切で、お互いの事よりもアイデアを一番に考えてしまう事が多い。

自分も、ルーも、アイデア程簡単に生への欲求を断切るような生き方をしていないからだろう。彼ほど簡単には死なないって安心はどこか他人事で寂しいけど。

「相変わらず執務を嫌がって逃げ回ってる」

「代わりにやってあげちゃうから付け上がるんだよ。もっと厳しくしなきゃ！」

他愛もない会話で笑い合いながら旅立ち前の最後の晩餐を楽しんだ。

と、急にルーがグラスを置き、食事を中断してこちらを向き直る。

「アリア」

「なあに？」

「何か、ずっと考えてたんだけどなかなかチャンスがなくてさ…」
「ん？」

何の事か分からずにビールをクイッと飲みながら首を傾げた。

「帰ってきたら俺と、結婚してくれませんか？」

「……………」

「貴族の君が正式に嫁に来る事は無理なのは分かってる。俺が婿に入る事も無理だ。身分違いなんだから。でも神に誓いを立てて祝福して貰うことはできるから」

「……………」

「ずっと前から言おうと思ってたけど階級下で身分も下じゃ何も言えないって思ってた。未だに下だけどさ、貴族でもないのに将校にまで上がったよ。格差も少し縮めた。……アリア？」

覗き込むように顔を近付けた。ルーの言っている事は現実なのか、冗談ではないのか、夢ではないのか、と頭を過ぎる。

「アリア」

泣くつもりは無かったのに大粒の涙がこぼれ落ちた。

「したい、結婚……………する」

それだけ答えると込み上げるものが強くて涙で顔をグシャグシャにした。

ルーの手が涙を優しく拭きとってくれて、抱かれた腕の中でもいっぱい涙を流した。途中からはルーのシャツがハンカチ代わりだ。

そんな自分達を見守ってくれていたマスターがとっておきの葡萄酒をお祝いに奢ってくれた。

店のみんなは大体の事情を察してマスターの振る舞い酒に歓声を挙げ、荒っぽい祝福のヤジを跳ばす。

「アリちゃんせっかくキレイにしたのに……………いつまでも泣いてちゃ化粧落ちていつもとオンナジだな。でもそのがアリちゃんらしいよ」

「俺もそう思います」

しゃくり上げてしまつて上手く話せない自分をよそにマスターとルーは言った。

そのままだアリアだから、って。

出立の日のアリアは今まで自分が教えてきた事を全て棄ててきたかのように、酒臭かった。

辛うじて身なりは整えてきたみたいだが腫れた目の下にはクマを作り『飲み明かしました!』と全身で表している。

ちよつと殺意を抱きながらも、何やら嬉しそうに微笑んでいるアリアに言葉を飲み込んだ。

赴任が長期に及んでしまえば半年おきにしかこちらに戻っては来られないのだから少しは好きにさせてあげるのも息抜きとして必要だろう。しかも彼女はまだ二十歳そこそこ。

遊びたい盛りで、軍の名門の家に生まれてさえいなければもう結婚しているか、社交界の華になっているか……。その道を選ぶ事が出来なかったが彼女を哀んだ。

「シゼル、見て見て!これが外交官の制服の略装だよ!」

「可愛いですよ。でも今日はアナタは口を利かない方が良い。安い酒樽の臭いがする」

ヘラヘラ笑うアリアを見ていたらついポロリと嫌味が零れた。

そのお陰でショックを受けたアリアは静かになった。

彼女が略装に選んだのは膝丈のヒラヒラしないしっかりとした生地 of 服だった。辛うじてスカートだが明らかにドレスではなく、普段アリアが着用している軍服に近い。それがパンツではないだけだ。それを可愛いというのは答えとしておかしいが、彼女の容姿にカッコいいという言葉が不釣り合いな気がしてついそう言ってしまった。

小柄な彼女は、背が平均的だと思われる自分とですらダンスが踊りにくいぐらいなのだ。それに童顔が手伝ってしまえば酒場だって未成年者に吞ませているようにしかみえない。

「アリア、シゼル」

船に乗り込む寸前に声がしたので振り返るとルーファス近衛隊長

とアイデア陛下が普通に立っていた。普通に………というのは軍服もなく、王冠もなく、貴族のぼっちゃんとその執事のような出で立ちで、二人だけで存在していたからだ。

「なっ!？」

自分が声を出す前にアリアの反応が早い。

「アイデア! また城を抜け出したのね! ? しかもルーまで手伝って、
どういうつもり?? ?」

いつもの陛下を敬う態度をすっ飛ばしたそのセリフに些か呆れる。
だが本当に呆れるべきは護衛も付けずにやってきたアイデアとそれに
荷担したルーファスなので注意はしない。

「だってアリア。正式に見送りのために護衛付きで出ると他人行儀
にしか話してくれないじゃないか! それじゃ意味ないもん」

「『もん』じゃないわよっ! 連れて来るルーもルーだよ! 昨日は何
も言っただけじゃなかったじゃない!! !」

「あゝ、ずるゝいいゝ、やっぱり二人だけで遊びに行ってたんだあ
! 昔は必ず僕も一緒だったのに……」

揚げ足をとられて押し黙ったアリアを下がらせる。アイデアに少し
目立たないようにしよう、と進言した。

アイデアのアリアへの喋り方を見ているとアリアが時々とてもゆ
るい喋り方をする理由が分かった気がした。二人ともそっくりでい
らっしゃる。

「何の用ですか?? ?」

アリアは下がっても尚、怒りを隠さずに………自分の後ろから言
い放った。そのアリアの態度に芝居がかったように目頭を押さえて
陛下が続ける。

「二人に僕からプレゼントがあるから来たの」

「言っただけならば私が受け取りに参上しました」

ついポツリと言うと、アイデアはムツとした顔をした。

「シゼル! これはカリスト王からではありません。僕個人からなん
で玉座に来て渡せませゝん」

ルーファスから受け取った箱をポイツと適当にアリアに投げつけた。

アリアは包みを解いて中を見るとキレイな宝玉が真中に填った短剣だった。恐らく左手短剣用の…。色違いで二本入っている。

「あの…これ、見た事あるんですけど…」

「二人で、一本ずつ持ってたね！」

自分の眩きを全く無視してアイデアが続ける。そもそも左手短剣なんて扱い辛い物を軍人でもない自分に渡されても困るのにこれは…。

「皇帝の剣と皇后の剣よね？」

「そーそー！本物の国宝だよお！紅い方がアリアに似合うよお！」
相変わらずニッコニコしながらこの愚王は言う。

「こんな物を簡単に貰うわけには！」

「うん。あげない。しばらく貸すだけだから」

「いや、そうじゃなく…」

アリアから包みを奪って元の状態に戻そうとすると、その横からアリアの白い手が伸びて紅い剣、皇后の剣を掴み取っていった。

そしていつもと違った口調で言葉を囁む。

「シゼル、貴方も帯刀しなさい」

それは上司としての初めての命令だった。軽口が利けるような雰囲気ではなくなった。

覚悟を決めて碧い剣、翡翠が填っている皇帝の剣を手取る。

妙にしっくり手に馴染むその剣を見つめながらこれから行う事を考えた。

もしかしたら歴史に残るようなことをさせられるのかもしれない。
もしかしたら敵国で犬死にするのかもしれない。

二つの剣はカリスト帝国の総てを背負う証なのだという事。

もしもこの短剣をアリアが使う時が来たらその時は開戦を覚悟しなければならなかった。

「ほらほら！船の時間みたいだよ！箱はルーが片付けてくれるから行きなよ」

乗船口からのファイナルコールが聞こえ、アイデアにせっつかれて立ち上がった。

「アリア、君のお父様のペンダントは持ってるかい？」

「うん。ちゃんと……いざという時は必ず」

そう言ってアリアは服の内側に入れていたペンダントを取り出し、ロケット部分をギュッと握りしめた。

そのペンダントが何であるか、察しが付いた。恐らく、何かがあった時に自害をする為の毒物だ。多分自分もアリアに何かがある時は彼女の判断で、彼女の手によって殺されるのだろう。アリアの副官に選ばれた時からもう逃げられなかったのだ。

腰に帯刀し、アリアの肩をトンと押して乗船を促す。

剣の色によく似た深い深い碧の海に、吸い込まれるように二人を乗せた船は出発した。

緊張の出立から数分後、船に入ったアリアは一伸びして言った。

「はあくあ、もーお、つかれたあく。先に休むから着いたら教えてねえ！」

後ろから蹴っ飛ばして今までの怒りをぶつけた事は正直仕方ないと思うのだ。

「アリア、行っちゃったね？淋しいでしょ？」

そう言いながらアイデアは大胆にも後ろから抱き付いてきた。

振り払って立ち上がり冷ややかな目で見下ろす。

「もおーっ！ルーはホントにアリアが大好きなんだからあっ！」

甘ったるい話し方を変えずに抗議した。

アリアも居なくなるとアイデアはこうなる。本性を表すのだ。

本人曰くアリアは自分に夢を抱いているために見せられないんだそうだ。

十分変な部分は見ていると思うが、変だけでなくこの変態を見たら確かに軽蔑はされるかもしれない。変と変態は違うしな、とひとりごちる。

イデアの変わった本性、それは中味がまるつきり女なのだ。と、いうか……同性愛者。

「あゝん！その目がステキっ。もっと軽蔑してえゝん！」

「さっさと死んじゃえば良いのに」

「それはヒドイっ！ルーには言われたくないっ！」

「この間は死のうとしたくせに」

「アリアがちゃんと守ってくれてくれるって知ってたもん！それにルーが本気で守ってくれてないって事も知ってたあ……」

膨れっ面したイデアは確かに女性そのもので、小さい頃に一緒に水浴びとかさせられていなければ実は女なのかもと疑ったかも知れないほどの女顔だ。しかもアリアを更に美人にしたような感じで。

変に色気もあるためアリアに見つかからないように処理した情事は数知れず。彼に唆されて道を外した男達は星の数ほどいるのだ。そして自分は未だその星には数えられていないことを誇りに思っている。

「こんなに愛してるっていつも言ってるのに……」

「それはそれは恐多い」

「ねえ、ほとんど同じ顔なんだから僕にしておきなよ」

「同じ顔なら、身体が女の方が俺は好きですね。顔で好きになった訳じゃないことだって貴方は分かってるでしょ？」

イデアはそれを聞いて挑発するような目で笑う。キレイとは思えど愛しいとは思えないもので、興味が沸かなかった。

「わかってるもん。簡単になびくんならこんなに好きにはならなかったけどね」

「そんなに俺の事が好きなのか？それはご愁傷様」

「好きよ。可愛いアリアと争うのは嫌だけど気持ちは止められないんだもの。いっぱい邪魔してやる」

吐息が掛かるように近くでそう言われた。それを軽く無視して心に引っ掛かっている事を口にしようとする。

「…アリアと…一緒に旅立った青年…」

自分が言葉を選んできるとアイデアはいたずらっ子のようにニヤニヤして身体を離れた。

「シゼルのこと？」

「どういうつもりだ？あれじゃ俺と………」

「あっ！自分でも似てると思う？」

「仕草が似てる。あと性格の端々が。っていうかアリアが好きそうなカンジが」

「そういう選び方をしたからっさ♪」

「ご苦労様。そんなことをしても障害にもならないよ。俺が機嫌悪くなるくらいで」

「やっぱり辛そうにしてるルーが一番カッコいい♪アリア早く浮気しないかなあ♪」

ムカついたから回収した箱をもう一度投げ捨ててアイデアを置き去りにした。

「怒った？…ルーはあ、僕の事どうでも良いんだよね？」

「……どうでもは良くないな」

「それもアリアのためでしょ？」

捨てた箱を今度はアイデアが拾いあげた。

「アリアが僕を嫌ったらルーはもう近くには居てくれないんでしょ？」

質問しながら箱をこちらに渡して来る。思わず手を伸ばしたがその箱からアイデアの手が離れないのだ。眉を顰めて不快を現す。

「アリアはそんなことしないだろう？」

「アリアが僕を殺すような事になったら？今のアリアなら悲しむよね？」

「その時は……アリアが殺る前に俺が殺してあげるよ、アイデア」

「そっかあ…それは安心だにゃあ」

「アイデア？」

「アリア……早く帰ってきて欲しいねっ！」

アイデアが眩しいくらいの極上の微笑みをこちらに向けた。

彼がちゃんとアリアを愛してるってことは分かっている、だから自分を試しているだけだって分かっているがこの王の刹那的な生き方は如何なものかと思う。

だから言えずにいた。

自分達が愛し合っていると言う事さえも…。

1. 国軍元帥は外交官見習い。(後書き)

なかなか幸せには遠いアリアには、最近幸せを掴んだモデルがいま
す。

見掛けとその子の名前を使わせて戴きました。

もちろんアリアではありません。それは日本人じゃなくなっちゃう

(汗)

私があだ名でずっつと「ありちゃん」と呼んでいたから、アリち
ゃんなんです。

この文を書いたときにはやっぱり縁遠かったリアルありちゃんが結
婚しました。

どうか末永くお幸せに。

と言うわけで祝・寿記念投稿♪

2. 新人大使は大魔法使い。(前書き)

シール英雄譚というのが本来のお話でこの話は前哨戦です。
ようやくアリア達もそのシール王国に入ります。

『世界』を呼んでいたとどういいう国なのかは分かるかも。

2. 新人大使は大魔法使い。

船を降り立ったのはカリストのハーネス港を出て七日、シール王国の首都まで馬車で一日。まあ隣国でしかもカリスト港寄りに首都があるシールはカリストの遠い領地にむかうより楽なものかもしれない。

領事館に向かいマクレガー中将与合流し、今までの報告を受けた。彼は命を狙われる事なく、城で見舞えたときより顔色も艶も良くなったようだ。余程シールの社交界が楽しいと見える。帰りたくないといったことを仄めかしていた。

城に登城が許されることになったのは到着の三日後で、王が体調を崩されていたため代理で王子に会う事になっていた。

初めて城に立った時はその建物の秀逸さに言葉が出てこなかった。薄く碧く色付く城は丁寧で綿密な彫りが施されていた。カリストの富国強兵政策に推されて改築に増築を重ね、強固になっていった城とは全く別物だ。庭には樹々は青々とし、どこからともなく音楽が響き渡る城内。楽園があるならここなのでは、と人々に思わせるくらい素晴らしい場所だった。

だがアリアは難しそうな顔をしてそれらを観察している。小突いて耳打ちした。

「船の中で作戦練ったでしょ？笑って！」

「はあい…でも…」

「アナタは今から軍人という立場の人間ではないです。城内の地理覚えるとか、そういうの要らないですから」

「大使という立場だってえ…城を真剣に見ると思うんだけどお…」

「役を作る！お馬鹿な親善大使はヘラヘラ愛想振りまいてればインデス！城は私が見ます」

役とは、アリアの容姿や肩書きを利用し、相手にマクレガー中將

より楽チンな大使だと思わせる作戦だ。自分だって副官としては年若く、アリアなんかはその小柄さと童顔から14、5才に見えくない。おバカな貴族のお嬢様がお飾りで派遣されてきたように見える事にする、そして侮って貰って暗殺者を油断させようと言う作戦だ。

もちろんこれには問題もあって外交的には馬鹿にされていては仕事にならないので自分はしっかりと保護者代わりをしていなければならぬ。よって、事実上自分が大使だと思わせるのが作戦なのだ。

「カイン王子って若いのよね？色仕掛けとか通用するのかな？」

「そんなセコいことしないで良いです」

「猫被るのはセコくないのっ？」

「役作りであって汚いことしろって言ってます」

「汚い事って具体的にナニ？い？教えてよおー？」

「何って…」

レディに言うべきことでは無いために言葉に詰まっていると、ニヤニヤしているアリアの表情に自分がからかわれていたことを知った。どこをどういう風に育てばこんなに愛らしい見掛けの中味がオッサンになるのだろうか？軍隊って恐ろしいところだ。

コソコソ話していると謁見の間の入口の兵隊が槍をトンと地面に着けた。

「これより王子がカリスト帝国特命全權大使に謁見致します。すでにマクレガー大使は中でお話を済ませておりますので」

「マクレガー大使が？なんで先に？」

「半年間の挨拶をしたいとのことで昨日のうちにぜひ先にと申し入れがございました」

抜け駆け的な挨拶に少し気に食わないところはあがあるが仕方ない。しかも彼は貴族だし軍人だがせこい手で地位を手に入れてきた成金。その手腕が政治的に生かされてるのか、見てみたくはあったので様子を伺う事にした。

そんな自分を知ってか知らずか馬鹿みたいな柔和な微笑みを兵士に向けるアリアだった。いや、言付けを守ってるだけなのだからモンクは言えないが……不意の自体にも『扱いやすいお嬢様仮面』が完璧すぎて苛ついた。

兵士はその愛らしいアリアに少し顔を赤らめながら扉を開いた。大勢の兵隊が控える謁見の間、その玉座に座る事なく中央に立つ小柄な青年、彼がシール王国第一王子のカイン王子なのだろう。イデア陛下も女顔だがこちらはまだ幼く、男らしさが備わる前の段階といった印象だ。

シール王家の特徴である美しい銀髪で整った面持ちは五年後にはきっと数多の女を泣かすことになるに違いない。見掛け十五才いていなさそうな年若い王子だが、王子は王子だ。嘗めてはいけない。二人で立て膝を付いて頭を下げた。

マクレガーの出っ張った腹も目に入ったが、放置してアリアに挨拶するように促す。

「お初にお目にかかります。アリアⅡヴォグナーでございます」
敵意の無い、と言った笑みを二人でカインに向けた。

続いて自分も簡単な挨拶をして、カイン王子の言葉を待った。

「今マクレガー大使に色々伺っていたんです。初めまして、カインⅡウェルズⅡシールです」

聡明そうに話すその王子は、その若さにして国の名代を任されるだけある。立派な風格はアリアにもこの機会に見習って欲しい。

「ヴォグナーっていうとやはりご高名なヴォグナー元帥の身内の方ですか？」

いきなり核心をつかれてハラハラしながらアリアを見返すとしてかり仮面を被りきっていて安心した。

「まあ！それはきっと叔父上の事ですわあ」

その話し方にマクレガー中將が口を開けてぽかんとした。

彼は彼女の仕事姿（軍を率いているときの方）を知っているから。だがいくらアリアが政敵になるとはいえ、ここで正体をばらすよう

な事を言えばカリストから兵を手配して叛逆罪で捕らえてやる。

見張りの視線を向ける自分の心中を知ってか知らずか言及を避けた。

「ヴォグナー大使……って呼ぶと……どうしてもヴォグナー元帥の方を思い出してしまいますね」

「ではぜひアリアと、名前でお呼び下さいませ。カイン王子」

初めはたかが半年で教えた通りに出来るか不安だったが、アリアは完璧なくらい仕草も喋り方も表情も貴族の令嬢になりきっていた。この国ではヴォグナー元帥のイメージは最悪と言っても過言ではない。その戦術は神をも恐れぬもので、剣術・魔術共に誰一人シールに敵う者はなく、何千というシール兵を殺して死体の山を積み上げたという話。シールの国境線上を越え進軍し、侵略が始まると思っていた矢先にイデア皇帝の慈悲の下、休戦協定を結ぶに至ったという。

だがそれはカリスト軍の人間は全員ヤラセだという事実を知っている。

元帥の軍がちゃんと捕虜として捕らえていた何千の兵は、本国から殺せという指示があったために全員処刑された。それは前線に出ていた軍人ではなくともカリスト国民ならみんな知っていることだ。元帥軍は命令背いて、本国まで捕虜を強行軍で連れ帰り、生存を訴えていたからだ。だがそれもかなわなく、アリアは自分の手を汚した。

最初に書いた筋書き通りに、皇帝陛下のご慈悲はシール王国に美談として伝わっている。だから彼女の正体は絶対ばれてはいけけないのだ。

「早速ですが、お二方の前任の三名が亡くなられた原因は只今調査中です。この騒動のおかげでイデア皇帝のご配慮によりお二方の代わる代わるの当番制になったわけですが……」

「はい。こんなに人が亡くなっていてずっと大使に任命されるのは一人に重圧が掛り過ぎますから」

アリアの代わりに答えた。アリアも同意するように頷いた。

「ですがマクレガー大使から今、駐在大使として残っても良いと申告がありました。どうでしょうか？イデア陛下に一度掛け合われては？私も外交官としての役割は駐在の方が良いと思います」

自分とアリアは繕わず、同じようにマクレガーを睨んだ。こんなに短期間でシールに丸め込まれるとは軍人の風上にも置けない。所詮は成金のクズというわけだ。

「アリア？」

カインが空気を察して名前を呼んだ。こんなところでばれてはいけないと二人共柔和な笑みを再び顔に貼り付ける。

アリアが引きつりながらも遠回しに帰れ！とマクレガー中將に勧める。

「取り敢えず：早馬を遣って中將の意志は送っておきますのでマクレガー大使は一度帰国されては如何ですか？ご家族も帰って来られると思っていらいっしやるでしょうし：」

「いえ、アリア様。私の事などお気になさらずに。家族も仕事で帰れぬ事を理解しております。駐在大使を置かないのはやはりシール王国に対して不敬と言うものです」

「マクレガー大使！陛下のお決めになった事です！私たちが口を挟むことではありません！」

つい強い口調になったアリアを咎める気持ちは沸いてこなかった。アリアが怒鳴らなかつたら自分がねちねちと責め立てていただろう。この国にはマクレガーの利益になる何かがあるに違いない。それこそ不敬罪で、それこそ叛逆罪に通じてしまうかもしれないことが：。軍人としても貴族としても格上のアリアの睨みにも負けずに、手紙にその意向をまとめてイデアへの許可を取る、マクレガーはそう言い張ったのだった。

領事館であてがわれた部屋は恐らく副官用の部屋だった。マクレガーが素直に帰らないから二人一緒に詰め込まれることになったのだ。

確かに部屋の造りはほぼ一緒だし、年齢から言ってもマクレガーの方が上に世間的には上に見えるのだろう。

だがマクレガーはカリスト的には伯爵。今は正式に継いでいないとはいえ、いずれ公爵……しかも貴族の最高位である皇族公爵になるアリアには本来顎で命令されても文句は言えないはずだ。

「この扱いは酷いですね。駐在が正式に決まったなら仕方ないですが……」

カーテンを開けながらそう言った。

部屋は執務室、寝室、書斎の三部屋。鍵の掛かる寝室はアリアが使うこととして、自分は簡易のベッドを書庫に運んで寝ることにした。

「シゼル、絶対にマクレガーの駐在は決まらないわ。陛下が私に大使を命じたのはいずれ来る開戦のためよ。私ならこっちで捕虜にならずに帰国出来るから駐在するなら私」

「って……海路は封鎖されるでしょ？ どうやって？」

「山越えをして。昔うちの領地のテーベンに居た時にやったことあるし地理変わってなければその時に興した地図もある。頭にも入ってきた。あ、ちゃんとアナタがこっちにいない時に開戦してあげるから安心してね」

アリアはさらっと言うが、テーベンとシールの首都の間の山脈は『魔峰』と呼ばれ、如何なる登山者も受け付けない悪魔の山と言われている。小さな頃登ったから大丈夫！ って言われても、そうですか、じゃあ安心です！ とは言いにくい。そもそも小さい頃に登れるような山ではないのだ。……本来は。

だがそれも『ヴォグナー元帥の幼い頃』としてなら神話的に信じられる。多くを突っ込まずに他の不安を口にした。

「マクレガー大使が在留中にシールから宣戦布告があった場合は？」

「残念だけど、私とその山越えをして彼を暗殺に行くことになる。それをシール王国のせいにしてしまえば戦争の責任の一つにも出来るし」

仮にも彼は伯爵家の人間で、地位を金で買ったとしてもシールに捕虜として存在してもらっては困る、そういうことなのだろう。

しかしシールから逃げ出すだけならいざ知らず、暗殺まで任されるとは…。

「私は陛下のご意思なら何でもするよ？私の噂、知ってるでしょ？」
何があっても最後は否を言わない彼女は、貴族の中で『陛下の忠犬』と揶揄する声も多い。

アリアは執務室の机に寄り掛かって爪を弄りながら自虐的に笑ってそう言った。

彼女がまだ佐官だった頃に自ら剣を取り、自分の婚約者の屋敷に単身乗り込み討伐という名の惨殺をし、手柄を立てて将校になった。本当か嘘か分からなかったが今なら信じられる。

「でもマクレガーが赴任して半年か。暗殺者はマクレガーを狙わなかったってことはあいつは都合が良かったってこと？？それとも何かアイツは殺すに足るものがなかった？」

「調べます。取り敢えず今夜の夜会用に準備をしましょう。アリア、貴女にも誘いがあるかもしれないのでお気を付けて」

「はい」

気のなさそうな返事が返ってきた。

未だにパーティとかそういう類いを嫌がるのは外交官としては大問題なのだが。

「支度は出来ますか？久々に私がやりましょうか？」

「じ、じじ自分で、で、出来るわよ！エッチ！！」

自分がからかうように言うのと執務室と繋がる寝室にドレスと荷物を引きずって逃げ込んだ。

こういう時は普通の女の子なのに、陛下の話をするると妙に深刻な表情をする。

ため息を付きながら暗くなってきたので簡単な火の術でランプに明かりを点した。その炎はいつもよりだいぶ小さかったので、自分も謁見に緊張して疲れてるのかもしれない。

荷物を持ち、宛われた部屋へと移動した。

その夜、歓迎の宴は華やかに催された。

王が不在でこれだけ派手に舞踏会が開かれるのはカイン王子がいかに政治に携わってきているかを現している。まだ皇太子就任前だが跡継ぎになるのは確実だろう。

アリアをエスコートして場内に入った。昼間も思ったがやはりカリストのそれとは違う調度品がこの城を更に引立たせている。美術品を愛でる事が趣味である自分としてはこのお城に居る時間が至福に満ちていた。

（マクレガー大使もこんな理由で残りたいならとても解り合えるのに…）

恍惚の表情で壁や柱を眺めているとアリアが不審そうに服の端を引っ張った。

「シゼル、パートナーを放っておくのはマナー違反だよ」

外交官の正装に身を包む自分達はシール王国の中では明らかに他と違っている。独特の衣装造りもさることながらその民族特有の身体的特徴。

銀髪や金髪の多いシール人の中で、アリアも色素が薄いとはいえ茶髪。自分はカリスト人特有の黒髪。アリアは不安を感じたらしい。「喉渴いた」

「お待ちを…」

アリアの言葉にグラスを取りに向かう。

給仕から二つ受け取り、一口ずつ口を付けてからアリアに渡した。当然だが明らかに嫌な顔して受け取らない。

「毒味したんですっ！今までの暗殺は絞殺一回、毒殺二回、報告書読んで下さい」

「アリガトお…」

腑に落ちないといった表情でアリアはグラスを回しながらジッと見つめた。

「でも毒味に使うのは自分の身体にしないで貰いたいわ。私、副官のスペアを持って来てないの！」

言われた事にすぐ、驚いた。同時に彼女はやっぱりアイデア陛下とは違うと感じた。

言い捨ててすぐにカインのお召しが有り、グラスがこの手に戻って来た。

アリアはおっとりとした仕草でカインのそばへ行った。どうやらダンスの誘いらしく、あれだけのトレーニングの成果が試せると言うものだ。

何人もの婦人の誘いを交わしながらアリアを見つめた。

カインに耳打ちされて赤くなったりはしゃいだように笑う様は正に愛らしいカップル。五才も下の相手によくやるな、と関心した。

二人の微笑ましい姿にワルツが順番を飛ばして演奏される。恭しくエスコートされて、アリアは中央に出た。『先生』としては鼻が高い出来で口から自然と笑みが零れる。カインも満更でもなさそうな様子だ。このまま歳をごまかして嫁にでも行けばしばらくの平和が約束されるのでは？と頭に浮かんだが、婚約者殺しのアリアがアイデアの命を受けシールで王族大虐殺：なんて姿が過ぎったので馬鹿な未来は考えない事にした。

アリアが王子と居れば暗殺の心配は薄い。二人は目立ち過ぎるからだ。

この隙にマクレガーの側に移ってご機嫌伺いに行く。

「陛下の犬が何の用だね？」

冷ややかな瞳でこちらを一瞥し、目を反らした。何を言われたか一瞬解らず眉を顰める。

マクレガーは貴族に生まれて王に逆らうなんて反骨精神の持ち主には見えない。だのにその言葉、つまりはカリストよりも居心地の良い場所を見つけたという事か。

「番犬ですから、愛玩動物で満足する気はございませんね」

邪魔したら容赦しないという意味を込めて言った。マクレガーが何を隠しているかはわからないが反カリスト王の勢力がここに『居る』ことはどうやら間違いないらしい…。

アリアは舞踏会から帰ると執務室へ行き、夜のうちに大きな鷺を呼んだ。

魔術で創った大きな黒い鷺だ。お陰でその白い手にとまっても傷は付かない。

「召喚術があなたの魔術の形ですか？」

「シゼルは？」

「取り敢えず秘密です」

「じゃあ私も秘密です」

お互いに食えないヤツと置いていそうでそれ以上の不毛はやめた。鷺はアイデアへの手紙を結び付けて飛んで行く。早馬だけでは信用ならないのでこのような手段を取ったのだ。

「シゼル、白い鳥を見掛けたら教えて。それが返事だから」

鷺と鳥。こうやって戦場でもアイデアの勅令が跳んでいたと思うと何やらやるせない。

アリアは少しの間、遠くに飛ぶ鷺を見つめていた。しばらくして真剣な口調で尋ねてきた。

「毒物は何だったの？」

「え？」

「大使達が殺された時の毒物は何？」

「……………こちらの神官に看取られているので詳しくはカリストま

で上がってきていません。中毒死の症状があったことから毒物と特定したと報告書には……………」

「ねえ、シゼル。うちの国はね……………」

アリアは眉を顰めて言うのを躊躇うような素振りを見せた。そこまで話して続きを話さないのはナシだ。

「アリア、シールにいる間は一蓮托生です」

低めの優しい声で説明を要求した。

「男爵家には関係無いんだけど、上級爵位……………公・候・伯・子は横で繋がってるのよ」

「繋がり？何です？」

「つまり、これ」

出立の時にアリアが握っていたペンダントを自分の目の前に出した。家紋が彫られている美しい金細工。ロケット部分は変わった造りになっている。裏と表、互いに何かを入れられるような形。もちろん忍ばせておくものなのだからあまり大きなものではない。

「表は……………自害用の毒。裏はその毒物のものではない解毒剤よ」

どうということだからずにロケットとアリアを交互に見つめた。アリアは唇を噛みながら言う。

「あのね、上級爵位を持っている人間はみんな違う毒物を持たされてるのよ。で、更に誰のだから判らない解毒剤も一緒に持たされてる。誰が誰の解毒剤を持ってるのか……………知ってるのは最上級爵位の皇族公爵と陛下だけ！ちなみに今皇族公爵は不在だから陛下だけの……………はず」

はずなんだけどね……………とアリアは唸るように吐き出した。

「シール大使は重要ポストだからだいたい上級爵位を持ってる人間が行ってるでしょ？だからロケットの毒物を使ったんじゃないのかな？で、それが自害したのか……………他殺なのかによって随分と状況は違うよね。遺品の中にロケットはあったのかな？」

「本当に……………報告書を読んでいないんですね？」

「テヘッ☆他に覚えることがいっぱいあり過ぎてサラッとしか読ん

でませえん」

「…………シールの神官からの報告書も、カリストの大使副官からの報告書からもそのような遺品は無かったと思います」

「そう。じゃあ一人目の大使が絞殺で殺されて、その遺体から抜き取られた毒物で二人目、三人目が殺された…………その可能性が高いわね。陛下に今までの大使が持っていた毒物の解毒剤を取り寄せて貰えるように頼んでおくわ」

「それが良いですね」

決まるとアリアはもう一筆手紙を書いて再び鷲を召喚した。立て続けにいつも簡単に召喚出来てしまう所はさすがカリスト最高位の魔道士だ。

しかし、この人が報告書をちゃんと読んでくれていたらここに来る前に事前に用意出来たはずなのに…………。少し白い目で彼女を見遣った。

「あれはマクレガーのオヤジ？」

アリアが鷲を飛ばした方角を行儀悪く指をさす。あまり夜目の利かない自分だが、あの悪趣味な赤いマントとプチデブサイズのカリスト外交官服はマクレガーしかないない。

「アリア」

「うん」

目を合わせて追跡を開始する。マクレガーは軍人らしからぬマヌケさですぐに尻尾を掴めた。彼が入ったのが別邸だったからだ。

シール城は区画が三つに分かれており、そのうち客が入れるのは一つだけ。向かって左が皇子宮、右が後宮、一番前に構えるのが本殿だ。客は本殿しか通されない。

そして皇子宮の外れに別邸はある。

そこを使える人間は限られていると昼間、案内の者から説明を受けた。

「なんか…………暗殺とは別の問題だと良いわね」
本当に、だ。

アイデア陛下はわざと裏切りそうなマクレガーを赴任させたのではないだろうか？それで尻尾を掴ませて解決するために。

扉をそっと開いた。

誰も、いない。四角いだけで家具も何もないだっ広い部屋だ。入ったはずのマクレガーまでいない。

ただ、残された魔法陣と部屋中に広がる血と獣の匂い何か術の結果である事は素人目でも分かる。誰かを呪い殺そうとしていた？それとも……………。

「誰です？」

大人の男性にしては少し甲高い声で呼び止められた。パッとアリアのドレスを自分の外套に隠して扉を振り返るとカイン王子が一人立っていた。

どうやって振り切るか、どうやって言い逃れるか迷っている間に彼は不敵に微笑んで片手を挙げる。

「あ……」

「確保！」

カインの強い掛け声でどこからともなく現れた兵士達が一斉に自分達を抑え込んだ。

驚愕して声が一瞬出なかったが、太股に装着している短剣に触れてタイミングを図っているアリアが目に入って冷静になる。ここで暴れてしまえば完全に犯罪者だ。

「アリアっ！か、彼女に乱暴はやめてください！！抵抗はしませんから……」

最初の呼び掛けはアリアの制止を促す為だ。兵士も女性を、しかも小柄で愛らしいアリアを手には掛けるのはためらわれたようで囲んで行動を制止させるに止まった。自分の身体は後ろに手を回されて完全に捕らえられている。後ろからカインが回り込んで来て自分の顔を上に向かせた。

「ここで誰と落ち合う予定でしたか？」

「何の事です？」

「…………マクレガー大使も調べさせましょう。アル！」

アルと呼ばれた人懐っこそうな赤茶髪、長身の男が頷いた。彼はカインの片腕といったところだろう。

「何が起きてるんですか？」

事態が思っている以上に大きそうだったために呟く様にカインに尋ねた。

兵士の一人が生意気だと言って殴り掛かってきたが、カインが制止させるように首を振った。

「…………父が病に倒れたと言うのは建前で毒を盛られて意識不明なんです」

「毒!？」

暗殺されかかった、と言う事だろうか？前任大使も毒殺だと言う事を考えると同じ毒ではないかとふと考えた。これはカリストから黙ってシールに毒物を持ち込んだ大使が全面的に悪い。大きな外交問題になりかねない事態だ。簡単に言えない事実二人で顔を顰めた。

「アリア、有能な補佐官をお持ちの様ですね？思っている通りだと思いますよ？検出された毒物はいこの前に殺された大使と一緒にあった。もう一人とは毒物は一致しませんでした……遅効性の毒物らしく、父は少しずつ服用させられていたと思われます。症状は最初のうちは風邪の様なものでその後寝込む様に、とうとう今日の夜に飲む薬の中に多量の毒が仕込まれていました。急いだのか、暗殺者の本陣が乗り込んで来たからなのか……そして警戒していたらあなた方がフラフラとここへ」

マクレガーの怪しげな行動が頭を過ぎった。十中八九マクレガーが毒を仕込んだとして……何故シール王を暗殺をする必要があるのだろうか？

誰かに頼まれた？

アリアが考え込むように「多量?」と呟いたのが聞こえた。ロケットに入っているような量は多量であるはずはなかった。人間が一

人確実に死ぬ分、と普通は決まっている。そして解毒剤もそれに対しての同量だろう。

「あなた達がやったとは思っていませんが疑わしい行動全て…今はまずいです。ということで身柄は私が預かります。ここが皇子宮の一画なのは解ってますよね？取り敢えずの罪状は不法侵入罪で！」
高らかに別件逮捕を言い渡すと自分の首元に衛兵の槍を突き付けた。

「アリアは!？」

「大丈夫。僕は女性に優しいです。彼女は私の宮で軟禁。貴方はその地下で監禁！ただソレダケデスカラ」

からっと明るく言い切られた。だがアリアが自由なのはとても有り難い。

「マクレガー大使は？」

「捕まえたら貴方の隣りの牢屋にぶち込むのでいずれわかりますよ」
終始ニコニコして乱暴な事を言うカインを見ていると何処かのイデア様が思い出される。

王族って……権力を持つとみんなこんな性格になってしまうのだろうか？

それなら小市民のままで良いと思ってしまうのは自分だけだろうか……。

カインの部屋の隣、恐らく部屋付きの侍女が控える部屋に自分は詰め込まれた。

と言っても王族の侍女とかなると小貴族のお嬢様だったりするため部屋も結構立派なものだ。

更には世話をする侍女も付けると言われて丁重にお断りした。何でも自分で出来る様に、というのがヴォグナー家の教育方針です…って少し苦しい言い訳だったかもしれない。

だが風呂も、トイレも、食事も王子宫のカインの部屋で出来てしまう。更に中庭に出て少し散歩するくらいなら許された。さすがにこれは監視付だ。後宮と本殿に逃げ込めてしまうから。

部屋の主、カインは自分がここに入られてから一度も戻って来ていない。やはり王の不在に対する負荷がかかっているのか、離れられない程に王の病状が悪いのか……。

マクレガーが捕まったという話も聞かないのでここは時が止まったかの様な静けさだった。

シゼルはどんな酷い目にあわされているのだろうか？あれでお坊ちゃまだから耐えられないのではないかと心配していた。

逃げる気になれば二人で逃げる事だって自分には容易いってシゼルも分かっているだろう。でも逃げたらカリストにすら戻れない。イデアの期待を裏切る事になるのだから。

「アリア？居ますね？」

カインが戻って来た。二日ぶりだ。朝帰りどころか昼になっていた。

自分が居る事を確認するとふらふらとベッドへ倒れ込んだ。

居ない方が良さそうだと思い、自室へ帰ろうとするとベッドから手だけで呼び止められた。“こっち来い”と言った様に動く右手に釣られてそっと近寄る。

「すみません、体力の限界なのでこのまま失礼」

「お話は休養が取れてからでも良いですよ」

「マクレガー大使が、行方不明です。あの夜から」

「私達、マクレガーがあそこをふらふらと歩いているのを見掛けて追跡していたんです」

「あなたの副官もそう言ってますね。少ししたら釈放出来ます。もう少しおとなしくして下さい」

「…はい」

「父も……意識は戻らないなりに回復に向かっている……」

「あ、まだ生きてたんですね？」

自分のこの物言いがカインのツボにハマったらしく吹き出して肩を震わせた。

「あなたはマイペースですね。普通の貴族令嬢なら涙を流すとか、芝居がかった態度を見せたり口にしたりするものですよ。外交術としてはとても下手だ」

身内を目の前にしてこの物言いはまずかつたかもしれない。的確な指摘に何とも言い難い気持ちになった。外交術が建前や上辺での会話が上手くなることなら、自分の生きてきた戦場はいかに素早く事実を伝令するかが勝負になることが多い。長く戦いに身を置いてきた自分としては今の状況がむず痒い。

「本当に、疲れたなあ」

寝返りを打って仰向けになった王子はそう呟いた。王子の歳相応の言い方に少し感動を覚える。急に人間らしさみたいなものが見えて共感したと言った方が良いのか、優しく訊き返した。

「疲れましたか？」

「…うん。疲れてるって誰にも言えなくて疲れた」

「人間なんだからあ…、一晩中仕事してたら誰でも疲れます。周りも言わなくても分つてると思うけどなあ」

「うん。でも平気に見せたくて頑張っちゃうんだ…矛盾してるけど…ってか何でこんな話しちゃってるんだろ？」

なんかグダグダだ、って言ってまた転がり、枕に伏せた。

王の不在と言うのは、急に不在を埋めるのはどれだけのプレッシャーなのだろうか？

それを支える立場にしかない自分には到底分かりようがない。

せめて今だけはそのプレッシャーから解放されるように願って、王子の頭をゆっくりと撫でた。

カインが眠りについてから数時間。夕方に彼は目覚めた。起き抜けに言う。

「アリア、ドレスは用意してなかった？」

「え？…部屋に何着がありましたね。さすがに寝間着はお借りします」

「寝間着も下着もドレスも。全部アリアの為に用意した物だからちやんと使いなさい」

カインは肩までの銀髪を掻き揚げて苛ついた様にそう言った。そう言う仕草は実年齢よりも大人びて見えて面白かった。

だが根が貧乏根性座ってしまっている自分には、その至れり尽くせりが居心地悪くて。まあ命令してくれた方が使いやすいが。

着たきりなうえに家事までしてまわっていたお陰で大使服は少し汗臭い。

カインは起き上がってテーブルの上に置いてあった呼び鈴を優雅に鳴らした。突然三人の女官が入ってきて、『何？』と首を傾げていると指をさされた。

「洗って！イブニングドレスを着させて！」

カインのまるで洗濯物を頼むかの様な物言いが自分を指しているとようやく気付いた時には年若い女官二人に両脇から腕を捕まれて引っ張って連れて行かれた。

浴室でシゼルが以前した様にドレスを脱がされてペチコートと下着になった時に気付いた。

これ以上はマズイ。

「あゝ！！自分で出来すっ！出来すからあっ！！」

浴室から三人を放り出し、付け加えてこっそりと言った。

「お風呂から上がったなら手伝って下さいい…一人でやると時間掛かっちゃうからあ」

その言葉にゴメンナサイと続けると小鳥の様な笑い声と了解しました、と責任者の様な女性の声が聞こえてきた。

「だってえ…」

ペチコートの下に隠してある剣ホルダーを見つめた。ロケットは普通に見れば父の遺影が入ってるだけだが、武器はいくらなんでもまずい。身体検査がなかったうえに自由にしているとはいえ、自分は今捕虜も同然なのだから。

ホルダーごと浴室に入り身体をキレイに洗い上げた。こんなことをしていると本当に敵国に來たのだと実感が沸く。

何せまだ一週間くらいしか経っていないのにこの波瀾万丈ぶり。外に出ると新しい下着とペチコートが用意してあったので有り難くお借りした。

出ると三人掛かりでドレスを着させてくれたり髪を結ってくれたりメイクしてくれたり、あっという間に出来上がる。

ポンツと放り出される様にカインの前に戻された時には中庭に夕食の準備がしてあった。

女官達に頭を下げてから深い碧のドレスの裾を持ち上げてカインに近寄っていく。

「うん。キレイになったね」

緩く編まれた髪の毛に掛けられたリボンをそつと直されて、何だか急に恥ずかしくなった。

「子供扱いしないで下さい：私あなたよりずいぶん年上なんだから」毛先をクシャッと握ってそう告げる。シゼルが一生懸命に隠してた事を簡単に暴露してしまった。

きょとしたカインは髪を握った手を上から重ねて言う。

「僕二十歳になります。大体の人に十五位に見られます」

「は、たち？成人？」

十五歳と勘違いしていたため面食らった。だが多分カインも自分の歳を勘違いしている。自身が年齢の事を気にしているせいで周りにも何も言っていないのでシゼルも勘違いしているのだが…。

「でも……私、二十五歳です」

「えっ…」

なんとも気まずい雰囲気が出る。だがカインはともかくシゼル

が勘違いしているのは気に食わない。軍最高司令官の元帥にコネがあったところで二十歳そこその人間が就任出来るはずがないのに。生まれてきた時から英才教育紛いのことは施されてきたが、自ら十二歳で士官し、コネと実力で跳び級しまくってようやく玉座の見える位置にやってきたのだ。

「十五歳くらいだと思ってたあ……」

お互いの声が重なった。

何とも言えない可笑しさが込み上げる。若く見られると言うことは普通の女性は好むらしいが、一線で働いている人間は馬鹿にされているも同然。だから本当は歳相応に見られない事が嫌いだ。

カインは同じ悩みを持つ者同士分かち合える気がして少し気を赦した。

「さあ、席に着いて食べよう」

椅子を引いてもらって着席した。

女官達がスープやサラダをサーブし始めた。建物の中からの明かりだけだったのにカインが掌に小さな蝶を作り上げてゆらゆら翔んでその軌跡に明かりが点って行く。蝶は炎の蝶でカインの使い魔の様だ。

「きれい……」

「魔法は戦争とかに使うよりもこうやって使った方がステキだね」
美味しい料理に優しい本物の王子様、夢の様な時間。シゼルが囚われてるのを忘れてつついっつい楽しんでしまう。二人共成人である事を確認したのでお酒も呑み交わし、その時だ。

「白い鳥！？魔法かっ！？馬鹿な、城には結界が張ってあるのに」
急襲を知らせるカインの声で空を見上げた。

その先には見覚えのある使い魔が。
ルーファスの使う白い大きな鳥が自分を見つけて一直線にやってくる。

「ルー……遅いよお……」

立ち上がりそれに手を伸ばすと手紙にすり変わり消え失せた。結

界があつたから遅くなつたのか、アイデアが怠慢なのかは解らないが
ようやく届いた救援を大切に、大切に、抱き締めた。

「何ソレ？さすがにちょっとそれは許せないよ？」

そう言うカインの手が迫ってきた。軟禁されてる人間にそこまでの自由を与える奴は居ない。

だが簡単に渡してやる筋合いもこちらにはない。カインをサツと避けて手紙を開く。すると中にはマクレガーと自分を含む今までの大使の持ってきた毒物の詳細と解毒剤の詳細が書き込まれていた。解毒剤は手に入り次第、追加で送ると記されている。それじゃ遅いかもしれないが……。

手紙の括りに『アリアの勝手にしろ』ってアイデアらしい投げやりな回答。

マクレガーの任を解くとかそう言う采配はしてくれないらしい。用の無くなった手紙をカインに取られたふりして渡してやる。

「これは……つまり」

良い様に交わされた事で自尊心を傷付けたようだが内容が内容だ。少し強張った表情で手紙を見つめている。

実戦をしたことのない王子様に負ける程この半年で衰えたりしてないのだ。

だがわざとらしいくらいに必死で避けたつもり芝居もしてやったのだが。

「しかし召還魔法とは城の結界越えも含めて三日ですか？それで往復出来てしまうなんてどんな有能な魔道士なんだか。シゼル副官はすごいですね。本当に有能だ」

すごく感心したように言うカインをジッと見つめた。いや、一生懸命自分がやっていない様に見せてきたのだから彼のそのコメントは思惑通り。だが全く眼中に入れて貰えないのも淋しい。

「これは……前任大使の自害用の毒の解毒剤はマクレガー大使が持つてると言うことですか？王の毒物が大使殺害と同じものなら解毒出来ると？」

「そうなりますね。その毒物が本当に前任大使殺害に使われたのか、それは分かりませんが前大使の解毒剤を持つ人間が：偶然にも次の大使として呼ばれているようです」

「マクレガー大使の部屋を探させます。カリスト大使館の中のガサ入れ許可を下さい」

「それはもう。治外法権なんて今は言ってられませんから。カリストのマクレガー伯爵家からもすぐに追加の解毒剤を取り寄せましょう」

「お願いします」

そう言うときカインはサツと一筆書いた紙を侍女に持たせた。

自分も続けて手紙を綴る。流石にここで召喚して飛ばすのは躊躇われたので書き終えたものを握ってカインを見つめた。ここで自分の知る情報を公開しておくのも有りだ。

「カイン王子、私達はマクレガー大使が別邸に入って行くのを見ました。中は魔術の跡があったのを見ましたよね？あそこは誰が使っているのですか？」

「あそこは：：叔父です」

「失礼ですがカイン王子は何故：：：皇太子ではないのです？」

「試練を潜った者が新しい契約を交わし、皇太子となります。まだ私がその儀式を終えていないからですよ」

「終えていないうちにシール王が崩御なさった場合は誰が跡継ぎに？」

「試練は王族の義務なので試練を終えている者から選ばれます。第一位継承者には額に継承痕というマークが現れます」

「それは誰です？」

矢継ぎ早に質問をした。

こんなことは他人に言われなくても分かっているだろうがマクレガーとその別邸の主は繋がっている。その理由はきつとシールの王位継承に繋がっているのではないかと思っていたのだ。

カインが苦虫を噛み潰すような顔をして口を開いた。

「一番可能性があるのは叔父だけど」

少し幼い口の利き方に戻った。こちらが素なのだろう。取り繕う余裕が無くなってきたのか。

「でも叔父はもう出家していて……っ！」

ありがちだが、王位を継がない王族は神官として神に仕える。ここでも例に漏れず、と言う所だろう。だがその事実は無視しがたい。シゼルの報告書の説明を思い出して眉を顰めた。

「うちの大使の検死をしたのはアナタの叔父さんですか？」

「そうだよっ！ある程度身分の高い人間の検死なら高位の神官が行っておかしいことではないはずだ！」

だが話はほぼ繋がった。

カリスト特有の、シールに解毒剤の無い毒物で王を殺害してしまえば確実にしとめることが出来る。はじめの大使を殺して毒物を入手し、本来ならそれだけで良いはずがその後何人か同じように死んだ理由は少し分らない。だがその叔父上とマクレガーは繋がっている。解毒剤が手に入らないように逃げ回っているに違いない。だとすればマクレガーの荷から解毒剤は出てこないだろう。

「その儀式は、何をすれば？」

「後はもうシールの神と契約を交わすだけだ。教会に三年間の修行を済ませた。神官から代々の魔法を授かって終了だよ」

「じゃあ行きましょう」

「え？」

「王子は今睡眠も取ったし、腹搾えもしたし、解毒剤の手配もしたでしょ？あと一仕事しに行くんです！」

「父が眠る間に？そんな勝手な事は……しかも儀式には強い力を持つ神官が立ち会わなければ……」

「呼べば良いじゃない！神官を！そしたらアナタが皇太子になれる！そしたらシールは安泰です」

「……最高位の神官は、その現皇太子の叔父だ」

「別に、力がある神官で良いならシゼルにやらせましょう？呪文を

授けるだけなんですよね？」

「なんだか自分が無茶苦茶な事を言っているって事は解る。

だが叔父さんとやらが王を暗殺する理由をなくしてしまえば良いのだっただけが今すぐ出来る事だ。皇太子が彼だから暗殺をして意味が生まれてくる。それなら彼を皇太子ではなくしてしまえばいい。」

出来る事はする！

もちろん神官のマネごとをシゼルが出来るなんて思っていない。

やるのはカリスト最高位の魔導士、アリアⅡカリストⅡヴォグナ
ー様だ…。

「と言う訳でシゼルに神官の代役をして貰うことに…」

「……」

シゼルは目を丸くして自分を見つめている。無茶なのは重々承知なのでここは冷静に、かつ素直に従って貰いたい。

「あ、補佐は私がやります。時間も無い事だし、誰か使うよりも息が合ってる人間のが良いと思うの。私も魔法は少々嗜んでおります」と、カインに事前に言いくるめておいたものと同じ説明をする。

「アリア…」

痛々しくシゼルの頬は腫れている。いつもと違いシワになっただけにいるシャツの隙間から身体中に暴行の痕が見られた。そんな素振りも全く見せずに立ち上がり自分の腕を掴む。

「取り敢えず早くしなければならなら今やらなければいけないのはシールの魔術を学ぶ事です。王子、魔導に関する書庫を開けて下さい。二人で儀式の方法を話し合います」

「お願いします」

「カリストとシールでは魔力の源が違うので、一時間下さい。こちらの魔法を覚えてきますから」

「たった一時間で？流石エリアが推薦するだけある」

「お褒めいただき光栄です」

そう言ったシゼルの目は全然笑っていなかった。

カインはそれまで病の王の側にいる事になり、書庫の鍵を手に入れた二人は知った道のように本殿を進む。

しかし自分の腕は未だにシゼルに拘束されていて、その道を選んでいるのはシゼルだ。流石と言うか……一度の謁見と一度の舞踏会で城内を把握していたらしい。自分の屋敷に來た時もだが、勝手知った我が家の様に人様のお宅を歩くのはもう特技としか思えない。書庫の大きな扉を抜け、鍵を再び締め直せば完全な密室になる。

「どうするつもりですか？ご期待に沿えずに申し訳ないですが私は神官ではありません」

「分かってるよ。もちろん私が演ります！」

「千人斬りって呼ばれてる貴女が神官なんて初耳ですね？」

「人殺したら神官ってなれないの？」

「現役 of 戦争屋さんは流石に神も嫌がると思いますが？」

「神官じゃないけど、魔法なら外交術より自信があるもの」

そんな言い合っている場合ではないのだ。シゼルから腕を振り払って儀式に関する記録やこの国の魔導書を手に取った。

「シゼル、暇なら寝てて良いわよ。これから嫌でも疲れるだろうし」

「……どんな本を探せば？」

シゼルが苦虫を噛み潰した様に言った。本当に苦勞を掛けるな、とは思っているのだ。

だがマクレガーも、解毒剤も、何もかも出てこない今、儀式を行う事が一番手っ取り早く敵を炙り出す方法だと思うのだ。一つでも防波堤を作らないと……チェックメイト寸前に相手の手に気付いてしまったのだから多少の無茶やズルも仕方なし。

「シゼル、傷は？」

「何の事です？」

自分の質問に、はだけていたシャツのボタンを留め直して何でも

無い風に装った。

意外と負けず嫌いだなあ…。

「魔術本って研究者が自分で解析して実戦して書いた物で大半が他の人にはその能力を出せない物が多いの。だからシールの魔導を解いた原書があれば私が解析する」

「原書は誰が書いたものですか？」

「さあ？ 神か、悪魔か？」

どっちが悪魔でどっちが神なんて言うのはまだ調べがついていないが、原書はそのどちらかによるものであることは確かなのだ。重たい表紙を開き、前書きをすっ飛ばして本文を読み漁る。

二つの原書、両方読んだ事があればすこしはその正体にも迫れるのだろうか残念な事に長いこと不仲な国なものでその機会に恵まれた魔導士は未だに存在しない。こんな機会が無ければ自分だってシールの魔術なんて勉強しないのだ。研究者としてはラッキーだ。

「原書は宝物として安置されてるのでは？」

「まあ…残ってるのならそうね」

儀式そのものが…いや儀式で継承される魔法とやらが原書の知識なのでは…と自分は思う。あわよくば儀式の最中に解析まで済ませていってやろう。そしたら帰ってアイデアから原書の存在を聞き出せば世界の魔術はこの手の中だ。

流し読みとしか言えないスピードでページをめくるがちゃんと内容を正確に拾っている。

古代語や天使文字エンクも混ざっているので読み辛いこともあるがこの程度なら大丈夫だ。

やはりカリストとは力の扱い方が違い…いや扱い方は一緒だが力の源が違う。魔法陣もほぼ反対の意味を持つ物を使う。

試しに手の中にシールの魔法陣をおこしてちよつと炎を造ってみた。

「アリアっ！ 何やってるんですかっ！！」

シゼルの叫び声で自分の手の中に思った以上の火力を持った炎が

発生していることに気付いた。

慌てて書物に燃え移らないうちにすぐに消火する。

いつもの魔力以上の成果と、そして魔術書に記入されている魔法の稚拙さに少し驚く。

つまりはちよつとの魔力で大きな成果が出るので強い魔術を使う方法が発展していかなかったのだ。

大体儀式の方法も理解出来たし、これは儀式で得られる魔法が楽しみになってくる。新しい魔法が見られることでウキウキしている不謹慎な自分。絶対に解析してやるってほくそ笑んだ。

「シゼル、見てて！右手にカリスト流の魔法と左手にシール流の魔法を同時に出したものよ」

同じ魔力で、だ。右の螢火くらいの灯に比べて左の煌々と燃え上がる炎。

「どっちが良いんだろう？これは魔力の使い過ぎで命を削る事はないと思うけど…自分の力を使わないでシールの魔法は何を使ってるのかしら？この魔法陣で解析出来ない部分があるんだよね」

まあ、こんなことをしている場合ではないんだろうが。

大まかには原理も分かったので立ち上がった。

時計を見つめると一時間弱。約束の時間ギリギリと言った所だ…。

「出来るんですか？」

「これなら……見たでしょ？シールの遣り方で魔法を発動したら小さな魔力でも成果は十倍ぐらいで出る。これならシゼルにも出来る」

「どうやるんです？」

「でも……シゼルはカリストの神様信じてる？」

「朝晩のお祈りくらいはしますね」

「じゃあやめておきなさい。二度とカリストの地に帰れなくなっちゃうから」

この回答で遣り方は決まった。ポンツとシゼルの肩に手を置くと『シール流』で魔法を発動させる。目線が変わっていく。

「この魔法はカリスト側から見たら邪教だからアナタは見て！私は神様なんて信仰してないの。信じてるのは自分の力と自分で得た仲間だけだから」

自分の声はいつものシゼルのものと同じだ。

そして自分の姿勢を持つシゼルの肩をポンポンとまた叩く。

魔法でお互いの姿形を入れ替えてやったのだ。これが一番手っ取り早い。

「なっ……ナンデスカコレええっ！！！」

シゼルの……いや、いつもより女らしいアリア嬢の甲高い悲鳴が書庫内に響き渡った。

本当にアリアを信用して良いのか、未だに判断に困っていた。

おっとりしているお嬢様の印象だったから気を抜いていたのだが、最後に弁舌ぶったアリアが多分一番素に近い。

軍に力を持つヴォグナー公爵家で育ったからだ、と言えば納得出来なくないがやっぱり不自然だ。

「アル、どう思う？」

シールの客員剣士で自分の親友に尋ねた。

「アリアさん可愛いよなあ。まさか嫁にもらうとかそんなこと考えてるのか？エッチいゝ、小柄だけどナイスバディだし抱き心地良さそうな身体してる！顔超カワイイし俺は好き！」

と、赤茶髪の剣士・アリエストIIアードレーは破顔した。

この空気の読めなさ自分への物怖じしなさが、気が置けない親友たる所以ではあるが今はちょっと考え直したくなる。空気を読め！と白い目を向けた。

「アル……」

「深く考えなくて良いんじゃないか？だってアリアさん側にも利益があるから協力してくれてるんだろ？それが目に見えてるわけだから」

ら協力はおかしな事じゃない」

「……そう、かな？」

「まあ、国の重要書物が沢山おいてある書庫に敵国の人間を入れたのは流石ボンクラ王子って思ったけどな！」

言い切る前に頭に拳を振り下ろしたのだが、いかんせんタツパが違い簡単に止められる。

「何を戯れているんですか？」

暴れてるとノックを聞き逃したのか静かにアリアとシゼルが入ってきた。

何だか二人の雰囲気が先程と違う。

「多分呪文の継承は行えます。書物に書かれていた禊と儀式に使っている湖はどこですか？」

「この城の下に地底湖です。そこが……」

「では王子はすぐに禊を」

淡々とシゼルが言った。

アルと目で合図を送り立ち上がる。

するとアリアが少し前に出て父の眠る寝台を覗き見た。

「あり：シゼル、王を回復することは出来ないんですか？」

「できません」

あんまりはつきりと言われて、アリアと自分は同時にため息をつく。そんなに酷いのか……と。

アリアは哀しそうな表情を浮かべた後に、恭しく少し近寄り。

「じゃあ少しだけです。王に祝福あれ」

そう言いながら王のその手に口付けた。その仕草は眠れる姫に挨拶するナイトの様でおかしかったが、その瞬間から王の呼吸が整って行くのを見逃さなかった。

彼女は今、確かに治癒魔法を使ったのだ。

地底湖、その名の通り地下深くに深々とわき出る湖でその場所は王族と高位の神官以外は知らない。

王族は湖で生まれ、湖に還っていくと言われるくらいに縁の深いものだが一般の民には伝説に近いものだと言物には記してあった。少し顔色の悪い本来の自分の顔——シゼルを見つめた。神官の補佐は別に要らないと言ったのに食らいついてきて魔法陣の上に立ったのだ。それなのに不安そうな表情……。

本当に負けず嫌いだな。

「それでは始めましょう。カイン王子は魔法陣の中央へ」

襦を済ませて衣一枚になったカインが祭壇の魔法陣に上がった。着衣時には分からなかったが鍛えあげられた筋肉が見える。プロの自分から言わせて貰えばあんなものは『見せ筋』で実戦的にはあんまり役にたたなそうだと品評した。

「それではカイン王子、儀式に際する契約の言葉は言えますね？」

「大丈夫です」

シール流でいきなりの大型魔法、本当に自信があるのかと聞かれたら八割位だ。

あとは気力だけで制御に成功させてみせる。

まずは既に台座に描かれている魔法陣へ魔力を伝えていく。力の吸われ方が尋常じゃない。まるで生命力を吸い取られているような、魔法自体と自分が同化してしまふような感覚をすぐに味わった。だがまだ自由が利く。

湖の底から赤黒く光る物体を引き摺り出してくる。これはさながら悪魔生誕の儀式のようにも見えた。莫大な情報量の魔法陣が赤黒く見えているだけだ。やはりコレが原書……つまりシールの魔力の源なのだろう。

（なんか気色悪い）

触れた瞬間から重い枷の様なものが自分の身体に乗っかってくる。これは本格的にヤバイ。

（アイデア！ルー！）

祈った。何に？神にはない事は確かだ。自分に…か？

赤黒い球はカインに渡す前に自分に取り込まれようとしていた。それに気付き、必死に藻掻き引き剥がす。

（こんなヤバイもん、私は要らないっ！）

だが一瞬魔力が交わった。

自動解析されるように自分の情報は抜き取られ、その代わりに情報が入ってくる。

世界の理と、魔法の矛盾と、神と悪魔が囁いているその内容は世界をこの手に出来るくらいの大きな魔法。

何もかも解った気がして、何もかも自分に出来る事は一つもないって無力を思い知らされただけ。神に踊らされているだけか。悪魔に弄ばれてるだけなのか…。

だが手にしてる物は真っ黒の情報、やはりシールの魔法の方が黒魔術だ。

自分から力業で引き剥がす事に成功したが、カインに渡す事をためらった。このまま渡すよりもこの魔法の源をここで封印するべきか。

（封印とかでこんなヤバイもんを世に残しておくよりも………っ）

一度その魔法を自分の身体に受け入れた。

カインが目を見張る。

シエルから魔法が解ける、自分自身の姿が湖に映る。全て一瞬の出来事だ。

（解析しろ！深く深く……！この魔法を正しく変えてしまえばいいんだ）

そして再構築しよう。

シールとカリストの魔力の均衡を崩す。関係性を断切りあるがままの自然の摂理に乗っ取った魔法になるように…。

再び魔法陣を身体から出した時には他に何をする力も無く、ただ倒れ掛かる様にカインにその魔法を預けた。

魔法を受け取り、継承する声が凜として響く。

「我が名はカインⅡウエルズⅡシール。シールを治める者なり」

身体が酷く怠い。

頭痛と吐き気、そして身体の中に虚無を感じた。抜き取られたような何かは今までの自分そのもののような気がして藻掻く夢を……。

ゆっくりと目を開いた。ランプの淡い光ですら自分の目には痛いくらい眩しく感じる。そうか、倒れたのか、とようやく置かれた状況を把握した。

「…シゼルは治癒術士だったのね？」

胸元に置かれた手をそっと触った。魔力がジワジワ溶けていくようだ。温かさが心地良い。

シゼルが居て良かった。あんな魔法を見た後にシールの治癒術士に癒されたら絶対気分が悪くなる自信がある。

「カイン王子は？」

「僕ならここにいるよ、ヴォグナー元帥」

カインらしからぬ嫌味な物言いに眉を顰めた。あれだけの魔法を制御させて（あげく変化の魔法まで二人にかけていて）この上「アリアはすごいですね！さすがヴォグナー元帥の姪っ子さんだ！」とか言ったらただのボンクラバカ王子だとは思うが…。

嫌味を無視して起き上がり、カインの額に触れた。魔法が定着しているか確認するためだ。彼の長めの前髪を掬い上げて額を確認する。薄く浮き出たマークが皇位継承権が移ったことを現している。魔法は自分によって改ざんされたモノが根付いていた。どういう形に作用するか、今はまだ分からない。彼が何かの切っ掛けでその魔法を発動した時に全て答えは出るだろう。

ソレは悪魔の呪文だから使わない方が良いよ、なんて簡単に信じてはくれないだろうし、自分のその考え方こそただの文化の違いだ

と言い切られたらそれで終わりなのだ。

この儀式によって悪魔の呪文の一つがカインのものになった事、そして魔法が発動した時に解呪出来るのは自分だけだという事。

取り敢えずは一切白を切り通す事に決めた。

だがそういう質疑は何もなく彼は言った。

「早く身支度を整えてくれ」

苛ついたカインの声。自分の意志が伝わってか尋ねるような態度はもうない。

服を離さぬままに上目遣いで彼の顔を見つめた。それはもう激怒と言って憚らない程の不機嫌を表に出している。説明もナシに勝手に一生に一度の儀式の方法を変えて、何も言わずに倒れこんだ。更に説明する気はないのだから後ろめたさ増す一方で…。

「え？身支度って…」

「父の部屋で『王崩御』の伝令をばらまく」

その言葉の持つ意味、黒幕をあぶり出すつもりらしい。叔父君も今、皇太子でなくなった事実を知っている頃だ。今崩御されて困るのは彼だろう。カインに一度王位が移ってしまえば王位継承順位は大きく入れ替わる。

カインから身を離して立ち上がった。グシャグシャのドレスはそのままに、すぐに髪の毛を結って出ようとする。

だがマナーにうるさいシゼルに止められた。

寝てるとはいえ王の前に出るのだから、と。

いつの間にか略装が用意されていてそれに着替える事に、いや着替えさせられる事になった。

シゼルの手によってあつという間に…。

「呆れたお姫様だな？結婚前なのに男に裸を見せるなんて」
衝立越しに冷やかなカインのセリフが浴びせ掛けられた。

（良いんだもん！私の生きてく場所にはお姫もお嬢も無いもん！）

「……カイン王子、アリアを泣かすのやめてください。化粧が進まないデスカラ！」

更に冷ややかでデリカシーの欠片もないシゼルのセリフが自分の涙を誘い出したのだった。

「アリアに手紙送ってくれたあ？」

執務中に忘れてたとばかりにアイデアが聞いてきた。忘れる訳ないだろうと思いつながらも、ええ、とだけ返事する。

「ルー、まさかとは思うけど一緒にプライベートな手紙とか入れてないよねえ？」

「入れないですよ」

身体をくっつけて来るアイデアを無視して机の上の書類にペンを走らせる。

「陛下、仕事をして下さい。書類が溜まっています」

「ルーう、こっち向いてえ？」

「ちゃんと…」

「ルーファスⅡハレー准将、テーベンへの視察を命ずる」

振り払おうとした瞬間に吐息がかかる程耳元近くで偉そうに命じられた。

「テーベン？アリアの領地？」

「そう。僕たちが育った場所だよ」

三人共小さな頃はテーベンで育ったのだ。アイデアが即位して、アリアがそれを追って行き、自分も士官して全員首都に集まっているが…。

あの頃からアリアは少し変わっていて、山越えしてシールへ行ってきたり、魔峰の奥地にある薬草を取りに行ったり、領主の娘にはとても見えない奔放さで5歳も年上の自分達を振り回していた。上下関係もなく、ただ大切だったあの場所。いつかアリアが引退すれば自分も退役して彼の地へ戻るつもりだった。

懐かしいテーベンの地だが当主のアリアはシールに居て、あそこ

はヴォグナー家のアリアの叔父が代わりに治めているはずだ。

「アリアに送った手紙にも書いたんだけど、ヴォグナー公爵家が怪しいって…」

「アリアがやってると?」

「それはない」

さすがのアイデアもそう言った。

「でもテーベンからの流通にシールからの製鉄品が混ざっていた。あそこは地理的に直接シールと交易することは難しいはずなのに、だよ。あと誰が誰の解毒剤持ってるのかって…今は不在のヴォグナー公爵しか知らないんだよね。まだ家督を正式に継いでいないからアリアですら知らないのに、機密が漏れたのかも」

「アリアの叔父さんは…?」

「ここで話しても憶測の範囲を越えないのでルーに頼んでるんだ! よろしくね?」

「…了解しました」

テーベンは確かにシールに一番近い場所にあるが魔峰が邪魔して海を迂回しないと辿り着けない。よって物理的には決して近い位置には存在しないのだ。流通ルートとしてはやはり海路頼りになるはず。

これは重要な雑用だな、とひとりごちた。

——城塞都市テーベン

良くも悪くも軍事的に発達し、テーベン出身の士官者は箔が付くとまで言われている。

砦には三百六十度どこでも狙える様に大砲窓が幾つも設置されており、街には鉄筋造りの強固な建物が建ち並ぶ。趣味が良いとは決して言えない街並み。

街中は軍人が多いがアリアの父親を始めとするヴォグナー家の人

間がお祭り好きなのもあり、活気には溢れていた。

：筈だ。

街に入り驚愕した。

自分達が暮らしていた頃より武装を重ねている兵達と虚ろに曇った目をした街の人々。いや、住民ではなく武器商人のような怪しい動き。もしかしたらこれがシール側の？

だが相手は黒髪：目は碧眼が多い。ただ髪の毛はカリスト特有の色を持っていた。染めているのか、混血なのかは分からないが純粋なカリストの人間ではない気がする。軍服に階級証を付けた自分には会釈をしてなるべく目を合わせないように下を向き足早に遠ざかっていく。

職務質問したい気持ちを抑え込んで、テーベンの司令部を目指す。司令部はアリアの生家だ。ヴォグナー公爵家も隣接しているがアリアは司令部内で育ったと言う方が正しい。有能で多忙な軍人として、家に寄り付かない両親達のおかげでここがずっと遊び場だった。

自分の親も軍人で、お互いの親に連れられてここで遊んでいたっけ。チャンバラごっこをしたり、軍人の真似をしたり、毎日じゃれ合っていた。

そしてアリアの叔父、レイスⅡヴォグナー氏はあんまり良い印象がない。何でも大らかに歳配するアリアの父親とは随分違い、力で制圧しようとする癖があった。

だからこそ今、アリアがこの家の当主で、彼はあくまでも代理なんだと思う。アリアの力はレイスのそれより強いから。

司令部の執務室をノックした。

レイスの抑揚のない返事で扉が開かれた。

アリアに似た茶髪で、見た目三十半ばの同年代にすら見える彼は、本当は四十代も後半に差し掛かる年だということを知っている。出身地ということも有り、この司令部で見習いをしていた頃は上官でもあった。とは言っても気軽に話が出来るほど近い上官ではなかったが……。

「お久しぶりです。中央司令部ルーファスⅡハレー准将、参上しました」

「…ああ、アリアの友人の？随分と出世したんだね？准将とはいえ将校クラスが街の出身者だと鼻が高いよ」

拍子抜けするくらいにこやかに応接セットに通された。早馬を送ってあったので客人を迎える用意は出来ている様だ。

「用件は交易品の検査だったね？」

「はい。こちらから流れてきたものの中にカリストの魔法とは違うものが見つかり、出所を調べております」

「カリストのものとは違う、というとシールのということかな？」

「それはまだ特定出来ていません。新種の魔法という線も否めません」

話をしている間中、一時も緊張は解けなかった。彼はアリアが軍属するまで実技演習で敵う者ナシと言われた武将だ。だがアリアが元帥に就任した時に色々反発してこちらに左遷されたため、支部の司令官に納まっている。クラスとしては中将だし貴族としてもヴォグナー子爵になるはずで。自分の目上の人間と話すのはやはり疲れる。

出されたお茶に少し口を付けると早く用件を済ませようと本題を引っ張って来ようとした。

「中央に呼ばれて数年…：帰っていないのですが、随分と街の雰囲気が変わった気がしますね？」

「アリアの父親が…私の兄だが、亡くなってから街の者達が離れていっただけだ。私は慕われる領主ではないみたいだよ」

哀しそうに目を伏せるレイスは何か芝居掛かっていた。やはりこれは自分の目で確かめるべきだと思い、早々にソファから腰を上げる。

「まあ…視察なんて他の街は一年に一回はあります。テーベン陛下も元帥も勝手知ったる街なので大々的には一度も行った事がないようですが、今回はあくまで普通の視察と同じだと思ってください」

「案内を…」

「お忙しい皆さんの邪魔をするわけにはいきません。そのためにこの街出身の私が遣わされて来たのですから。許可を頂ければ勝手に見て回ります」

有無を言わずに駄目押しで微笑む。

『男ですら微笑みの秀逸さに言葉を忘れてしまうと思うのでそのアルカイクスマイルを普段からいつでも出来るようにマスターしろ』と上司・アリアに言われたがこういう事なのだろう。確かに本当に役に立った。

怯んだように押し黙るレイスを尻目にその場を後にした。

司令部の屋根の下で懐中時計を見やり、今はどこもお昼休憩だと言う事に気付く。交代番の兵士が敬礼しているのを軽く交わして考え事に熱中する。

視察は午後からにしよう。休憩を見学しても仕方がない。

しかしこの将校の制服では視察じゃなしにも目立つ。一般兵の制服でも転がっていたら良いのだが…。

せめて上着を脱ぐか。

自分の立場で制服を盗むわけにもいかずに将校服の特徴の多い上着だけ手に持つことにした。

中央司令部よりも少し肌寒いのは相変わらず魔峰から吹き込む風のせいだろう。

取り敢えずアイデアの育った屋敷、王家の別荘へ荷物を降ろしに向かう。あそこはずっと国に管理されているはずだ。

テーベン司令部で一応渡されてきた地図を見ながら歩いた。

というか見ながらじゃないと歩けない程、『土地』が変わってるのだ。たかだか数年でこうも変わるなんて、それ自体が異常に見えた。

案内を断った事を後悔しながら、底に存在する筈だった屋敷を見上げた。

いや、屋敷はある。

だが壮大にひろがっていたはずのローズガーデンがないのだ。爆発した後の様に決れ飛んでその爆発の中心地には見たことのない形を取った魔法陣が描かれていた。周りを囲うように目隠しの護符が張られていて、多分一般人は全くその異変に気付かない。魔力が一定以上強い人間だけがその異変を見ることが出来るのだ。

こんな爆破実験の様なものを市街地でやるなんて酔狂も良いところだ。下手したら人身御供を捧げて行ったものなのかもしれない。街から消えた人々、そして変わり過ぎている地形。符号が指し示す先にはシールがある気がして…。

地図を見つめた。

水場、火を現す建物、風車、魔峰、地火風水を現すシンボルが逆に並んでいた。わざわざ移した水場、風車小屋、そして道が円陣を組んでいる。

下手すると町中に呪文も記入されているのかもしれない。

そしてその術の発動場所に当たるのがここ、街のほぼ中心に建つイデアの屋敷という訳だ。

「これだから勘の良い奴は…」

すぐ後ろからレイスの声がした。さっと避けるが思った以上に距離が離れている。

にこやかなレイスの態度と裏腹に人間味の少ない残酷さが隠れている事を自分は知っている。

得体の知れないものを感じるのだ。

レイスは左手を挙げ魔法陣も組まずに術を発動しようとしている。魔法陣なしの簡易魔法なら防ぎきる自信があった。それでも実力はアリアに続く軍NO.2だ。そして彼の唱えたものは小さな火を起こす初步の呪文だ。

だがその小さな炎は自分の張った結界に着弾してからヤバイと感じる。ヴォグナー公爵家は火と相性が良いとは聞いた事があったが小さな火の玉からは信じられない業火。

そして精神攻撃とも取れる呪いの言葉が耳に纏わりつく。

(普通の魔法じゃな…い?)

燃やされる…消し炭になるまで…

「軍服を脱いでいてくれて殺りやすくなりましたね」

「軍服は守護魔法が織り込まれてるから魔法も掛かりにくいからね。でもそろそろ潮時だなあ。ねえ? マクレガー中将。計画に取りかかるるか?」

「そうですね、ヴォグナー中将」

その時の気配は四つ。四方から地火風水の力を感じ、何かの魔法が発動して消えた。

後には二人の声だけがその場に響いていた。

発動した魔法陣が彼らの姿を呑み込んでいったか、ら……………だ。

『アリア…』

ふと、ルーに呼ばれた気がした。

「ア、リア?」

何もしていないのにシゼルがこちらを振り返り立ち止まった。

「今にも泣きそうな顔してる」

「え?」

「なんかやっぱ無理してますか? あなたはさっきまで倒れてたんだから行かなくても…」

「行くよ! 行きますよ! 超おゝ元氣い!」

「超…ね」

シゼルにあきれられながらも付いて行くことを誇示した。

なんか今一人になりたくなくて、そんな理由ではいけないって分かってる。これは遊びじゃない。今時代が動いているのだから。

カインが立派な扉の前で自分達に人差し指を口元に付けてシツと静かにするように注意した。

ここが王の部屋、か。

追いついた自分達を確認して急ぐようにノックする。

「失礼します」

四人それぞれ会釈しながら入室した。入った瞬間からカインの得も言われぬ緊張感が伝わって来る。

それは先客の存在からだった。

（あらら？まゝだったか気付かなかった！！）

先程のカインの仕草の意味もこれを表すモノだったのだろう。気配を読んだりする事に慣れてる手前、自分を過信し過ぎてかその存在が気付けなかった。

カインに良く似た：いや、王に良く似たその顔を持つ人。当然だろうが王の気配にそっくりで分かりにくかったのか。

彼の顔を見て一同が眉を顰めた。継承痕がまだ彼の額にうつすら出ているのだ。もしかして自分が余計な事をしたからちゃんと皇太子が代替わり出来なかったのかもしれない。

（やべえ……失敗した）

これでは彼は王を回復させる意味を無くす。カイン共々殺してしまえば良いだけだ。

「カイン、随分取り巻きを連れているね？」

「あっ…彼らは…」

カインのぼつの悪そうな声でなんと二人の関係がわかった。

アルが腰を屈めて自分に耳打ちする。

「セティス大司祭、って言えば分かるかな？カインの叔父で王位継承順位がさっきまで一位だった人」

「さっきまで…」

「カインが儀式を終えたなら順位は入れ替わるだろうが非公式の儀式だから。今の継承順位はわからない」

「……カイン王子が儀式で継承された術を遣えば問題ないってわけじゃ…」

「術？儀式ってそんなことやってるの？」

「だと思っけど。儀式の本にはそんなこと書いてなかったけど魔法

陣解き明かしていけばそう言う意味が込められてるって誰でも分かると思う」

「ふうん」

考えるように一度黙ったアルはカインがセティスに必死に言い訳するのを見やりながら気になる事を口にした。

「多分、魔法陣を解き明かした人間はいないのでそんな術は証拠にならないんじゃないかな？ 証拠になるとしたら二人の額にある継承痕」

「え？ なんで？」

「この国は魔法の解析して研究をすることを良く思っていない。神への冒瀆だと思ってるから」

当の『この国』の人間であるはずの人間から出たセリフとは考えにくいがアルは真理を話している。ああ、だから、と納得できた。ここまで古い遣いにくい形の魔法が残って現在も主流なのはやはり魔法使い達の怠慢によるものなのだ。

でも魔力の消費は著しく違う。シール流のやり方で改造呪文や上級魔法を遣ったらどんな効果が得られる事か……。

ゴクリと喉が鳴った。多分国一つは当人の魔力次第で余裕で壊滅出来る。全力出した自分なら世界の半分くらいはイケる。

そんな考えにふけて周りの話を聞き漏らしていた。

「……りあ！ アリア！」

「え？」

カインが覗き込むように顔を近付けた。驚愕して後退る。

自分の汚い考えを誰にも知られたくなくて、だ。

「だから、セティス大司祭が解毒薬を調査してくれて父の状態が良くなったんだ！ 叔父さんは犯人じゃなかったんだよ」

シゼルを顧みた。

首をゆっくりと横に振る。取り敢えず解毒剤とやらを見たい。

「調査？ 毒物は……？」

「カリスト特有の植物の根だって」

カインがニコニコしながら答えた。叔父の疑いが晴れたと思い込んでいるからだ。怪しいのは今も昔も一緒だ。カリストの毒物の解毒剤を簡単にシールの人間が手に入れられるはずはない。それに王の病状は今は毒によるものが主だが呪術が原因ではないと言いくいのに…。

しかしカリストの毒だとはっきり分かっている今、こちらにイチヤモンつけられないように黙ってるのが得策だろう。

解毒剤の子瓶を開けて仰いで匂いを嗅ぎ取った。

シゼルをチラッと見やると大きく頷いている。自分の記憶もこれは解毒作用のあるハーブを調査してであると照合できていた。でも当たり障りのない解毒剤ではカリストの毒は解毒出来ない。各大使の持っていた解毒剤をどうやってか、彼は入手したのだろう。

「取り敢えず、これで私達は無罪放免で構わないですか？」

シゼルは長考の多かった自分を疲労と判断したのか一度下がる材料にした。

叔父を無条件で慕っているらしいカインは満面の笑顔でそれを許可する。

部屋を出る間際にアルに近付いて服を引っ張った。

「カインに儀式を行ったことを誰にも言わない様に口止めしといて。額の継承痕も誰にも見せないように」

「……俺もその方が良いと思うよ」

アルが飄々とした笑みを見せた。食えないヤツだとは思えど、彼はカインの味方だから悪いようには動かないだろう。

ルーファスⅡハレー准将を殺したところで、道はもうすでに決まっていた。

カリストの決まった形の魔術よりも強い力を持つシール流の魔術を習得した自分は誰よりも強くなったのだ。

当時十才そこそだったアリアに負けた時の屈辱は今でも思い出される。

そのアリアを士官させた兄を、アリアを元帥に選んだ陛下を、アリア自身を、力で屈伏させるためにここまでできたのだから。

アリアは確かに魔力も強く、呪文を飲み込む様に覚えていった。まるでその術を知っていたとばかりに。

だがそれは理解力の問題で知らないモノは遣えない。シール流の強い魔法に対策はできないハズだ。

だからこそ自分はカリストに留まる訳にはいかない。強さこそ正義で、総てを勝ち取った後に平穏は訪れる。最強になる為にはシールに行かなければならない。

「来たね？」

魔法陣の先で自分を待ちわびていた男は、こちらの姿を確認すると静かに微笑んだ。

銀色の髪というシール王家の特徴を持ちながらこの国の王を殺そうというこの男。

我々は同志だ。

2. 新人大使は大魔法使い。(後書き)

なんちゅーとこで切るんだ！

と思われた方、申し訳ありません。

ももとは章分けしていなかったんですがいっぺんに入れることができなかったんです。

3. 外交術は元帥仕込み。(前書き)

テキトリーなサブタイトル付けたなあ………
と改めて思います。

本当に今名付けました。

3. 外交術は元帥仕込み。

一週間後、マクレガーの搜索がシール国内で大々的に開始され、王も順調に回復して一件落着だと思っていた。

手紙が届くまでは……。

「アリア！陛下から今早馬が！！」

「陛下から？こちらからは報告をあげたばかりでまだ届かないくらいよね？」

返事には早過ぎるのだ。あれからまだ一週間しか経っていない。報告の返信が来るのは早くてもあと五日は先で、急ぎならルーの魔術で遣い魔を送って来るハズだ。

「手紙にはなんて？」

シゼルが神妙な顔で手紙を差し出した。中を開いて一読する。

視察に行ったルーがテーベンから帰って来ず、テーベンが独立国家としてカリストに反旗を翻した旨が記してある。

テーベンの領主は自分だがその反旗を翻した人物はすぐに想像がついた。あの破滅思考の叔父ならやり兼ねない。

でもルーは？

ルーは実力は軍のNo. 2だ。殊、対複数なら一番強いと言っても過言ではないのに……。

『アリア……』

……ってあの時間いた幻聴はルーの最期の言葉だったのでは？

「帰国しますか？」

「制圧の陣頭指揮をとれなんて書いてない」

「ルーファスⅡハレー准将がいらない、マクレガー中将もいない、元帥もいないでは帝国軍の手薄なところを狙ったとは思えない！」

「帝国軍が制圧に向かっていているから大丈夫。一支部対中央本部じゃ多勢に無勢だもん」

むきになって言い返してしまう。心配なのはテーベンだけじゃなくアイデアの側の守りも、ここも。だからすぐに動く事が出来ない。一つ一つ確認するように呟いた。

「アイデアは……首都に居れば大、丈夫……テーベンは中央軍が居れ……ば大丈夫」

「本当に良いんですが？」

「でも：ルーはだいじよばな、いい」

唸る様に泣き声をあげた。我慢してた思いが溢れ出す。募っていた思いが吹き出して止まらない。

何かあったなんて明らかだ。アイデアにも自分にも連絡無しにルーが行方を絶つなんて緊急事態意外有り得ない。本当は今すぐに捜索に向かいたくて。

テーベンに行きたくて。

ただ、元気なルーに会いたくて……。

「初めから素直にそう言えば良いのに……。あなたとハレー准将が深い仲なのくらい見ればわかりますよ」

「シゼル……」

「行きますか？」

『うん』って返事し掛けたその時だ。

無遠慮に扉が開け放たれてズカズカとカインが入ってきた。

「アリア！シゼル！少し話があるんだ」

カインのこういうところは王族で甘やかされてきた証拠だと思う。目が赤いのを隠そうとゴシゴシ擦るとシゼルがキチツと折られたハンカチを差し出した。

清潔な石鹸の匂いがするハンカチを受け取り、軽く当てる様に大粒の涙の跡を拭き取る。

「：なんか拙かったかな？」

今更空気が読めた様でそっと尋ねるカインはいつもよりも幼く見えた。

「大丈夫です。王子の用事はなんでしょうか？」

シゼルが代わりに言った。大丈夫かどうか決めるのは自分の権利だと思うのだが……。だが動揺して巧く喋れない自分へのフォローなのだから有り難くお任せする。

「王が倒れました」

「……それは一度カリスト大使館としてもお見舞いに向かわなければ行けないですね」

「違います！症状がこの間よりもマズイんです！」

「マズイ？」

「呪術の様な悪い物を感じるんです」

シゼルと二人で顔を見合わせた。呪術かどうかはある程度の魔術師や神官なら見れば分かる。だが王子にその技量がある様に見えるくてイマイチ信じがたい。

「誰が……っ……誰がそう言ったんです？」

喉が掠れてつつ掛かりながらも自分で尋ねた。

それを聞いたカインが少し申し訳なさそうな表情をする。

空気は読めないくせに気を遣う事はするんだ。良家のお坊ちゃまらしいと言ったら彼は怒るだろうが。

「僕だ」

「失礼ですけど王子は魔術を本格的に学んだ経験がお有りですか？」

「ないよ。アルにも同じ事を聞かれた。だからアルにアリアとシゼルに聞いてこいって。今の城の人間じゃ真実を教えてくれるとは限らないし、元帥までなった人なら魔法関係で分からないものはないって」

「一応あなたの叔父様にも頼んだ方が……」

「叔父が分かってるならとくに報告が来てしかるべきだ！」

……って、アルに言われたからお忍びでここまで来たんだろ。うな。声を荒げて少し興奮気味のカインの肩をたたいて落ち着く様に促す。「わかったから。隠密で看に行く。どうしたらいい？」

今のシール王は穏健派というか『ヴォグナー元帥』を怖がってくれているので正直言って一分でも長く王位に居て欲しい存在なのだ。

個人的には一刻も早くルーを探しに行きたかったが仕事があるなら優先せざる終えなかった。

少なくとも仕事に熱中してる間は忘れられる。

愛する人を見捨てなきゃいけないこの冷たい現実を……………。

本殿の最上階に位置し、首都を一望出来る様に造られた王の執務室。

後宮に設けられた寝室では騒ぎが大きくなる為に身柄は安置されていた。後宮の女どもは主人の死を察すれば大騒ぎする、それが国民に漏れれば政治不信にも繋がる。父であるわが王は既に夜の方はご隠居していて後宮を使わない。本殿で眠る事も多々あった為不自然に見える事はないだろう。

シゼルも、アリアも、部屋に入った途端に息を呑んだのが伝わってきて、近いうちに訪れる『父の死』を実感した。

腐敗臭が充満しており、部屋に入っただけで病が感染しそうな空気の悪さ。身体が腐り落ちていっているのだ。意識はすでに混濁しており、肉塊に近い。

「王子、あなたはこの国の後継者です。ここに立ち入ってうつってしまえば国が傾きますよ」

シゼルの言っていることはアルにも何度も言われた。だがそれでも父親なのだ。兄弟全員人払いしている。だが長兄の自分だけはこのを訪れる事を止めるつもりはない。

「流行病って診断されたんですか？」

アリアが静かに尋ねた。その問いに頷いた。

「誰が診断したんです？」

「…叔父が」

「王子はなんで呪術だと？アナタは叔父さんの事を全く疑ってなかったでしょ？こんな状態で呪術疑うより流行病疑う方が普通よねえ

？」

「声が聞こえたから。父の枕元に立つと呪文の様な…不吉な声が…」
そう答えたと同時にアリアが深い溜め息をついた。シゼルも険しい表情を崩さない。

「ダメだ！シゼル、あなたがやって！」

「枕元から呪術なら聞こえますよ？アリアが聞こえないはずないんですけど…。雑な呪文の形な割に大きな威力を感じる」

アリアの能力から考えて、シゼルが聞こえるものを聞き取れないなんて有り得ない。アリアが言いにくそうに口を開いた。

「王子、黙ってましたが私は儀式の日から少し調子を崩しています」
「調子？」

「一定以上魔力が回復しません。原因も詳しくは分かりません」

「シール流の魔法を遣ったから？」

「…尚且つカリストの魔法と混ぜて遣ってるから、なんですかね？
ともかく私はあまりお役に立てない様です」

「そんな…」

彼女なら返し魔法も出来ると信じていたのに…。他に匹敵する魔術師を自分は知らない。

「取り敢えずシゼルに任せて下さい。私はその間に自分と同等の力を持つ者をカリストから連れてきたいとおもいます」

シゼル本人がが突然のアリアの提案に驚いた顔をしたのを見逃さなかった。

シゼルに恐る恐る尋ねてみる。

「協力していただけますか？」

「もちろん、上司からの命令もありますし、協力は惜しみませんが…私はカリスト流の魔法しか遣えないですし」

断られる、と思った瞬間にアリアから援護射撃を貰った。

「でもシゼルは治療術士だわ。少しの時間稼ぎをする事くらい訳ないでしょう？跳ね返せとか呪いを解けなんて言っていない。そういうのが得意なヤツを連れて来るからそれまで時間稼いで！」

「……………わかりました」

誰の事を言っているかは分からないがシゼルにも信用がある人間らしい。

アリアはすぐに自分に向き直りペコリと一礼すると一目散に駆け出した。

シゼルもそれを合図として父の枕元に立ち、手を翳した。

少し空気が軽くなる。死臭が薄れていく。

その手から発せられる清浄な気の形が、すごく安心できた。

「カイン王子、清浄な力を遣える場みたいなものに心当たりはありますか？ 礼拝堂のような場所が適しているとおもいます」

「地底湖は？」

「地底湖…ですか」

少し嫌そうな響きが混ざっていた気がして彼の様子を伺った。

「何か問題があるわけではないんですけど、シールの神を奉つてある場所ですよ？ まあ無難ですか…」

仕方ないっていう響きがある。

そんなやり取りの最中にアルがノックもせず扉を開けた。親友であつても王に対する礼を欠くのは不敬だと思うのだが真剣な表情に言葉を飲み込んだ。

「謀反だ。セティス神官が貴族達を連れてこの部屋を目指してる。逃げるぞ」

三人は王を連れて地底湖へ逃げ込む事を余儀なくされた。

必死に、必死に走った。

自分の意思で動く事が物凄く久々で、いつも行動はアイデア中心で、どうしてか自分の為に生きる事を怖がってしまっていた。

本当は、ただずっと側にいて、一緒に戦いたかったはずなのに。力を失って、同時に自分からその権利も無くなった事に気付いた。

守られる立場になりたくなかった。イデアを守って、支える事で自分を確認していた。

「……………なんだあ、ただの偽善じゃんかあ」

解りやすく子供っぽい思考に、こんな時なのに笑いが零れた。馬鹿だな、ただ良い子になりたかっただけなんだ。

欲しい！ってワガママ言わない良い子になりたかったただけか。立ち止まり、空を仰いだ。

高く、絶壁が剥き出すその山を見上げた。

子供の頃に用意周到に準備して登山した時とは条件が違う。

それでもテーベンに向かう事が一番の近道ならば、ここを進もう。持ち物はイデアから貰った左手短剣一本。

その険しい山の名は魔峰。

登山家百人で隊列を組んで登ったところで二十人登頂出来るか怪しい山脈だ。

だが今回は登頂目的ではない。山頂は迂回して真直ぐにカリストへ向かうだけ。

それで勝ち取ってやろう。自分の我が儘を通す権利を……。

すぐに追っ手が来るのを執務室の隠し扉の奥で息を嚔めて確認した。

アルがその間に道を確認しに行っている。抱上げた王の身体は少しずつ衰弱した様子はなく、突然掛けられた呪いのせいで身体が崩壊していて表面の贅肉はすっかりぐちゃぐちゃだった。触るのには抵抗があったがカインの手前、嫌な顔が出来なかった。自分が担いでしまった今も腐敗した肉から出る汁や臭いで吐き気を催す。

部屋にはセティスを筆頭に、他国籍の自分ですら知っている名だたる貴族達と位の高そうな兵士が部屋を敷き詰めた。死臭のする部屋へ入って王の死に半信半疑だった貴族達も確信に近いものを感じ

取っただろう。

『王崩御を隠し、混乱を招こうとしている王子の乱心を継承痕を持った正当継承者であるセティスが訴えようとしている』

きつとこう解釈されているに違いないのだから。口々に王子を悪く言い、暗に現王を罵った。

耳を傾け、カインが悔しそうに左手に拳を作り、グツと力を入れているのがわかった。

「行きましょう、王子。こんなところで感傷に浸っている場合じゃないはずです」

自分の言葉に小さく頷いた。この局面で強くなることを求めるのは酷だが、こんな内政なら遅かれ早かれ彼が成長しなければいけない機会は訪れただろう。ここで一步踏み出せるようになることが運命の分かれ目だ。

正直言ってこの国の継承問題は自分に関係ないって今でも感じている。

だがここでこの王子が負けたら自分やアリアの立場だって絶対の保障はない。

更にテーベンの反乱がタイミング良すぎる事を考えて、シールと無関係とは言えない。

こんな非常時に客観的に自分を見つめてしまうのは人としては悪いとこだが外交に向いていると自負する面でもある。

王子の思いの決まったところで三人と半屍体、裏道を奥へと掛けた。

湖へと進む事をいつバレしてしまうか。王がどれだけ保つか。そして、援軍と呼べるものはいつ来るのか…。

不安要素があり過ぎで思考がうまく働かない。先を考えても八方塞がりなのだ。

少し王子よりは状況を読んでくれそうな長身剣士を見やるとやはり彼の顔も蒼白だった。

カリスト的にはアリアは…ヴォグナー元帥の強さは佐官クラスだ

った頃よりそれこそ宗教的に信じられていて、彼女に任せた戦が負けるなんて事態は有り得ない。だからこそアリアを勝機への近道と本気で算段して見送ったがアルとカインにとっては溺れる者の藁にも近い存在だったに違いないのだ。

あんなちっこい、風で飛びそうなオンナノコに「まかせてっ！」って豪語されてもその戦争の仕方を実際に見てこなければ信じられない気持ちはわかる。

そうこう思考の小径に入っているうちに狭い隠し通路を抜けきった。

開けた廊下に出る。甘いお香の匂いが建物が変わったことを示していた。

今まで見てきた本殿や王子宫と造りが異なる。賓客を迎えるはずの本殿よりも調度品が繊細で価値のあるものが多い。だが女性的な設えの美しい建物はどこか閑散としていた。

「ここは…?」

「シゼル、ここで見た事はアリアにも王にも内密に。と言っても入った事がマズいだけだから中に重要な秘密はないけど」

「ここはどこです?」

「後宮の奥だ。成人男子禁制、足を踏み入れれば死罪もしくは…」アルと王子が揃って自分の股間を見つめるのに気付き何を言わんとするかがわかった。

「言いません。誓いますよ」

そう簡単に追っ手が入られない場所で且つ、王の部屋からの抜け道が存在していたのはこのことというわけだ。先頭を走っていたアルがスピードを緩めて近寄る。

「王子はね、ここによく来るんだけど他国の人間…しかも外交官となると勝手が違うから勘弁して下さいな」

「滅多に出来ない観光だと思って諦めます」

「普通の見学コースではないことは確かだね」

アルはそう言いながら苦笑した。意外に余裕があるのか、それと

も腹がきまったのか……。

「地底湖は中庭に抜ければすぐだ」

本殿、皇子宮、後宮の中央に地底湖へ繋がる道はある。

そこを目指してスピードを上げた。

山登りを始めて、約半日が過ぎた。昼から登り始めて今は夜中だ。ほぼ立ち止まらずに道があれば走り、ないところは草をかき分けて作りながら、ようやく中腹といったところだろう。あんまり高く登らないように道を選んだつもりだし、息は少し上がっているが高山病とかの心配もなさそうだ。

動きやすい略装とはいえ外交官の制服がボロボロだし、朝に編んだ髪の毛もあちこちに引っ掛けてはねている。負っていても擦り傷程度なので問題はないが軍服に比べるとあまりに軽装すぎるのだ。こういう強行突破をさせるための制服ならもう少し強度と機能性を考えた造りを申請しなければならないな、と……少し思考の小径に入った。

息を吐いて頭を切り換えるように振った。頭の中の地図と照らし合わせて、それでも不安な部分はこれから先だ。

魔峰のシール側は天候が安定しているのだが、中腹からカリスト側に掛けての道は嵐か吹雪か……ともかく風が強く、下手をすると雷と一緒に混ざる。

いつもなら雷なんて魔法で避けちゃうし、雨風もシールド張っちゃうし問題ないのだが、そして普通の登山者はそこを通らずに迂回するのだが、最短距離を選びたい自分は敢えてこの道を行くことに決めたのだ。

頭の中では危険信号をたくさん発している。自分で昔に興した魔峰の地図ではこちら辺は等高線がギッシリ詰まった……つまり高く登るのではないなら谷だ。しかも深いヤツ。ぶっちゃけ崖だ。

崖を降りるくらいなら迂回した方が早い。だからこの道に来る登山者はほぼ100%迷い人だ。だが自分は小さな頃に調査して敢えてこの場所を選んだ。ここがカリスト・シール間を繋ぐ地図上最短ルートだからだ。

小さな頃に魔法で掛けた橋がある。小さな頃：（今も小さいと言うつツコミは要りませんよ！）数字にして十五年前だ。魔法が自在に遣える状態なら補修して渡るのが残念ながら今は初級魔法がいっぱいいっぱい。こんな大掛かりな術の補強なんて手に余る。

「だ：大丈夫か、な？大丈夫よ、ね？」

不安な作りをしていて、よりにもよって手摺りが無く、何もない場所に突然少しおかしな光の屈折する部分がある。それが橋だ。つまりは透明に限り無く近い。戦争中にこんな場所を見つけられたら大事になるから、という理由だ。

長い間自然の雨風に晒されて、雷に打たれる事もあったかもしれない。

痛んだ魔法の橋を渡るくらいなら崖を降りた方が賢明なのだろうが、ここを使えば2日以上早く向こう側に到着出来る。

一步を踏み出すと光の屈折が橋の中でも一定ではないことがわかった。

橋の厚みが違う上にもう欠落してしまっている部分もあった。

しかも：

「で、でこぼこしてる…」

ツルツルよりは幾分かマシかもしれないがこけたら一貫の終わりという事態。更に子供時代の耐荷重で作っている事を考えて、急ぎ足で向こう岸を目指した。

その距離約一キロ。山と山の間なんだから狭いくらいかもしれないが橋を渡るには長い。

恐る恐る足を伸ばし、ここが高所ということを出さないように進む。さながら綱渡り気分。下ばかり見てちやうど真ん中に着た頃右側面からものすごい突風が吹き抜けていった。危うく足を踏み

外しそうになりながらもバランス保つと、今度は足下が抜けた。突風が吹きやすい場所だったのだろう。魔法の劣化が酷く、脆い硝子の様に橋が一部砕け落ちた。

辛うじて身体がハマった位で済んだが普通に死んでもおかしくな
いって：今になって気付く。割れ目に手を掛けて手の力だけで這い
上がり先に歩みを進める。

ここで毎日の軍事演習含めるトレーニングの有り難みを噛み締め
た。チャラチャラした動きにくい格好でもここまでやれるんだ。

「アリア？」

耳に届いた自分の名前に一瞬反応が出来なかった。立ち上がって
シール側、歩んできた道を振り返るとそこに自分の逢いたかった人
が立っていて。

幻聴でも幻覚でも構わないと思った。

戻ろうとUターンしようとしてまた同じ所にハマりそうになる。

「アリアっ！」

駆け寄ろうとする彼を手で制止した。冷静に考えて大人二人の荷
重はさすがに論外だ。

「自分で行くから待ってて！」

怒鳴られたおかげで幻覚では無さそうだと確信できた。安堵から
か今更疲れの波がやってくる。地面に辿り着く直前に気の緩みから
足を踏み外した。

落ちるっ！と瞬間にすぐ下にフワフワしたクッションの様な橋が
出現した。髪の毛だけ古い橋の鋭利になっている部分に引っ掛かり
ブチッと根元から抜けたし、切れたし。

ともかく身体は無事だ。さすがNo.2！

ルーが元気である事を確信して落ちた分の崖をよじ登った。手が
貸されなかった事を少し不思議に思いながらも嬉しさの余り勢い付
けてその胸に飛び込んだ。

「いっ…」

痛みを訴える声にてを反射的に腕を解いた。

軍服を上から羽織ってたため中の怪我が分からなかったのだ。そおっと上着に手を伸ばして中を開くと赤黒く固まった大きな火傷痕が応急処置してあった。これは致命傷になりうるものだと言人の勘が告げている。

「ちゃんと手当てゝを」

「今はしなくて良い。大丈夫だから」

「訳分かんない！そんなはず無いでしょっ！」

「大丈夫…自分で手当てもしたから。シールまであとどれくらいかかる？」

時間を聞いて来る辺り全然大丈夫ではないことが伝わってきた。治療術もそれなりに出来るはずの彼がそれを行わないでシールへの道程を焦る理由がわからずに苛立つ。

「これ治療呪文は効かないの？」

「呪術かけられちゃったみたいだ。早く術者を絞めないと」

「術者…」

「聞いて驚くなよ」

「うちの叔父？」

「知ってたのか？」

「やり口で予想が付いたのよ。で、なんでシールへ？」

「シールへの転移装置らしきものをテーベンで見つけたから。それを遣って……多分転移魔法を発動させてた。魔力の波動を追ってここまで追跡してきた」

転移……。物質を浮かしたりすることは難しいことではない。自然界にある物を遣った魔法はそんなに難しいことはないが物質の移動には物凄い知識と業が必要だ。殊、生きてるモノを生きてる状態で、の移動にかけては…。

人間の構築物を理解してそれを一度分解して離れた場所に送る。水、タンパク質、脂質……って物体の構造だけならそれも可能かもしれない。でも生きてるモノには魂っていうものが存在している。

もしかしたら知識だけはある叔父の『強くなりたい』執念で有り得るがその魔法陣を構築するだけの膨大な魔力はどこにあるんだ？そこまで行き着いて頭が痛くなった。シールに行ったという所にここで繋がるのだ。

幾ら強さを求めたって国まで売るとは…。

強さを求めた我が叔父と玉座を求めたカインの叔父が手を組んだのが予測出来た。

「シールの魔法なんてそんなイイモノじゃ無いのに」

一瞬その魅力に魅せられてしまっただけになった自分の言うべき事ではないが威力に変えられない世の秩序というものがあるのだ。

「移動がてら情報交換をしよう。ちょっと休めたからずいぶん楽になったし」

「ウソツキ、顔色悪化してるし…」

「アリアだって…あーあ、キレイな髪の毛だったのに長さバラバラ…絡んでるし」

「いいのっ！軍人に髪型なんて関係ない！」

「大使様には関係あるんじゃない？」

「どーせクビでしょ？身内が謀反興して処罰されないヤツなんていないわ」

自分だって散々処罰を与えてきたから言える。間違はなく免職。貴族階級を奪われて下手したら一生牢屋の中だ。

「ま…あ。アリアが貴族じゃなくなるなんて俺の思う壺だからアイデアは阻止すると思うよ」

アイデアがそういう職権濫用をやらなくと思う自分は少し首をひねった。

「治癒魔法が遣えれば良かったな」

独り言のように呟いた。身体は元気な自分はルーに手を貸しながらシール方面への下山の道を歩む。

「遣えないでいいよ。一つくらい俺に頼ってくれ」

「今は全部頼りたいくらいなんだけど…ってか、その身体で呪い返

しできるの？」

「俺を誰だと思ってるの？」

「ルーファス様！期待してマース」

地底湖に到着するとちょうど良い高さの台が無く、仕方なしに祭壇に父の身体を置いた。

もう死なせてしまった方が随分な孝行なのかもしれないな。

腐敗が酷かった左腕が半分もげた。王の証しである指輪の金属音と肉の音がする。生理的に受け付けなくてギュッと目をつぶった。何も文句を言わずに片付けているシゼルだって国は違えど育ちの良い貴族なのにどうしてこんなに自分は弱いのだろうか？

アルが手から指輪抜いて地底湖の水で洗い自分の掌に握らせた。

「いつか役に立つ日が来るから：」

つまりは現王は助からないということなのだろう。突然心細さが増した。

——王は国の道標だ。

——国民を導いて守らなければならない。

——時には一緒に戦わねばならない。

常にそう教えこまれてきたはずなのに、いまだ名実共に王になる資格がたりない。

王不在の国はどうしたらいい？国民は？そして自分自身が一番わからない。

貴族同士で争うよりも同じような統率者なら、叔父を立てて自分も協力して王になって貰った方が良いのではないか？

「カイン！悪い方向に取るな！」

いつの間にかアルが肩を掴んで訴えかけていた。あまりの強烈な死臭と映像に頭が吹っ飛んだようだ。

そうでなくともこの地底湖でアリアが行った儀式の凄まじさであ

まり良い印象を持つてはいないから。

「なんでそんなに王になりたいんだろう？俺は……なんで王になろうとしていたんだろう？」

ボソボソと呟いた。掠れて自分の声じゃない様だ。

「いっぱい生きてきた中で色々考えて結論を出したんじゃないかな？今は自分達が理解してはいけないよ。こんな短時間に答えを導くのは馬鹿にしてるだろう」

シゼルの静かな回答を聞いたら自然と涙があふれ出た。

哀しくて：叔父も、父さんも、こんな儀式や玉座に縛られて生きてきた自分達も…。

シゼルの両の手から白く清浄な力が発せられていく。父の身体を包み込むその光は、前も思ったがシールの治癒とは違った形の術だ。

「……呪いってのが厄介ですね」

「え？」

「その場所を波動で知らせてしまえるんですよ。あなたの叔父が腕の良い術者ならいずれここもバレます。それを上回るくらいの良い腕の結界でも張れば別ですが」

もちろん自分にはできないのでアルを見やった。首を横に振られる。

「時間稼ぎ程度にならこの地底湖って場所が結界になってくれると思うので今すぐどうのって訳じゃないです。でも向こうが本気で探し始めたら一発で終わりだと……」

王が死んだ瞬間に新しい王が選出されるのだから自分が叔父のセティスをどうにか出来るまでは父に生きて貰わねばならなかった。

「……カ……ィ」

小さな呻く様な声で、でも確かに自分と呼んだ。すぐさま近寄るが……腐敗して爛れた肌に触れて良いものか、迷っていると声にならない声で「まったく」と苦笑したのがわかった。自分でもこんなに潔癖性の気があると思わなかったが、その物体が人間であることを頭が理解したがない。

何が起きているのかが理解出来ずにその様子を見守ると、シゼルが意識が戻っている事を告げた。シゼルの手から発せられている魔力が強くなったのはこの状態が長く保たない事を示しているのだろう。

触れずに再び近寄った。

震える指を添わす様に近付ける。脆くなった父の身体を破壊せぬ様に…。

「…くっ…カイン、国を…まも…」

苦しそうな父の顔を焼き付けるように見つめた。

この悔しさを忘れない様に噛み締めた。

「憎いのか？憎むなら玉座を憎め。誰が悪いわけではない」

そこだけしっかりした口調で父は言った。

直後力尽きた様に意識が落ちる。

もうきつと自分の知る父は帰って来ない。親子らしい対話なんてした覚えは殆ど無かったが後継者として厳しく指導してくれた。姫達には甘かったが、自分を含む皇子達にはとても厳しく仕付けた。だがそれも今日のこの日のためだ。

しっかりしろ！カイン！！

父の声が聞こえた気がした。

しっかり、この日に戦わねばならないことを…頭では分かっている。でも頭だけではどうにもならないことを今思い知った。

力が入らない。涙が止まらない。

この手には絶望しか残っていない。

憎む事を動力としようとしていた自分には他には何もなかった。

そう、王に成りたいと願った事が無いと言う事に、今気付いてしまったのだ…。

虫の息というのはこう言う状況を指すのだろう。しているか近く

に寄らないと分からない程小さな呼吸がその命の短さを現していた。最初は暑いくらいだった身体も段々冷たくなってきている。治癒の力を強めた。

呪い返しが間に合わないなら他の行動も視野に入れなければならない。

だが王子は祭壇の横に座り込んだきり放心していた。育ちの良い彼には無理もないが……。一方の長身剣士は膝を付いてこちらも座り込んだまま皇子をフォローするでもない。正直メンツに不安を感じるので。

しがみついてもアリアに着いて行けば良かった。

“どうせ死んでしまうなら……。”

こんなことを考える自分を非道だと言う者も少なくないだろう。だがやはり得るものが何もないとこう考えてしまう。王子にもアルにも聞こえる様にわざとらしく大きな溜め息を付いて無言の抗議をする。

王子は反応なしだ。剣士は嫌味な笑みを浮かべていた。

「焦ってます？ 苛ついてますの？」

始めからヘラヘラした態度が癪に触る。

アリアもこんな感じの所があるが女性がやるのと男性がやるのではこうも印象が違うのだな、と学んだ。

「正直不安は残りますからね。このメンツでの制圧は無理でしょう？」

嫌味を言った。

役立たずという意味合いで言ったのだ。だがアルはカラッと笑い飛ばした。意味は通じてそうだがダメージを受けていない彼に更なる苛立ちを覚えた。

戦いに於いては自分は役立たずだ。彼の实力は知らないが剣士としての腕前はあるのだろう。結局本当の役立たずは自分なのだ。こんな風な王子だって、きっと戦いに加われれば自分よりは余程マシないうもの。

「なんか色々考えてそうだけどシゼルが居なければカインと二人じやここまで逃げなかったよ」

「え？」

「アリアとシゼルが居なければ逃げる意味もない。第一、この甘ちゃんを背負いながら半死人連れて逃げ回るなんて無理！せいぜいカインを国外逃亡させるくらいだな」

「君はシール生まれか？」

「は？なんか今それ関係あんの？」

「いや…シールの人間ぽくない考え方だなと思っただけ」
「ナニソレ！」

破顔したアルに微妙な愛想笑いを返した。本当に良い意味でシールの人間っぽくないのだ。唯一神を崇め、王族を神様の生まれ変わりだと崇め奉るシール王国にあって、まだカインや王を人として扱う彼。考え方はカリスト的だ。

「でもマジな話ね、カインと何人か……亡命させなきゃいけないかもしれないと思ってる」

「そうですね」

「カリストじゃ受け入れれないのか？」

「イデア陛下なら構わず受け入れてしまいますが……情勢次第としかお答え出来ません。あ、君なら大丈夫だと思いますよ」

「あ…俺はカリストには行かない。嫌いなんだ」

「嫌い？」

「そお。カリストはキ・ラ・イ！」

「まあ君ならどの国でもやっていけるよ」

他の国でやっていけるかどうかは考え方が一番大切だ。強いてはその国の宗教、文化を柔軟に受け入れること。彼なら何処へ行ってもできるだろう。

「カイン王子の事はアリアに話してみると良い。あれで公爵令嬢だし帝国軍元帥だからどうにかしてくれる」

「ホントに有り難いです。しかし負ける前提でこんなに話を進め

てるのに微動だにしないなあ」

「色々有り過ぎて整理がつかないんでしょうけど、巻き込んだのだから自分で考えて立って貰わないと困るんですがね」

こっちはあくまでも巻き込まれたのだから巻き込んだ人は最後まで責任を取って貰いたい。

「ごめんなさいねえ、あのコ筋金入りの箱入り息子だから打たれ弱いのお」

からかうように言ったアルの言葉にようやく睨みが返ってきた。その瞳の光を見て少し安心した。どうやら決心が着いたらしい。

「シゼル、結界を張りましょう。無いよりはマシだ」

「誰がです？」

「…張り方を知ってますか？」

「ええ」

「じゃあ教えて下さい。今覚えて張ります。だからあなたと交互に、幾つも張ります」

小さな結界を幾つも作って強い結界に代用しようと言うのか…。

強ち間違った方法ではないし、治癒術を止めたらそうしようとしていた所だ。

「延命は？」

「もう、延命は意味を為さないのでしょうか？」

「………はい。残酷ですが、王に人としての生きる道はありません。死なないようになっているだけですから」

「僕は儀式を終わらせた。指輪もここにある。父が………陛下が死んだら次の王は…僕だ」

無理矢理言った様にも見えたが取り敢えずそのやる気が必要だったのだ。大きく頷いて同意した。

ルーファスの傷が少し心配だったが帰りの行程は半分も掛からな

かった。理由は魔法を遣える人間が一緒だからだ。雨風を結界で凌げるだけでもこんなに違うのだ。

今まで魔法に頼って生きてきていたんだなあ……。

「手を貸してはあげられないけど魔力は余ってますので」

「じゃあ手は私が貸したげる！」

「要らない！」

「私魔力0だけど体力余ってますから！」

つまりは二人で一人前ってことですかね？そんな会話をしながらザクザク下山した。

麓、シールの城下町が見えて来ると街はやはり異変が起きていた。まずカリスト大使館が包囲されていた。次に軍隊の様な人間があらちらこちらに見受けられる。

セティスの反対勢力を武力制圧したのかもしれない。シゼルや皇子の身は大丈夫なのだろうか？そして王は…情勢は？

「アリア、着替えよう。あとその髪の毛…」

ルーのも自分のもカリスト特有の色を持つ髪の毛だから市街を歩き回るには目立つのだ。

ルーは一度溜め息を付いて仕方ないか、と小さく口にした。腰にぶら下げていたナイフを取り出すと自分のバラバラになった髪の毛を器用に切り揃えた。

「…ふはっ！…前髪切ったら更に幼く見えるわ」

「あっ！だから前髪伸ばしてたのにっ！」

「でもこっちのが似合うって。可愛いよ」

ルーは泥だらけの顔にもためらわずに、おでこに口付けた。

すると茶色いはずの髪の毛が金髪に変わっていく。

「魔法の掛りが悪いね。でもまあこんなもんで十分でしょ？」

「国境抜けてから魔法掛り悪いでしょ？どうやらシールの神様の力でカリスト流の魔法の能力が抑えられちゃうみたいよ」

「そりゃあこれから大変かもね」

物凄い空々しい会話だ。魔法が抑えられた状態でも、先の大戦で

は敗戦ムードから停戦協定に持ち込んだ立役者二人がここにいて、何を恐れると言うのだから……。

「まあ精一杯頑張ります！」

「魔力空っぽで役立たずじゃん」

「少しは……少しだけ遣えるもん！」

取り敢えず買い出しと情報を収集することにし、カリストの軍服で血だらけのルーを残して自分が出てきた。市街を練り歩き様子を窺う。

「すーいませーん！揚げパンくださいーい」

美味しそうなパン屋を見つけて早速油を売る。中から如何にも揚げパンを売る小母さんと言った感じのする（あ、失礼か？）恰幅の良い女性が出てきた。

「しっ！あまり騒ぐと何でもないのでしょっぴかれちゃうよ！……お嬢ちゃんずいぶん格好だけどお金はあるのかい？」

ドロドロの服を見てお女将さんはそう不審な目を向けた。物乞いではありませんよ。ただ単に雨風吹き荒ぶ魔峰を越えてきただけなんです……とは言えずに、でもお金を先に出して買う意思表示をした。「旅の者です。今街に着いたんだ！なんか前来た時より物々しい感じするけど……」

「今までの王様が死んで新しい王様に代わるらしいんだけど立派な皇子が居たのにそれを差し置いて王様の弟が継ぐらしいんだ。それで城内がもめてるらしいよ。皇子が行方不明らしいんだがそれもそいつの仕業って話さ」

話好きなのかベラベラとためらわずに喋り散らした。こっちのが後ろを闊歩する軍隊に気を遣う。

「前の王様だって良い王様だったのにねえ……」

おしゃべりは半時程続いた。声を掛けるべき人間をどうやら間違っただけだ。

ついでに聞き出した洋品屋さんの場所で色々買い揃えて急いでルーの居る場所へ戻る。

自分の服一揃えとルーの服。洋品屋さんのおじちゃんにお父さんのと間違われて少しムツとしながら受け取ったシャツを握り締めた。自分にはヒラヒラしたドレスやワンピースを勧めてきた小父さんの余計な気遣い（さながらセクハラ）をうまく交しながら男の子用の旅の装いの様な服を差し出した。

それは着用して着てた原型無視の制服は処分して貰った。

パン屋でルーの為に購入した焼きたてのクロワッサンと牛乳もある。

唯一買えなかったのが武器だ。魔法が無理なら剣でと思い、左手短剣じゃ限度があるので武具屋を覗いたのだが既に軍から買い上げのせいで武器があまり出回っていないらしい。

更には自分の容姿のせいで「武器なんか持つちゃいけない！こんなご時世でも清く生きるのが大切だ」とかなんとか説教されてしまった。だからこの容姿は嫌なんだ！

「ルー！」

疲れ果てた様に木に寄り掛かるルーを見てハッとした。あまり時間が無い様だ。いくら魔峰を駆け抜けたとはいえあの疲労困憊の仕方はいのせいに違いないのだ。もしかしたら王と同じ『声』が聞こえてるのかもしれない。

魔法が遣えなくなったと気付いた時にすぐに対処しなかった事をすぐ後悔していた。この魔力枯渇の『原因』は分かっているのに。

「ルー？」

「おかえり、アリア」

「ご飯も買ってきたけど武器は売って貰えなかったから、買いに行くの一緒に付き合って！」

ご飯と服を差し出すと、少年のような出で立ちの自分の姿を一瞥し、武具屋での扱いを察して苦笑した。

ルーが意識がある時は呪いの威力を悟られない様に振る舞っている事に苛立ちを感じてしまう。いっつも弱音を見せてくれない恋人に距離を感じている。

上司だからなのか？年の差なのか？自分が弱いから？

「眉がハの字。剣は買わないよ。すぐに王宮に向かう」

そう言いながらルーの腰に差さっていた剣を鞘ごとこちらに渡してきた。

「これ、……私の剣？」

「司令部のオマエの執務室から御守替わりに拝借してきちゃったよ」悪戯がバレた少年の様に舌を出した。ルー自身の剣は剣で腰に差さっていることを確認した。本当にお守り代わりに二本持って歩いていたんだ。

そつと受け取り小さくアリガトと言った。ドウイタシマシテって返ってきた。

これが、自分達の距離なのだから仕方ないか……。

剣を腰に差して碧く輝く城を目指した…。

シゼルが緑掛かった小剣を祭壇に突き刺した。祭壇は決してそんな剣が刺さる様な造りでは無いのにいとも簡単にその刃による浸蝕を赦した。

その剣が尋常じゃない力を秘めている事が伝わってくる。

「シゼルさんやい、それはナンダイ？」

ふざけた調子でアルが尋ねたが、語調や表情とは違った真剣な目が伺えた。

「うちの国宝です。非常識な王からの餞別でお借りしました」

言いたくないんですが、って苦虫を噛み潰した様に言う表情のシゼルを見て相当おかしな王様なんだろうと想像する。

「普通、大使は国宝を持って来ないよな」

「しかも私は補佐官です」

「すごい采配だな？」

「うちの陛下は戦争する気でしたからね」

サラッと怖い会話になった。さすがのアルの作り笑いも凍る。シゼルはそんな場の空気をものともせず、剣の方に自分を導いた。結界術の実演だ。

「生きて……ちゃんと返しに來いって事なんだと思いますよ。だからこれを返すまでは生きてないと」

掌に球体を練り上げた。それ自体が魔法陣になっているのが分かる。

「結界の基礎は……普通は魔法陣を描くんですけどここは湖の形があまり良くない」

祭壇と祭壇までの細長い道、それ以外が湖であることで陣形を取れないということか。

「少し上級編になりますが結界の陣を魔力で練ってください」

「結界陣はなんでもいいの？」

「：アリアが、シールとカリストは魔法陣の描き方が違ったと言った。私には教えてくれなかったのでシール流の魔法はわかりません。知ってるなら自分のやりやすい魔法陣を遣って下さい」

「わかった」

見よう見まねで球体を作り上げた。魔術書自体は好きで、結構読み漁っていたので陣の形も色々知っていた。

「で、それをいっきに広げます。但し自分の能力範囲内にしてください。欲張ると弾けます」

簡単に言うが展開するのは意外と難しい。シゼルは剣の波動にのせてキレイに展開していく。均一な力の掛かった綿密な結界が見て取れた。結界術は性格が出るって言うが、この人は向いてるんじゃないか？強い結界なんて張れないと言っていたが……。

「で、場に定着。構築↓展開↓定着の三段階。簡単でしょ？でも結界が一番奥が深いです。下手な結界張ると相手に場所知らせてるようなものですし……」

「へ？それを早く言えよ！」

見よう見まねの展開をしている最中に肝心なことをぶっちゃけら

れた。初心者に下手じゃない結界が張れる訳ないのに。

「だからこの剣を使ったんです。これに展開・定着は任せて私達はどんどん魔法陣を練り上げましょう」

展開を途中まですると引っ張りあげられる様に展開の続きが行われていく。剣が勝手に展開・定着を行ってるのだ。これなら初心者にも出来る。勢い付けて次の魔法陣に取り掛かった。

魔力が尽きるまで何枚も、何枚も、張った。尽きたら湖の祭壇で魔力回復を行ってまた張った。

ここに来てどのくらいの時間が経っただろうか。呪いの事も玉座の事も忘れようとしたが結局はそんなことでせずに全部事実を呑みこんだ。結界を張る度に涙や汗や魔力と一緒にしがらみも落ちていけば良いのに：一つ一つ理解して、覚悟を決めて、解決するしかないんだって。

ドンっという振動と音が伝わってきた。様子を見ていたアルが立ち上がり剣に手を掛けた。

「入口につつかえ棒をしといたんだ」

「じゃあこの音は…」

打ち破られた音、と言う訳か。アリアが出発してからどのくらいの時間が稼げたか、焦りが込み上げる。

父はもう延命をしていないので死んだも同然だ。今ここを暴かれれば誰が父を殺した様に見える？

そして高位の神官相手にこの結界はいつまで保つのだろうか？

アルが立ち上がり、結界の外に出ようとした。

「何をやってるんですか！」

とシゼルが罵声を飛ばした。

「結界には守る物があれば良いんだ。俺はその対象じゃないよ」

その『物』扱いされたのは多分父ではなく自分だ。だからアルの手を引っばった。

「行かせない」

「ワガママ言わんで！」

「お前を守るのが僕の王としての最初の仕事だ。死なせない」

金属音の足音が響いている。時間がない。

がむしゃらに言った瞬間に喉元が熱くなった。これは…自分の身体の奥にある何かが『王』と言う言葉に反応した。

「カイン皇子？」

「シゼ、ル…」

シゼルの治癒術を発動するのが見えたから静止するつもりで名前を呼んだ。届かないくらいにの囁きで結界を張って！と伝えた。

渋々といった感じだったが結界を張るのを続けるのを確認した。

アルを振り返ってもう一度言う。

「ちゃんと結界の中にいて！」

その瞬間に扉が開かれる。叔父が現われると思っていたがそこには知らない若い指揮官とマクレガー大使とシールの近衛兵、それに見覚えのある黒髪の男が二人、並んでいた。喉をゴクリと鳴らして生唾を呑み込む。

「リンチ伯……ウイズナー候……」

シゼルが呆然としながら呟いた。やはり毒殺されたはずのカリストの大使達だ。つまりあれは狂言自殺だったというわけだ。アリアに向けられた手紙にあったように、マクレガー大使まで毒と解毒剤が繋がってシールに入ってきている。セティス神官が看取ったなら、仮死状態のうちに解毒剤を使えば簡単に死んだことにして生かしておける。

しかもカリストの鬼籍に入ってしまったえば自分が国を裏切っても身内が罰せられることはない。そうまでしてシールに亡命して、何があるのかは分からないが。更に指揮官と思しき人物は黒髪でアリアにそっくりの男だ。優雅に微笑んで鞘に収められた剣を降ろした。

「カイン王子と……シール王、ですね？」

その意味を、答えを必死に探した。答えが見つからずにシゼルを振り返った。

「あの人は…こんな所に…」

「シゼル！あれは誰だ！？」

「レイスⅡヴォグナー子爵。アリアの叔父に当たる人だ」

ニコニコ微笑み、手を翳しただけで始めの方に張った数枚の結界が打ち破られた。それだけでこの人がどれほどの実力者か伝わってくる。

この状況はうちの叔父が出てくるより拙いんじゃないのか？

アリアの叔父だと言われる人物をもう一度見返した。シゼルは負けじと結界を張り続ける。

「王子、一応忠告しますが私は何でも出来るわけではないです。補助魔法が得意なだけで攻撃特性のあるものは一切遣えませんか！」

「…了解」

「こんにちわ」

どう見ても三十半ばくらいにしか見えない彼は剣を抜刀しながら微笑んだ。紛れもなくレイスⅡヴォグナー子爵だ。まず兵隊を差し向けて剣を抜きながら笑うという神経が信じられない。

「シゼル補佐官、うちのアリアはどうしたのですか？」

「昨日のうちに…帰国しました」

「この騒ぎはアリアの命令？」

「……騒ぎ？騒がれているのはあなた方ですよ？第一、あなたと大使達は何故ここに？」

「シールに亡命したからだよ」

さらりと笑顔で言っただけ。この物腰の柔らかさは調子を崩す。「シール王を渡して下さい。そろそろ死んでるでしょう？アリアは治癒系統の魔法は一切遣えないものね？姪は役立たずだっただろ？」

「王はまだ死んでいません！」

結界を張る手を止めて治癒に切り替えた。虫の息だが死んではない。

「シゼル補佐官：君は何者？貴族のお坊ちゃまは治癒術なんて必要ないだろう？」

「生憎家柄に頼って生きたくなかったもので色々出来るように鍛練して参りました」

「ふーん：いずれにせよあのアイデアの回し者だね？アリアの足りないモノを持つ者に補佐させる。あの王は何も考えてない様に見せてこれだよ？全く嫌になる」

「本当にカリストを裏切るんですか？」

信じられない、その自分を嘲笑うかの如くレイスは剣を振り降ろした。その波動だけで自分が張った結界はほとんど消え失せる。

「アリアと戦い方が似てるでしょ？」

「見た事ありませんから分りませんが」

「それは勿体ないな。アレは闘ってる時が一番キレイなのに」

からかっているのか？結界が殆どなくなったのだからシール王の治癒に手を割いている場合じゃない。祭壇に刺してある剣の刃の部分を強く掴んだ。されど左手短剣、殆ど斬れないが少し滲み出た血を遣って結界を一枚練り直す。カインとアルが目を見張った。

アリアがシールの魔法は造りが稚拙だって言ってた。それなのに王子の結界は殆ど破壊されてない。その理由はきつと術者の違いだ。自分が幾ら張ってもきつと破られる。だがこのやり口なら……。

剣に血を吸い上げられる様な感覚。剣に繋がっている右手だけ冷たくなっているのがわかる。

レイスが無表情のままに剣を裁いた。今度は消えない。だが打ち込まれた瞬間に血を大量消費した。

何発保つ？何発で死ぬ？

今、目の前にある王の死よりも生々しく自分の死を計算した。

震えが止まらないのは血が不足しているからだって自分に言い訳する。

何で命を掛けて戦っているのかって……。

考えないように：なんて考えてる時点で：もう身体は拒否してい

る。無理矢理言い聞かせて力を入れた。

「王子、後は任せても大丈夫ですよね？」

虚勢だ。顔が引きつっているのも自分で分かっていた。だが笑顔を造った。

「ちゃんとする！ちゃんと決めたから、だからシゼル！」

術を解け！って口の動きで理解した。名前を叫ばれたところから妙に頭がはつきりしている。

音が聞こえないのはきつと血を流しすぎたせいだ。

アリアはこんな自分を見て何て言うだろうか？きつと怒るだろう。泣きながら怒るだろう。そんな貴族のお嬢様にはとても見えない彼女の奔放さはこの半年で自分の大好きな所になっていた。

正直、今回のメチャクチャな命令だって彼女のために遂行している。

ただ、アリアの為に……。

自分の為に泣いてくれる、アリアの為に。

嫌な気配がした。

カイン王子とシゼルがどこにいるのかを探っている時だ。禍々しい気配の……術を遣った人間がいる。

「ルー？」

「アリア：今何かが」

何が起きているかは断定出来ない。ただの直感なのだ。不確定要素が多過ぎて口にするのをやめた。

「アリアはいつまで魔法を遣えないんだ？」

「と、取り敢えずしばらく無理だと思ううー？」

本人もよく分かっていないらしく疑問符がついていた。この禍々しい術を遣ったのが味方にしろ敵にしろ大変なことになりそうだ。術の気配を追って道を進む。

当然のように碧き城が建ち構えていた。初めてシールの首都まで着たがこれは戦争で崩す事になったならば勿体ない造りだ。何にも考えずにイデア第一で壊してしまう奴が横にいるため尚更感じる

「アリア、俺の足を引っ張るなよ」

「ヒドいや。一兵卒よりは役に立つと思ってたのに！」

「今時の一兵卒は上級魔法の二、三個は覚えてから配属されるんだよ」

「うっ…上級魔法なんて実戦で使いこなせるヤツいないもん！」

「お前は遣えただろ？俺はこの状態でも遣える」

そんな会話を交しながら物凄い早歩きで城までの道を闊歩した。近くまで来ると速度を緩めて遠巻きに城を見た。当然封鎖されていて、殺伐とした空気が流れている。

アリアに目配せするとすぐに察して警備の薄い場所を視線で指し示した。

こういうところがさすが最年少将校だな。抜け目ないというか、常に軍事目的でしか観察眼が働かない。人としてはかなり欠陥だが軍の人間としては優秀だ。

小さく印を切って、壁抜けの魔法を作り上げようとした。

「強行突破でも良くない？」

小さくアリアが言う。らしくない言葉に手を止めた。

イデアの立場が悪くなるような行動を選ぼうとする事が珍しくて。自分はアリアと生き残る道なら構わないが。壁に寄り掛かるように振り返ってアリアに視線を併せた。

「カリストの奇襲になるけど良いの？」

「ならないよ」

「なるだろ？」

「カインが王になればこの攻撃は王子奪還のためという大儀名分が付く」

「王になれなければ？」

「…色々考えたんだけど、カインが即位出来ない場合は私達カリス

トに生きては帰れないよ。いっぱいカイン達を見捨てる算段したんだけど私の頭では無理だったんだ」

「確かにテーベンの事を考えても見捨てるって選択肢は消えたかな」

「うん！だからカインを王にするよ！」

そうなたら問題のものは全部ここに揃っているのだ。キレイに見えた碧の城もそんなではなくすんで見えてしまう。

「アリア、でも歴史的建造物だから済ませられるところは穏便に…」
詠唱と印を切る続きをし壁抜けをした。アリアの見立てた通り人が少ない。だがここは城の外れの場所の様で何も守る物がない為警備がない様だ。

「元帥…」

「なんだね？准将」

「この先は？」

「私が何も考えてないと思うの？」

「少しそう思う時があるね」

「ヒドい。ちゃんと考えてるよぉ」

アリアはそう言いながら排水を行っている川を指差した。

「シールは下水道だけはちゃんと整備されてたよ！特に城中に張り巡らされてて面白かったな！」

「そう言うのって大使の見学コースじゃないよね？」

「シゼルの目を盗んで調べるのは大変だったあ」

呆れた大使様だ。城の人間に見つかれば只事では済まなくなる。見つかるようなヘマはしないって本人は言うだろうが、イデアからのアリアへの丸投げの命令は失敗することを願っての事ではないかとさえ疑問に思う。

「さあ中に入りましょう！」

せっかくキレイにした身体を速攻汚す様な場所にためらいもせずに入ろうと言ってくるこの上司が恨めしい。洩々フェンスを開けて河川に近寄った。あちらこちらに横穴が有り、汚水が排泄されてい

く。

「まさかこの横穴泳いで城のトイレに出るとか言わんよね？」

「さすがに言わんよ。この川の手先、上流に心当たりがあるんだ。汚水と混ざっちゃって勿体ないな」

「アリア、どーでもいいけど…すっかり男言葉だな」

「この格好で『でもおゝ』とかやってたら怖いでしょうが！」

「どんなに男言葉を遣ってもその容姿ならキレイな言葉遣いのが似合うよ」

イデアが最たる見本だ。アリアは納得がいかないらしく眉間にシワを寄せている。

「上流に何かがあるんだ？」

「多分…私の魔力が…」

アリアはただそれだけ言った。向かう理由としてはそれで十分だったためそれ以上聞かずに川を伝って行った。途中から地下に入り、水路の様な場所になる。汚水が流れ込む横穴は至る所に存在していて中ほとんどない匂いで充満していた。

吐き気を堪えながら走る。さすがにこの臭気の中で会話する元気は二人に無く、無言で走った。

同じ穴なら通気口の方がやりやすいのではないかと感じたが古い建物だ。そんなものは存在しないのかもしれない。

しばらく走っていると横穴の数が減ってきた。城の端から侵入し、螺旋状に人工的な川が流れている、つまりは城の中央がゴールだ。だが地上に出る方法があるかどうかは分からない。アリアは言葉通りの強行突破をする気なのかもしれない。

（よく道は造るもんだ！って豪語してたからな）

横穴が一つも無くなりキレイな水が流れ出る様になった。清浄なその流れを汚水で汚すのは確かに勿体ないな。少し水をすくって口付けた。

「…アリア、この水に魔法を掛けた？」

「水に掛けたつもりは無かったんだけどね。掛かっちゃってたみた

い」

水の内側に秘めるものがアリアの中に宿るものと同一のものを感
じる。この水の先にある何かは今もアリアと繋がって、身体の中か
ら魔力を吸い取っているようだ。

「さすがルーは頼りになるね！何も言っていないのにつ！」

物凄い嬉しそうに言われた。自分は魔法が専門なだけだ。肉弾戦
でアリアと同じ事をしろと言われても付いていけない。せめてこの
くらいは頼って頂きたいのだ。

「術を解かずに魔力を取り戻したいんだけど…」

「何か代わりになるものを差し出せば出来る」

「代わり？」

「例えばそのアリアが帯刀している左手短剣とかね」

国宝ならばアリアの代わりの魔法具としては遜色ない。だがアリ
アの目が泳いだ。アイデアの立場を気にして遣うのを嫌がっているの
だ。

「もしくは永久機関の組まれた魔法を掛ける」

「この場合はポンプみたいな物を造る事になる…」

「分かってんじゃない」

「それが難しいって分かってるから他の方法を訊いたの。世界規模
の構築はちよっと私の魔力だけじゃ無理」

「後は…他の人間に魔法を掛けさせればアリアの魔力は返ってくる
だろ？多分そんな高度な魔術を遣えるのは限られてくるけど、取り
敢えず魔法陣を見てから考えさせて」

「魔法陣を見たらルーは私を軽蔑すると思う」

「…しないよ。そんなに期待もしてないし」

何にも準備せずに行った魔法とは言え、ただの王子の成人の儀式。
その儀式にやたら大きな魔力を遣ってるのが気になったがアリアは
そのことについては絶対話そうとしなかった。

魔法については魔法陣を解析すれば統べて解る。それなのに話そ
うとしない。

それ以上訊かずに歩を進めると道が無くなり、水路だけになった。

「少し泳がなきゃいけないね」

アリアはまだ先に進む気だ。反論せずに水の中に入った。結構流れが強く、先に進むのは困難だと思ったが後ろからアリアが抱き付いてきた。

「何？泳げないとかじゃないよね？」

「ルー、軍事演習で水場想定のものだってあるし、見習いの頃は海軍に所属したことだってあるのよ！」

じゃあなんだ？と問おうとしたら回されたアリアの手が印を切った。突然逆方向に流れが代わり急流に流されていく。

水に解けてるアリアの魔力を遣って魔法を発動させたらしい。身体は勢いに任せて上流へ流れた。

息を吸ったりする余裕が無かった上に傷が服の下には隠されてるためあんまり続けて流されたら死んでしまう。

本当にこれで殺されたらアリアに殺されたんだよな、そう思ったらこんな状況なのに笑いが零れた。

まあ、それならそれで……………。

王になりたいかと訊かれたらなりたいとは言えない。

「ちゃんとする！ちゃんと決めたから、だからシゼル！術を解け！」

このままではシゼルの身体が死んでしまう。冷たい笑みを浮かべながらレイスは何度も剣を振り降ろした。いっそシゼルの結界が保たずに弾ければ余計な血を使わずに済むのにわざわざ一番血を消費するように力を調節しているようにすら見えた。

そんな命を掛けて貰う程の存在じゃないんだ！しかも他国の人間が頑張る必要はないんだ。祭壇に駆け登って無理にでもあの短刀を抜いてしまおうとした。

その瞬間に大きな身体が自分をはがいじめにした。アルだ。

「放せっ！」

「ダメだ！シゼルが時間を稼いでくれてる！少しでも時間を稼いでくれてるんだ！！」

何のために？アリアなんて来ないかもしれないじゃないか！その念をぶつけてアルを睨み付けた。

「放せ！命令だ！」

「放さない」

シゼルの結界に10発以上打ち込まれた。もう彼の身体の機関は生きていない。ただ結界を保持して立ち尽くす。糸に吊されたマリオネットの様だ。宙をただ見つめながら残り少ない血が尽きるまで結界を守り抜く。自らが封じ具の様になっていた。

絞められたままの状態に抵抗するのを止めた。力が抜けたのだ。

とことん無力で、力も魔力も知識も経験も何もかも。全てが足りなくて。ただ、踊らされてるだけって分かってたよ。でもただ一つの命を救う力が欲しかった。何もかもを守る力があるなんて思っていない。ただ目の前の命を一つ一つ守りたかった。生きていく道を守ってあげたかった。死へと続く道を彼に選ばせてしまったのは自分だ。そしてこのままではアルにさえ同じ道を選ばせてしまう。

——そんなの嫌だ。

「力が、欲しい」

いつか強くなるとかではなく…どうしても今、欲しい…そう呟いて俯いた。

下に赤い液体がおちた。それが自分の唇を噛んで流れ出たものとアルに気付かされた。唇をそれ以上噛まない様にアルの手を突っ込まれたからだ。それでも噛んだ。悔しさがどうしても癒えなくて。アルの掌に血が滲んで、渴いた口の中に血の味が広がっても…。アルが手を外して倒れ込みそうになった時だ。唇からの血が湖に一滴落ちていった。

黒い光が辺りを包む。

闇色の光なんて初めて見た。目の前で起きている事が解らずに呆然と湖を見つめた。

ここに来てレイスが剣の力を強めてシゼルの結界を打ち破った。何かを察して遊んでる場合じゃないと判断したのだろう。結界のあった場所へ兵を動かす命令を送る。一斉に兵士達が前へ出た。大使達の焦りの声。彼らは各々得意の属性の結界を瞬時に張った。全員軍出身の貴族だと聞いていたので驚くことはないが随分と強い結界が張られたように見えた。

それなのに……

もう誰も傷つけないで！その想いだけで必死に立ち憚る。自分が何の盾にもならないことを解っていて。

だが兵達は刃を向けた順に、身体へ直接爆弾を打ち込まれた様に弾け飛んでいった。手足がもげた者もいた。四肢が湖に落ちるとクシャ、クシャ、ペチャ

食べる様な音が湖中に響き渡る。アルと目を併せてその音が現実か確かめた。どうやら彼にも聞こえている様だ。青ざめている。知った顔が、引きずり込まれていく。マクレガー大使だ。元軍人の……筋肉と脂肪の混ざったお腹が消えゆく時には吐き気を催した。

「何か、いる？」

湖の中に？

生唾をゴクリと飲み込んだ。知りたくない何かが湖の底に潜んでいる。通路に残った死体の残骸がどんどん引き摺られる様に湖に消えた。

「何か？…じゃなく君の力じゃないか」

呆れた様に一人残ったレイスが首を横に振った。

「僕の？」

「君の……。それにアリアの魔力も入ってるね」

「アリア？」

つまりはあの儀式によって得た力、アリアが失った力だ。最強の軍人の力だ。

立ち位置を変えて戦う事を決意した。ここにいる人を守る為にこの力で戦おう。

「やる気だね？アリアの力だと思ったら自信が出たのかい？傲慢だな？」

人の力で天下を取ろうとする事を愚かだと、レイスの呟きが耳に届いた。それでもやってやろうじゃないか、身内を守る為に…！

闇色の光を制御するように右手に力を込めた。力がレイスに向かう様にするために。

だが予想に反し闇色の光は自分の身体に巻き付く。その瞬間を空かさずレイスの身体が飛び込んできた。炎を魔法で纏った重たい剣が自分に打ち込まれそうになり、恐慌状態になりながら手を前に振った。

カツイイン！

金属を跳ね返す音が耳に残る。目を開けてみると防ごうとして振り上げた利き手に闇色の刀身の剣が握られていた。柄の部分に見覚えのある細工が施されていて、それがアルに無理矢理着けられた指輪のものだと言う事は後から解った事だ。

「アリアめ…やってくれたな…」

レイスの悔しそうな声と共ににこやかだった表情が陰しく変貌した。打ち込まれる剣の動きが荒々しく変化し、物凄い重みを増した。今までのお遊びの様な剣とは全く別物だ。

だが何故かその剣術すら返す事が出来る。剣が勝手に受け返している様だ。お互いに致命傷にならずに打ち合いを続けているとバテ始めたのは自分の方で、相手はさすが軍人。息が上がりフラフラになりながらもその剣に引き摺られた。

人間とは思えぬ動きを強要されてふと気付く。これはアリアの動きではないか、と。

見た事はなくとも何となく感じる最強の剣術。これはレイスの剣の型と同じ魔法剣なのだ。

そう理解した瞬間に剣と一つに慣れた気がして、気付くとレイス

の剣が床に転がっていた。

「何をもたもたやっているんだ！」

新手だ。振り返ると叔父・セティスが立っていた。彼の後ろにも自分と同じ大きな強い闇色の光が見えた。それが何故か影だと解った。自分達はきつと無理矢理アリアが行った儀式によって継承魔法を二つに分けたのだ。

「カイン、儀式を行ったんだね？でも残念ながら君はここで死んで貰う」

セティスの影は目をギラリと光らせた。彼の額には未だ継承痕が残っている。後退り、肩がアルとぶつかった。

「誰に儀式を行って貰ったかは知らないけど随分中途半端な術を掛けて貰ったんだね？それじゃ勝てないよ！」

影が伸びて大きな闇に変化する。それに覆われる様に、飲み込まれる様に…、先程の食事の様な音を思い出した。この影にとってはきつと戦いが食事なのだ。もちろん、相手の身体、生身の人間…：果ては魂をも喰らい尽くす…。

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ

頭も身体も心もシグナルを出した。死んでしまうより危険な香りのするその闇に…。

アルに引っ張られてその無機質な攻撃を間一髪避ける。一緒にシゼルの意識のない身体も持って来ていたが、父の腐敗した身体はダメだった。

グチャ、パキ、クシヤリ、

またあの気味悪い音が聞こえてきた。父は今、虚空に何一つ残らず消えたのだ。

「カイン、逃げるぞ！」

その言葉と共に二撃目がくる。アルは咄嗟に祭壇に刺さっていた短剣を抜き、受け流した。

さすがカリストの国宝は闇の力に負けない。アルがシゼルを背負い込み逃げる体制を造る。

「逃がない！アルはシゼルを連れて避難してよ。僕はやらなきゃいけない事がある」

「命より大切な事なんてない！」

「だから退けない！ここで退いたら自分達だけじゃなく犠牲者が出てしまう。アレは敵も味方も無差別じゃないか！」

「勝手にしろっ！でも：死んだら許さないからな」

そう怒鳴ったアルの手からカリストの宝剣を渡された。

死んじゃダメなんだ。生きて、守らなければならないのだ。

「カイン、儀式は魔法を受け取り終了じゃないんだよ。知ってたかい？あの魔法陣の正体はこの悪魔だ」

そう言った途端にそれに呼応する様に影が異形に変化した。

「あ、くま？何言って…」

「シールの呪法は全て黒魔法だ。何かを犠牲にしないと術は発動しない。でもさっきのシゼル補佐官がやったように何かを犠牲にすれば桁違いの威力を発揮できる。それがカリストとシールの違いだよ。カインの魔法はアリア大使の魔力を犠牲にしているんだね？」

「……………」

「と言うか彼女に封じ込まれたのか。剣の形をとらされては本当の威力も解らない。じゃあそのまま死んでよ」

影が揺らいでこちらに来る。死ぬわけにはいかない。約束したから。

どうしても勝たなきゃいけなくなった。守らなければいけないから。

だからね、僕は王様になるよ。

水にまで駄々漏れている魔力が少し自分に味方してくれた。全く尽きていた魔力が少し回復していくのがわかる。水の中を流れながらも一度印を切った。もうすぐ出口だ。

ドドドオッ！

穴を抜けて自分の足で立ち上がると止む事なく響き渡るその音に乗せて水が降っているのがわかった。つまり滝だ。自分が思ったとおり、儀式の際に使った祭壇の向こうに流れていた滝の近くに辿り着いたらしい。どこからか流れている滝の水を捌けさせる為に川を作ったに違いない。

ここは滝の裏側だ。少し水に体温を奪われて顔色の悪いルーが呑んだ水を吐き出した。

「無理させてごめんなさい。お互いに本調子じゃないんだもんね？」
「シッ！近くに人がいる」

口を抑えながら二人で息を潜めて滝の裏をそっと覗いた。カインが一人でセティスとレイスを相手しているのが見える。

（なんでシゼルがいないの？なんで独り？）

闇色の剣が打ち付ける度に闇色が増す。左手短剣でセティスの術を受け流して、闇剣でレイスの剣を捌くその様はまるで……。

「戦い型がアリアそっくりだね」

「なんか余計なところに魔力を遣いすぎたみたい」

「ちゃんと組み直せば全て枯渇することはなさそうだ」

「はあい」

ルーから見れば迂闊な呪文の掛け方をしたのだろう。自分的にはあの状況下でいっばいいいっばいやったんだが……。正直言って綿密で繊細な魔法はあんまり得意ではない。

「レイスⅡヴォグナー、ここに居たか」

ルーは口許だけを歪ませてそう笑った。呪いを掛けられたって言うってた。どういう呪いか全く教えてくれないからどんなものかは分からないが（解ったところで今の自分には全く刃が立たない）説明してくれるとも良いと思う。

お互い言わない事が多すぎだ。

「呪いを解くのはどの方法で？」

「返すに決まってるだろう？」

相当酷い目に在ったんだろうか、相変わらず口許は微笑んでいる
目が全く笑っていない。

この人って普段は温厚なふりをしているからアイデアと自分と三人
の中なら一番優しいとかチョロいとか思われがちだけど、ぶっちゃ
けDSだし。自分にだってワザとちくちく厭味を言って楽しんでい
る。嫌いな人は丸無視するし、戦い方がまず普通の人とは違う。ね
ちねちパワーを吸い取る様なものや呪いや毒や、ともかく削ってい
くような魔法が大好きだ。魔法も一気に消し炭派の自分と違い、相
手の苦痛に歪む顔を拝んで殺すって言うし、水攻めとか得意だし。

「何？」

「んーん！なんでもない！」

そう言いながら、取り敢えず湖から出る事にした。解くだけなら
ここまで来る必要は確かにない。でも返すなら戦わないと！

近くに走り込んで術を確認する。湖の中にあつた悪い魔法は全て
あのカインの剣に引き込まれた様で安心した。

「カイン！」

「あ、アリア…良かった…あれ？髪が…」

「王は？シゼルは？」

尋ねた瞬間に絶望に近い表情をした。セティスの闇がそれを襲う。
水から出たら強い魔法を遣える程魔力は残っていないが自分にはそ
れを弾く初級魔法は知っていた。炎の魔法だ！

相手の反属性を遣えば威力が違えど消せない事はない。印を切っ
て素早く出したその魔法は威力としてはロウソクに火を点すレベル
だ。一番力が集中している所に押し当てて掻き分けるように霧散さ
せる。

攻撃を無効化させるとカインを振り返って早口に告げた。

「カイン、一度魔力を返して貰うことにしたんだけど」

「魔力を返したら叔父さんの使役している影の様に悪魔が生まれ
るんじゃないかっ！？」

「えっ？使役？どっちが？」

何を聞かされたのか怯えきって力を抜かないカインから魔力を取り返すのは難しそうだ。

それにセティスが使役しているわけではないと思う。悪魔がセティスを使ってシール王家を混乱に堕とした。その力は素質が在るものが遣った方が悪魔にとって良いのだ。

戦争を好まない前王よりは実力も破壊思考の性格も合うセティスを選ばれた。ならばセティスとカインはどちらが選ばれるのか……。そうこうしているとレイスが剣を振りかざした。うちの叔父様に殺られてあげる気は全くないため、もう一度印を切り直してそれを捌く。今度は指を鋼鉄に変えた。

すぐに足に装着していた紅い左手短剣を抜き、セティスに向かって振り払った。

紅い聖なる炎が伝う様に追加発動する。それを狙う様にルーが描いた魔法陣が全体を包み込み、上へ突き上げる様に吹き付けた。酸素を吸って大きくなった炎がセティスを襲う。

更に剣を抜きその風を利用してレイスの方へ跳んだ。愛剣はフルーレタイプの軽いものだ。数ある剣の中で一番軽くしなる。右手に握ったそれでレイスに向けてしなりを利用した突きを幾つも放った。左手短剣はセティスを相手しているルーに渡して、空いた左手に印を切り小さくて強い熱を作り上げた。炎として放たないで直接肉を灼く。突き出してくる剣を持つ手を灼く、身体自体を灼く、そして攻撃をする剣を溶かす。

（バカにしないで！私はこれでもカリスト帝国軍最高司令官なのよ）
指先で灼熱を作り上げて、鋼鉄さえ蒸発するくらいの温度を保つ。
「くっ……な……で」

焼きを入れて脆くなった剣をフルーレの柄で叩き折った。衝撃で後退ったレイスに更に剣を突き付ける。

「何でシールに來たと思ってるんだあっ！！」

レイスの叫びとともに狂った様に炎が渦を巻いて立ち上ぼった。上級魔法をシール流に発動したのか。この人は何にも解っていない。

その力で犠牲になるものは掛け替えのない物かもしれないのに……。」「どんな魔法にも死角は存在していて、その隙を狙えば術を打ち崩すのは容易い。作戦も何もなく放たれたデカイだけの魔法なんて切り崩すのは簡単だよ」

何でこの人はこんなに力に魅せられたのだろう？

魅せられているならば何で自分はこの人をちゃんと圧倒的な力で縛って措けなかったのだろうか？

炎の中央に何の術も掛けずに両手を入れた。少し灼ける肉の匂い、人の肉が焦げる匂いだ。戦場で何度となく嗅いだその香りも自分のものだと思うと更に気分が悪くなる。

そこから少しの魔力を注入していつきに左右に手を動かし、炎を引き裂いた。術が掻き消されて行く。

返した拳でレイスの横っ面を振り切った。ヒットして無防備に吹っ飛んだレイスを更に追い討ちを掛ける様に腹に蹴りを入れる。間髪入れずに馬乗りになって、腕を押さえ付けた。

「叔父様、私あなたを殺せないの。私が殺したらルーに恨まれちゃうわ」

顔を近付けてそう告げた。彼にとって死刑より嫌な言葉を選んだ。とどめを指す価値もないと告げる。

「カイン！」

「あ、何？」

「何惚けてるのよ？こっち代わって！」

「え？」

「拘束してる事くらい出来るでしょ？」

顔色が真っ青を通り越して土気色になったカインは遠目から見ても震えていた。あまりに色々有り過ぎて考えも追い付かないだろうに。年若い王子をあまり苛めてはいけない、か。

溜め息を付いて面倒臭さを全面に出しながらもカインの手を握った。繋がっている手から自分の魔力を少し返して貰い、レイスに呪文を掛ける。魔法にあがらう様に顔を歪ませながらも耐えきれずに

眠りへと誘う。完全に掛かったところで平手で頬を思い切り叩いた。反応が無く、完全に意識が落ちた事を確認してレイスの上から身体を退す。

「ねえ、カイン…王は死んだのね？」

グシヤグシヤになっている祭壇に血の跡がいつぱい付着している。死体はきつともうない。セティスがトランス状態に入っているならその影が餌にしたに違いない。

じゃあ、シゼルとアルは？

「アリア、シゼルが…」

涙の跡の上に更に涙を流した。堪え兼ねて…。

「ごめ、ん…シゼルが俺を守ってくれて、これ」

緑色の刀身の左手短剣をそっと自分の方に寄越した。既に乾いた血が至る所に付いていて、何があったら左手短剣、受け流し用の剣がここまですくなるのか想像がつかなかった。今度は受け取った自分の手が震えて止まらない。

彼は軍人じゃないのだ。死を覚悟してはいないのだ、彼も自分も…。

「生きてるのっ！！？」

「ごめ、んなさっ…い」

「生きてるのっ！？」

「死んではいけない…と思う。アルが避難させてくれたハズだ、よ」
怯えきっている瞳を向けられてようやく自分が責めてしまっていることに気付いた。大きく深呼吸吸して優しくカインを抱き締める。

「何を言われたか教えて？私が答えられることなら答えるから」

「なにかを、犠牲にして力を使って…いるって…悪魔の術だから犠牲が強ければ強い程大きな力が手に入るって…」

今まで知らずに遣ってた、何を償えば良い？ねえ？

声がとぎれとぎれに、吐き出す様にカインは言った。シールの魔法から犠牲になっていたのはカリストの大地だと思う。国を代表する者として償いなんて簡単に言っではいけない。今は聞かなかった

ことにすることを選んだ。

「大丈夫」

「アリア？」

「そのためにカインの魔法を変えたんだもん。代わりに私が魔法遣えないけどさ」

「……」

「あ、剣の柄が……」

「王の指輪が変形しちゃって……」

「そっか、お父さんも守ってくれたんだね」

「……うん」

返事が返って来た時には表情が落ち着いていた。これなら大丈夫そうだ。

振り返ってルーを見た。あの影とセティス本人両方を相手しているルーは少し苦戦していた。

と言うか、ルーが時々顔を歪めるのに気付いて原因が呪いであることに気付いた。

一体どんな呪いを掛けられたんだ！？何でそれを看せてもくれない？正直うちの叔父の手口でなまっちょろいモノは想像出来ない。

「カイン、その剣！」

「あ、はい」

剣を受け取って取り込まれた自分の魔力だけ抜き取る。剣の色味が少し変わった。

「あ……」

「私の魔力の本質は炎だからその色が入ってたんだね。カインの力は海の色だ」

深い深い碧の剣を再び返した。自分の魔力を抜いたら剣を象れないかと思っていたため少し驚いた。

王の指輪の作用か、カイン自身の成長のせいか……。この様子なら制御をしなくても大丈夫だ。

「じゃあ行って来る！」

走り込んだ所にちょうどセティスが放った一撃を返しきれずにルーの身体が吹き飛ばされて来た。それを力ごと受け止めてダメージの残らないように相殺させる。

「ルー、あっち気絶させといたから呪いを解いちゃってよ」

「レイスⅡヴォグナー將軍を魔法無しの状態で倒しちゃったの？うわあ、なんか人間業じゃなくなってきたねえ…」

「ルーが素手で魔法を破る方法を教えてくれたんじゃない!!」

「役に立った？」

「…うん」

支えてた手をさり気なく解いて代わりに軽く唇を重ねた。

「じゃあ、行って来ます。ホントはそろそろ限界だったんだ」

舌を出してそう言うルーはやはり顔色が悪かった。ボロボロだ、自分を含めて。

セティスは攻撃の手を止めて自分が参戦するのを歓迎した。

「ようやく真打ちかい？しかし君は今何をしているのか解ってるのか？」

「え？」

「シールの魔法の形を変えればシールの大地は力を失い、いずれ滅びるシールが滅びればカリストも源を失い後を追うことになるだろう」

「シールに大きな魔法を遣われればカリストの大地が枯渇します。

戦争を興してどちらかを選ぶよりは全てリセットして違う存続方法を考え直す方が筋が通ってる」

「シールの魔法の方が強い。君は叔父さんの様に強さにあこがれを抱かないのか？」

あの魔法陣を見て世界を壊す仮想を抱いていた事を見透かされた様な気がした。反射的に眉を顰める。

「誰でも懂れるんだよ。君みたいな強さに…」

そう言うとセティスは闇色の光の中に自分自身の身体を墜とした。これが強さを手に入れる最期の方法なのか。影が本体を食い付くし、

残った影が全てになった。影の色が更に濃くなり、闇の色を増した。

「馬鹿な人だね」

自分はちゃんと儀式をする時に計画を立てていたのだ。レイスにはしてやられたが、セティスに対する対策は既に練ってある。指をパチンと鳴らすと自分の魔力が溶け込んだ湖の水が、セティスを含む全て闇を包み込み、飲み込んでいく。

浄化の水が闇の魔法と戦うように。

「強くなりたいのは私だって一緒でしょ。だからここまで来たの。これからカリストを……イデアを守って行くために」

自分の魔力を吸った湖の水は無くなり、新しく降り注ぐ水は再びこの国の力を宿していた。だがきつと変わっていくのだろう。

あのカインとあの剣によって変えられていくのだろう。

レイスに掛けられている催眠魔法を解くと意識が朦朧としている彼に向かって目覚まし代わりに頬に平手打ちをした。

「おはようございます、中将」

にこやかに挨拶をするとレイスの表情が変わる。

「何でお前が生きている!？」

「あなたの中途半端な呪文のお陰でまだ生きてますよ」

「な、何故だ!？消えない炎を打ち込んだ筈なのに!」

シャツのボタンを外して胸の傷を見せた。アリアには見られなくなかったそれを。

肩口から腹に掛けての大きな火傷と凍傷の跡。消えない炎を消す方法ではなく、自分が死なない為に炎を相殺させるように傷口を凍らせたのだ。その後に水に入らされたり温度調節が難しくて少し凍傷も出来てしまった。

自分自身でやるのは物凄いエグイものだ。こんな方法で身体を痛め付ける様なイカレた趣味はない。他人にするならともかくとして。

「そ、んな…死んだと」

「術を解いてください。カリストのやり方じゃないからかな？解き方が分からなくて。解いてくれないならあなたに返します」

返す方法は解くより簡単に、力技で出来る。でもこいつは簡単に殺してやるわけにはいかない。死んだ方がマシと思わせるくらいの拷問と我らがアイデア陛下の裁きのカリストで待っているのだから。諦めた様な表情で燻っていた炎を消し止める。その瞬間を狙って凍らせていた肩を治癒魔法に切り替えた。同時にレイスに拘束具を填めて封印呪文を掛ける。

その動きをレイスはずっと目で追いながら呟いた。

「天才はアリアだけじゃなかったんだな」

「俺たちは現役なんで、ご隠居なさった方には負けられませんね」

「そうか、私の時代はとっくに終わってたんだな」

「おしゃべりはここら辺にして猿轡を噛ませますよ。国に連れ帰る前に自殺されちゃ困るので」

破いたシャツを握って口に噛ませた。舌を噛み切らない様に、だ。でも意外に生への執着が強いのか、自殺する様には全く見えな
いのだ。そしてずっと彼は笑っていた。

その時だ。湖の水が引けて、アリアが闇をかき消した。

さすが愛する元帥様だ。

水の魔法が引き、全て終わった王子の額の継承痕がより濃く刻まれた。
れた。

シールの影は結局彼と共に生きることを選んだのだろう。

王子は俯いて掌を見つめた。その仕草が、アイデアの癖に似ていて泣きたくなった。また一人自分を犠牲にして国に縛られる人間が生まれたのだから。

「アリア」

「ルー、元気になった？」

「オマエも魔力を返して貰えた？」

ルーとお互いの調子を確認すると拳を突き出して合わせた。疲労もあるので本調子とはいかないがこれくらいならまだ行ける。

お互いに思うことは一緒らしく、二人でカインを向き直った。

「カイン様、私はこれから急ぎテーベンを制圧して参ります」

「え？アリア？」

「私もすぐに戻って参りますがこの謀反の制圧はこのルーファスⅡハレー准将が協力します」

「アリア一人でなんて無茶だ！第一この城の制圧だって一人じゃ……」

不安な面持ちを見せるカインの横っ面に問答無用で拳を入れた。

「カイン、グズグズ言うのはそこまでにしてね？」

苛々するのを抑えたが出るモンは出てしまう。自分の顔に浮かぶのは、優しい口調、柔和な笑顔……に、くっきり浮かぶ青筋。

やはり自分の中にある王様像は、無責任王とはいえ、悠然と構えて無茶を命ずるアイデアである。だから何万人の民の頂点に立とうとするカインがそう言う態度なのは年下とはいえ許し難い。

「王子がこれ以上グズグズ続けていたら、私はまたこの国を滅ぼしに来ちゃいますよ？統率者がそんなにダメなら中身なんて簡単につぶせますし、ね？」

「そうですね、元帥。はつきり言って今が戦り時です」

「そうよね、准将。私なら一人で戦れるしね！」

ルーファスと笑顔で口々にシール開戦の作戦を立て並べた。カインはわかったよ、と言って苦笑を浮かべた。心細いのはカインだけじゃない。それでも自分達は戦わなければいけないのだ。

「でもアリア一人で制圧は……。こっちを制圧してからシール軍を率いて行くのでは遅いのか？」

「カイン、誰に向かって口利いてるの？テーベンなんて私一人で整地して新しく街造り直してきてやる！」

「え、っ!？」

さすがにルーファスにすらそれは止められてしまった。

だがシール軍を使って海路から進行するなんてスピード勝負の軍事問題には遅すぎる。この手に力が戻ってるのなら一人で行くのが一番早くて確実だ。

うちのイデア様もそれが分かってるからここ、シールの大使としてに自分を派遣したわけで：我が陛下の先見の明には毎度のことながら恐れ入ります。

あれから一月程だ。

事後処理の為、王子も自分も奔走した。

カリストのテーベン制圧は、元々レイスが慕われていなかったお陰で旧テーベン軍の人間と合流し、呆気なく終わった。制圧終了直後、狙ったかのように皇帝の勅命がそんなテーベンに届き、また単身シールにとんぼ返り。原因究明も任務の一貫に組まれたが、事が事だけになかなか言及出来ず、原因不明とかそんなのばかりの顛末書を書き上げて我が皇帝陛下に先に送ってしまった。

実際の所セティスもシール王も、マクレガーも死体すら残らず、残ったのはレイスⅡヴォグナーただ一人だった。マクレガーを始めとする今までの大使はやはり毒の運び屋だった様だ。レイスが炎の術士、後の大使が地・風・水の術士を補い、四人で転移結界を張ったらしい。一人で行うには術の規模が大きすぎると思ったのだ。

死体も残らずに死んでいった人間が多い中、生き残った中での重傷者はシゼルだった。血を流し過ぎていて右の機関が死んでいる。右耳が難聴になり、右目は失明したらしい。生きていた事は良かったが彼も大きな犠牲を払って魔法を遣った一人で、以後の後遺症を心配した。

「シゼル!」

「アリア、また来たんですか?」

ルーと一緒に城まで毎日通った。と言うか、ルーもしばらく城の

中にある病院に入院していた。シゼルはリハビリが必要な為に入院は長引いた。

今日は退院の日で、いつもの制服に腕を通して準備をしている最中だ。

「ハレー准将も何度も申し訳ない。そろそろ帰国されるのでは？」

「ええ。行方不明だった経緯やこちらでのことは二人で帰国して報告するように言われているので。アリアがあなたの無事を確認してからとせがむんですよ」

この二人が話していると何だか偉く堅苦しくなるのは気のせいではなさそうだ。

「シゼル、調子はどーお？」

「大丈夫です。右目は死んでしまって治癒術は利かなかったけど、耳は元に戻るそうです。他は元気だったし、左目はもう回復しました。遠近感は少し無くなりましたけど文官である自分に前線に出るなんて言う上司はもういないと思うので」

軽く厭味を言われて本調子になりつつある事を確信した。確かにここに来る前に剣の帯刀を命じたのは自分だし、こんなに文官に負荷をかける上司は自分だけだろう。

「まだ私が上司だよ」

「クビになるでしょ？」

「まだわからないじゃんか！」

「クビですよ。あなたはそろそろ嫁にいきなさい。髪もこんなに切ってますって…」

「あ、それセクハラ！」

「心配してるんです」

「大丈夫だよお…でも帰国したら大使はクビかも。テーベンの復興に向かわされる気がする」

ルーも大きく頷いた。

「もうあそこの領主の血を引く人間がいらないから代理を立てられないし、そろそろ観念してテーベンに収まって言われるかも…」

ここまでアイデアを守るために必死に首都にしがみついて来たが今回の件で少し学んだ。支えると言う事は近くにいて出来る事もあるけど、遠くにいて自分にしか出来ないこともあるんだって。

だからモンク言わずにアイデアの為になる自分しか出来ないことを選んでいきたい。ルーとの結婚もあるから本当はテーベンになんか行きたくないが、事が落ち着くまでは先延ばしだろう。

「アリア、あなたは上司としては最低です。手が掛かり過ぎる」

「なっ…仕方ないじゃん。手を掛けるから補佐官が付けられたんだってば…」

「そうですね、でも人としては大好きですよ。強さの求め方があの方々とは違うのでしょうね」

「アリガト」

「でも何があってもこれは約束して下さい」

「なあに？」

「どんなに性欲が無さそうでも男は男ですから、あなたは襲われても切り抜けるだろうけど着替えを男に手伝って貰うのは私だけにして下さい」

絶句した。

まさかルーの居るここで言われるとは……。しかもシゼルは自分がルーのことを特別に思っている事を知っている筈。これはワザとだ。

「ルー、違うの！」

言い訳を慌てて並べようとしたその時、タイミングを計った様に扉を開けてカインが入って来た。

「違うないじゃん。だから言っただろう？嫁入り前の娘が男に肌を見せるなんて最低だって」

「カアイィーン、黙っててえ〜！」

「アリア、そんな最低な女でもシール王妃ならしてあげるよ！いつでもカリストを出ておいで」

そう言いながら自分を覗き込んだカインに少しの変化を見つけた。

「あ……声……背も」

声変わりのような辛そうな喋り方と急激な身長伸びに目を見張った。

その驚いている自分を見て勝ち誇った顔をで破顔した。

「半月で10cm伸びたよ！今まで儀式を先延ばしてたことで成長が止まってたみたいだ。王妃の席は長く予約出来ないからな？」

「ん……」

申し出は嬉しいが背後から不穏な気配がするのでカインもシゼルもその辺にして欲しい。

そおっと覗き見るとやっぱり口許に笑顔を張り付かせてルーがこちらを見ていた。と言うか目はガンギレしていた。間違いなく後で泣かされる……。

「カインはこんなとこになんて？今即位の準備で忙しいでしょ？」

「即位前に帰っちゃうアリアと元気になったシゼルに会いに来たんだよ」

「お見送り？アリガト！」

「簡単だね？帰ってアリアの厳罰が決まったら一生会えないかもしれないのに……」

「私を大人しく閉じ込めとく牢屋なんて造ってたら国庫の予算が尽きるわよ！」

「と言うか、僕はどうなるんだ？シールの魔法はどうしたら良い？そう言うのを何も聞いてないよ」

カインは少し苛立った様に碧い剣を叩いた。カインの力の本質を表しているその剣を腰に携えていた。

「そんな私の仕事ではありません！そう言う内容をカリストの人間に軽々しく頼むとこれから先が思いやられるよ。そもそもどこかの王子様が敵国大使に救援要請とか簡単に頼むのって有り得ないから！」

「アリア以外誰が出来るんだよっ！」

「シール王家の依頼になるならカリスト帝国を通してくれなきゃ困

るの！」

自分の冷たく言い放った言葉に捨てられた子犬の様な目をした。
でもここで甘えさせるわけには……。

わかった、元気で……と小さく言ったカインが頼りなくて可哀相
でまるで虐めてるみたいな気分になって……結局助け船を出してし
まう。

「カリストに帰ったらシールの魔法を研究したいんだけど、学術書
を持って帰るより手っ取り早いからカインの力を半分貸してくれな
い？代わりに私の力を半分貸してあげるから」

やっぱり犬だ。顔をあげて微笑み、ありがとうとハグの嵐。
手の掛かる子犬だな。

シール大使館にシゼルを大使代理として帰国すると一週間はルー
ファスにも陛下にも謁見出来ないくらいに事後処理で多忙だった。

ようやく目処が付いて、陛下に報告がてら会いに行ったところ、
人生の中で一番ギャフンと言わせられた出来事が待っていた。

帰国してすぐに謁見しておけば阻止出来たかもしれないと思うと、
後回しにしてしまった自分を呪いたくなる。

「も、う一度……お願いします、陛下」

「だから、テーベンを引き続きヴォグナー公爵家に見て貰うけど、
アリアしか血を引く者がいないでしょ？」

「ええ……御存知の通り、叔父も牢屋の中ですし……」

「だから養子を迎えたんだ！」

「『迎えたんだ！』って……親戚とは言えどうして陛下が……」

「嫌だなあ、僕はキミの後見人になったんだよ？そのまま爵位をア
リアに渡しても良いんだけど少しの間その養子に頑張って貰うこと
になったから仲良くやってチョウダイ！仮にも兄妹になるんだ、し」

いつにもまして声の明るいイデアはひとしきり説明を終えると近
衛兵に「彼を呼べ」と命じた。直後、入って来た人物を見て絶句す
る。

「…………本日より、ルーファスⅡハレーⅡヴォグナーで御座います」
「アリアも一番良く知ってるから仲良くできるね？戸籍はこちらに帰って来てすぐに書き替えておいたから！」

「よろしく願います」

無然と言うルー、あっかるく簡単に言うアイデア、喋ろうと口を動かすが全く声が出てこない自分：誰かこの状況を突っ込んでくれ！
「じゃあこのまま配置の話だけど、ヴォグナー准将がテーベン領主として配属で、ヴォグナー元帥兼任大使は正式にシール王国への駐在大使としての任を与える。以上」

「ええっ！？大使続投っ？？」

「何？不服？まだ何もしてないうちから引退するなんて甘いことはさせないよ」

恋人と戸籍上兄妹になった上にテーベンとシールに離される、これこそ自分は処罰を受けているに違いなかった。

とりあえず…………ダメもとで言うだけ言ってみる。

「アイデア様。私、結婚して引退しようかと…思ってたんですが…」
「それはおめでとう！君の結婚は僕も嬉しいよ。でもしばらくは諦めてくれるでしょ？こっちもレイスやマクレガーが抜けて手一杯なんだ」

アイデアのニッコリ、天使の微笑みで言ったそれを見て、
本当に…本当に少くっしだけ、誰かうちの王様を上手に暗殺してくれないかなあ…って思っちゃいました。

親愛なるアイデア様、

カリスト帝国外交顛末録。

アリアより、愛を込めて。

3. 外交術は元帥仕込み。(後書き)

これを書いた頃、某有名戦略シミュレーションゲームに填り、その勢いで書きました。(ゲーム全クリの勢いで書くこと多し。)

シールの設定は実は小説を書き出した頃から。常々全部創作の世界を使ってみたいと考えて作ったものです。

もう風化しそうなくらい前のノートを引っ張り出してきて、シールの世界の地図を見ながら小説を書くのは少し不思議な気持ちです。

あの頃完成しなかったストーリーが奉納されていくようで。

でも本編はまだ執筆中で、少しプレッシャー掛けなきゃ進まない達なので前章を投稿しました。

本編の主人公・ユーリちゃんは底抜けに明るくて更にテキトウです。アリちゃんはもう少し出てくるけど、本筋は若い者同士に任せて引っ込んでる予定ですので、彼女の活躍はここまで。

他の話で彼女達(ルーにしても、王子にしても)のその後を少し触れていたら……何年言い続けるかしら。

とりあえず頑張りマース。

またゲーム全クリしたら調子出るかな♪かな?かな?

とか言ってもう詰みゲーが無くなりつつある雪の夜。

番外：敵国からの迎え（前書き）

つなぎに書きました。

これの続きが今書いてるやつに繋がる予定。

予定が狂ったらゴメンナサイ。

番外 敵国からの迎え

シールから戻ったばかりのある明け方、アリアはなぜかアイデアが自分の上に馬乗りになっているところまで目が覚めた。

「いっても全く色気のある話ではなく、なぜかお付きのものが何人かと、建築大臣で。」

高級将校とは言え兵舎は狭い。そんな中に敷き詰めるように声を潜めて立っている姿は悍ましいものがあって、最初は悲鳴をあげてしまいそうだった。

正直言って、危機管理能力だっていると思うのでいくら気配を消してたってこうなる前に起きる気がする。そこはこの頭痛に起因するのだろう。

昨日の酒に一服盛りやがったな、チクショウ。

薬が残っているのか、寝ぼけているのか、言われている内容にピンと来なかったが、建築大臣の説明によるとそれはどうなんだろう？というような内容だった。

「アリアがイエスと言えはそれで全て丸く収まるんだ」

ニコニコと、いつもの調子で我等が陛下は無理難題を押し付ける。ダメです。とくに二つ目は致しかねます」

「そう…そうだね？アリアが断るとなると…」

ふううつと憂いの籠ったため息が通って行った。自分に押し付けるための演技だったとしてもそれは向こうが一枚上手だ。

「あ、アリア！じゃあシールに戦争吹っ掛けるときにい…」

「吹っ掛けませんし！」

「えー？だってシールの魔術についての研究結果だってアリアが出したんじゃない？あの魔法は禁呪なんでしょ？」

「かい摘まんで言えばカリストで使う魔法だって禁呪なんですって」「だからとりあえずシールを潰す！」

「陛下！口を慎んでください」

「従妹の前で自分を作るようになったらおしまいだと思うけど、まあこんな些細な願いも聞いてもらえない仲なら僕たちは既に終わってたのかな？」

先程よりも長くて重いふーっというため息を吐いてイデアはカクンと下を向いた。

わざとらしくシクシクと泣きまねをしてみたり。

っていうか、明け方！

そして自分の警備の番を狙って寝室に朝駆けしてくるなんて一国の王のやることでは無い！

なんて：そんな常識や定席を説いたところでこの人は何も変わらない。

「ワカリマシタ：だから！今はっ！30分だけ寝かせてください！明日またちゃんと聞きます！」

「やだなー、アリア。みんな起きちゃうだろ？しいー！じゃあ朝一で玉座の前に集合だっ、ゾ☆」

つん、と額を小突いて余計な華やかさをこの部屋にまき散らしながら、ようやく退場してくれた我が主だった。でも眠さにかまけて事の重大さをちゃんと理解していなかったのだ。

起きてからというものの、今朝のことが夢ではないと言うことを何回か確認した。

渋々謁見の間に向かうと、玉座の前で仁王立ちしている人物を見て夢ではなかったと言うことに神を呪った。

「アリア！」

「か、カイン王子…………何やってるんですか…………」

脱力した。ピヨコピヨコと飛び跳ねてこちらに手を振る彼は紛れもなく敵国の王子様。

カインⅡウエルズⅡシールその人だった。

養生も兼ねて城内警備に当たっているとは言え、警備一般全てを取り仕切っている自分の目をかいくぐってどうしてここにカインが居るのだろうか？

明け方に依頼された一個目の難題は王子が極秘入国するから警備に付け、だった。

勝手に入ってきてくれてれば迎えに行く手間は省けるものの、ここまで無事じゃなかったらそれこそ国交に関わるのに…………。

「アリア？」

「どうやってお越しで？」

「え？普通に。船で」

「シールの艦隊で？」

「何言ってるの？それじゃあ極秘入国にならないじゃんか！普通に商船使ったよ」

その外交感覚はどこから？呆れ半分感心半分。

自分は嫌いじゃないのだが、この感覚は王子様としてはどうなのだろうか？

「アリアって本当にカリストでは軍服着てるんだね？」

「ええ…………軍人ですのう」

「ふーん？なんか向こうで喋ってるときと雰囲気違う？」

「ええ。勤務中ですから」

顔が引きつる。だが構わずマイペース王子は言った。

「こっち滞在中はヴォグナー公爵家で面倒見てくれるって言われたんだけど案内してくれる？」

カインはニコニコと旅行鞆を自分に差し出す。そう言うところはしっかり王子様だ。

皇帝陛下の勅命も頂いているわけだし逆らう言われもなく鞆を丁重にお預かりした。

「アリアはドレス着なよ。僕と一緒に歩いてて恥ずかしいじゃないか」

確かに、良いとこのお坊ちゃま風の格好をしたカインの横を軍服

で歩いていたら要人警護だつてすぐにばれてしまう。

「あとで……着替えます」

「うん。宜しい！」

満面の笑みでカインが笑う。随分と雰囲気が違うのはアナタの方です。開放感溢れるーっ！て顔で笑われると何も言えなくなってしまう。そもそも自分が何かを進言できるほどの地位では無いから従うのみなのだが、シールにいた頃はもっとお利口さんの王子様だった。

自分は断然フランクな方が好きな庶民派だが、フランクというよりは……うちの陛下張りの居直りにみえて少し鼻に掛かる………が、まあ仕方ない。

少しだけ我慢すれば帰ってくれるお客様なのだから甘んじようと呪文を唱えるように無心で祈った。

「アリア！早く街を案内してよ！」

「王子……なんでそんなにフランクなんですか？」

やはり訊いてしまった。するとカインは当然のように返した。

「逆に今王子様扱いされると危ないからだよ。そんなのも分からないでよく警護担当してるね？バカなの？」

「……………」

笑顔が凍った。

クソガキっ！王子だと思って好き勝手言いやがって！

いや、言い返せませんけどね、でも暗殺とかは得意なんですよお？

「アリア、早く行こ！」

ちょっと腹を立ててたって気付かないふりして懐いてくる王子は世渡り上手だと思うのだ。こんな顔の良い男の子を連れて外を歩くのだって実際悪い気はしない。爺様連中相手ばかりする普段の要人警護よりも余程華がある。

渋々を装って街を案内するという役得を手に入れたのだった。

シールの街並みと違い、カリストの街並みは情緒が無いと思う……ってシゼルが前に解説していた。あまり建造物に詳しくないのでそのところ説明できないのだが、『味気ない』というのが自分の意見だ。

馬車を走らせること数分。車窓から建物をじいーと見つめている王子が何を見ているのか、支店がよく分からずに困っていた。何か分かる内容なら説明でもしてあげれば観光になるのだろうか、こういうことはあんまり得意ではない。多分ダメな方だ。

少しは何か補足しようと口を開けば国の警備に関わるような事を漏らしそうになり、自分が軍備でしか国を見ていないという事実に気付かされる。

「アリア、あれは何？」

ようやくの王子からの質問に喜んで車窓に近寄った。外を覗けば立派な軍事施設が……。

「……………ぐ、軍の保養所です。あそこで、き、球技とかできます」

※演習場です。大規模軍事演習のために広々としています。

「じゃあ、あれは？」

「ぐ、軍の……………食堂です。すごくっ！見晴らし良いんです。美味しいです！」

※軍総司令部です。市中が見渡せるように高く作ってあります。因みにいつもは城ではなくあちらに詰めています。

「じゃあ、あっちは？」

「軍の……………宿舎です。夜も朝もない人が多いから窓が無いんです」

※武器庫です。火薬や薬品が多いから通気には窓を使っています。ん。

もう嫌だ……………。

次に尋ねられても自分の誤魔化しではきかない気がする。

ふるふると震えているとプツとカインが吹き出した。

「アリアは何で軍人なの？全然向いてない。ポーカーフェイスでなくて大丈夫？」

「外交官の方が向いてません。私は前線に赴くには丁度良いスキルをいっぱい持つてるから使われてるだけですよ。軍人って言う職業に本当に向いているのはうちの……」

「ハレー准将？彼はすぐ向いてそうだね？」

「はい。今は少将に昇進しました」

「あ、本当？ハレー少将」

「……………ヴォグナー少将です」

「は？」

「彼は今、ヴォグナー少将です」

「アリア……………いつ結婚したの？」

「してません？私も彼も独身です」

「え？よく分からないんだけど」

「ヴォグナー公爵家の財産管理には自分では心許ないと判断されて、養子縁組みが勝手になされました。私の兄になりました」

「え？…………アリア、やっぱりバカなの？」

バカなのはうちの陛下です。

と言ってやりたかったがそれを流石に他国の王族に伝えるのは憚れて神妙にそれを聞くに留まった。どこから見たってこの勅令は変なのだ。

「ふーん。アリアはじゃあ跡継ぎじゃなくなったってこと？」

「今でも跡継ぎです。でも5年間の貴族資格停止が言い渡されてるのでその間は継兄が公爵家を見ます」

「そんななのによく普通に働いてるね？アリアと彼は恋人じゃなかったの？」

「……………」

「うちに嫁に来れば？」

「行きません。今の私は貴族でもないしがない公務員です。仕事な

ら貴方を持て成しもするけど、そうではなければ口を開けるような身分じゃありませんから」

「そんなの気にしない。おいでよ、アリア」

「行きません。一公務員として職務を全うしていただくだけです」

「ふーん………つまらない人生だね？」

ツマラナイ………とはっきり言われてしまうとうしろもうもない気持ち湧き上がってきた。言い返すほどの権力も、交わして微笑むほどの外交力も無く、ただ言葉に詰まって黙った自分はカインにとって滑稽にしか見えないのだろう。

帝都にある公爵家は自分の資産下には無いが、使うことを許されていた。謂わば赤紙の貼られた状態だが、これがあるから自分は国の犬として公務員に納まっているわけだ。全て取り上げてしまっ自分自由にする気なんてあの陛下には更々無い。

実の両親達の大事にしていた思い出の屋敷ぐらいい何があっても手放したくないと思うのは今も昔も変わらない。でも自分がここに縛られているのを見たら、きっと両親は屋敷を売れというだろう。そういう人たちだ。

カリストの古き建築法を基にして建てた、カリスト帝都の中ではかなり珍しい屋敷。それがうちだ。帝都の中でも城の次ぐらしいの古さを誇る。

街並みと違う特色を持つ屋敷にカインはしばらく話しかけても返事が帰ってこないほどに見入っていた。

外の壁面にずっと彫られている花々、そのモチーフがそのまま天井にも使われている。それが硬い石材を使われているところがカリスト流なのだ。少し渋みのあるダークグレーになった壁一面は元々の石の深みとその月日の流れの深みの色だ。

この屋敷を城に取られたら、或いは陛下が国有財産として保管し

ていつて下さるかも知れないが、街を見ての通りだ。軍事施設に建て替えられてしまう可能性の方が大きい。そして帝都が襲われればここが一番に狙われる。

自分の守るべきものはこの一カ所に集中しているから、利便性を考えたってカリスト帝国軍元帥総司令官という地位はこれ以上ないくらいのものだ。

「カイン、なんで今回はカリストにいらしたんですか？」

「アリアに会いに。しばらくシールはシゼルが大使代理だって言うから」

「何ですか……そんな個人的理由で国を渡るなんて」

「個人的でもないよ！正式に要請しにきたんだ。シールの使っている魔法の研究。被験者がちゃんと揃ってて、有能な魔道士もいるカリストに頼みに来たんだよ」

「……ってそれは陛下に言いました？」

「うん。そうしたら取りあえずアリアが持て成すって」

押し付けられたー！

あの陛下はシールがどうなろうと知ったことではないのだ。自分に今朝命じた二つ目の事案。それはシールの魔法を無効化できる建物の建造に内密で携われ、という勅命。

この考え無しのバカ王子を利用してシールの全てを吸い出してこい、と。

カインを嫌いではない。でもそれ以上にうちの陛下に逆らえないのは……。

「カイン……」

「一緒にシールに帰ろう？」

「……」

「ダメ？」

「ダメじゃありません。でも……私は敵国の人間だと言うことを絶対に忘れないで下さい」

ようやく自分は彼の目を見て本当のことが言えた。

自分を信用するな、と。きつとずっと言い続けるんだ。
そんな自分に彼はこう言った。

「当たり前じゃないか！アリアはバカなの？」

一枚も二枚も上手のようだ。

斯くして、自分達はこの世界の理に触れることとなる。

n
e
x
t↓シール英雄憚

番外 敵国からの迎え（後書き）

もともと大規模演習編っていう番外があったんです。
でも、どこかに行ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8405q/>

カリスト帝国外交顛末録

2011年2月18日21時10分発行